

# 府 中 遺 跡 III

——都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査——

令和5年3月

大阪府教育委員会



# 府 中 遺 跡 Ⅲ

—都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査—

大阪府教育委員会



## 序文

本書で報告します府中遺跡は、和泉市府中町及び黒島町に所在し、東西約1km、南北約1.2kmの範囲に広がり、古代寺院である和泉寺跡や和泉國府を含む遺跡です。これまでの発掘調査から、古代のみならず縄文時代から近世に至るまで連綿と人々が生活を営んできたことがわかっています。

大阪府教育委員会では、都市計画道路大阪岸和田南海線の街路事業に伴い、平成17年より継続的に府中遺跡及び和泉寺跡の発掘調査を実施してきました。これまでの調査の特筆すべき成果としては、奈良時代の人名などの文字を宣告した瓦の発見や、弥生時代から古墳時代にかけて流路から出土した大量の土器、また同時期の竪穴住居跡、掘立柱建物跡が挙げられます。

本書で報告する調査成果は、令和元年度から令和3年度にかけて実施したもので、これまでの調査成果と同様に弥生時代から古墳時代の竪穴建物、土坑などを検出し、集落の広がりを確認することができました。また平安時代の建物跡、中世の礫敷溝などを検出し、古代以降の集落の広がりについても新たな知見を得ることができました。平成17年より実施してきた府中遺跡における調査は終盤を迎えつつありますが、この南北約800mに渡る調査の中で、多くの成果を得ることができました。これは府中遺跡だけでなく、ひいてはこの地域の歴史を理解するうえで欠かすことのできない成果と言えるでしょう。

最後になりましたが、調査にあたっては、地元関係者ならびに和泉市文化遺産活用課、大阪府都市整備部の方々には多大なご理解とご協力をいただきましたことに深く感謝いたします。

本府教育委員会では文化財の調査や保護、活用などの事業をこれからも進めてまいります。今後ともいっそうのご支援をお願い申し上げます。

令和5年3月

大阪府教育庁文化財保護課長

稲田 信彦



## 例言

1. 本書は、大阪府教育委員会が大阪府都市整備部の依頼を受けて令和元～3年度に実施した、都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業に伴う、和泉市府中町及び黒島町所在の府中遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は文化財保護課調査事業グループ技師 奈良拓弥（令和元年度）、同グループ副主査 木村啓章（令和2・3年度）を担当者として実施した。
3. 遺物整理は、文化財保護課調査管理グループ専門員 藤田道子、文化財企画グループ主査 奈良拓弥、同グループ主査 木村啓章を担当者として実施した。
4. 発掘調査の調査番号は19020（令和元年度）、20021・21002（令和2・3年度）、21026（令和3年度）である。
5. 本書に掲載した遺構写真の撮影は発掘調査担当者が行い、遺物写真の図版18～図版34は、イトーフォトに委託した。
6. 発掘調査にあたっては、空中写真測量、図化作業を株式会社イビソク（19020、20021・21002第3区）、株式会社NAC総研（20021・21002第1・2区）、株式会社アクセス（21026）に委託して実施した。
7. 本書の執筆は、文化財保護課文化財企画グループ主査 奈良拓弥（第3章第1節）、木村啓章（第1章、第2章、第3章2節～5節、第4章）が行い、編集は木村が行った。
8. 発掘調査の出土遺物や写真・図面等の記録資料は、大阪府教育委員会で保管している。
9. 発掘調査・遺物整理にあたっては、以下の方々よりご指導・ご教示・ご協力いただきました。  
大阪府都市整備部、和泉市教育委員会（順不同）
10. 発掘調査・遺物整理ならびに本書の作成に要した費用は、大阪府都市整備部が負担した。

## 凡例

1. 本書で用いる座標値は世界測地系（国土地理座標第VI系）に基づき、方位針は座標北を示す。水準値はT.P.値（東京湾平均海面）を用い、本文および挿図中ではT.P. +○mと表記する。
2. 遺構番号は、遺構の種類に関係なく、検出した順に付している。これは発掘調査での記録と合致する。また、掲載遺物に付した番号は通し番号で、挿図と図版の番号は一致している。
3. 土層および遺物の色調については、『新版 標準土色帖』（小山正忠・竹原秀雄 / 2006年度版）に拠る。
4. 遺物実測図の断面は、須恵器を黒塗り、瓦器・瓦質土器を網伏せとし、その他を白抜きとした。
5. 引用・参考文献は巻末に一括して記載した。

## 本文目次

序文	
例言	
凡例	
目次	
第1章 調査の経過と調査方法	1
第1節 調査にいたる経緯	1
第2節 調査の方法	2
第2章 地理的環境・歴史的環境と既往の調査成果	5
第1節 地理的環境	5
第2節 歴史的環境	6
第3章 令和元年度調査成果	11
第1節 調査の経過	11
第2節 履序	11
第3節 調査成果	11
第4節 小結	16
第4章 令和2・3年度調査	17
第1節 調査の経過	17
第2節 履序	17
第3節 第1・2調査区調査成果	17
第4節 第3調査区調査成果	29
第5節 小結	31
第4章 令和2・3年度調査	33
第1節 調査の経過	33
第2節 履序	33
第3節 第1調査区調査成果	33
第4節 第2調査区調査成果	38
第5節 小結	46
第5章 総括	47
引用・参考文献	49
観察表	51
抄録	

## 挿図目次

図 1 調査地位置図.....	1
図 2 現往の調査区と令和元年度～3年度調査地位置図.....	3
図 3 地区割図.....	4
図 4 府中遺跡周辺土地条件図.....	5
図 5 府中遺跡周辺の遺跡.....	7
図 6 周辺の主要調査地点.....	8
図 7 A・B 区壁断面図.....	12
図 8 第1・2面平面図.....	13
図 9 003溝平面図.....	14
図 10 第3・4層、遺構出土遺物実測図.....	15
図 11 第1・2調査区東壁断面図.....	18
図 12 第1・2調査区第1面平面図.....	19
図 13 第1・2調査区第2面平面図.....	20
図 14 049土坑平面・断面図.....	21
図 15 081土坑平面・断面図.....	21
図 16 挖立柱建物1平面・断面図.....	22
図 17 079・090自然流路平面・断面図.....	23
図 18 092土坑平面・断面図.....	24
図 19 遺構出土遺物実測図.....	25
図 20 第1層・2層出土遺物実測図.....	26
図 21 第2層出土瓦実測図.....	27
図 22 第3層出土遺物実測図.....	28
図 23 第3調査区平面・断面図.....	30
図 24 004土坑・005自然流路平面・断面図.....	31
図 25 001落ち込み・第3層出土遺物実測図.....	30
図 26 第1調査区西・南壁断面図.....	34
図 27 第1調査区平面図.....	35
図 28 048・049・051・054土坑平面・断面図.....	36
図 29 062・063・064土坑平面・断面図.....	37
図 30 第1調査区出土遺物実測図.....	38
図 31 第2調査区平面・断面図.....	39
図 32 001溝・003土坑平面・断面図.....	40
図 33 002土坑平面・断面図.....	40
図 34 005竪穴建物・006土坑平面・断面図.....	41
図 35 007竪穴建物・009・010土坑平面・断面図.....	42
図 36 001溝出土遺物実測図.....	43
図 37 遺構出土遺物実測図.....	44

図3 8 第2・3・4層出土遺物実測図.....	4 5
図3 9 遺構変遷図.....	4 8

## 表目次

表1 周辺の主要調査地点.....	9
-------------------	---

## 原色図版目次

### 原色図版1 調査地遠景

### 図版目次

- 図版1 令和元年度調査 A・B区 全景・壁面  
図版2 令和元年度調査 A・B区 遺構  
図版3 令和元年度調査 B区 遺構(1)  
図版4 令和元年度調査 B区 遺構(2)  
図版5 令和2・3年度調査 第1・2調査区 全景・壁面・壁面  
図版6 令和2・3年度調査 第1・2調査区 遺構(1)  
図版7 令和2・3年度調査 第1・2調査区 遺構(2)  
図版8 令和2・3年度調査 第1・2調査区 遺構(3)  
図版9 令和2・3年度調査 第1・2調査区 遺構(4)  
図版10 令和2・3年度調査 第3調査区 全景・壁面・遺構  
図版11 令和3年度調査 第1調査区 全景  
図版12 令和3年度調査 第1調査区 遺構(1)  
図版13 令和3年度調査 第1調査区 遺構(2)  
図版14 令和3年度調査 第2調査区 全景・壁面  
図版15 令和3年度調査 第2調査区 遺構(1)  
図版16 令和3年度調査 第2調査区 遺構(2)  
図版17 令和3年度調査 第2調査区 遺構(3)  
図版18 令和元年度調査 A・B区 出土遺物(1)  
図版19 令和元年度調査 A・B区 出土遺物(2)  
図版20 令和2・3年度 第1・2調査区出土遺物(1)  
図版21 令和2・3年度 第1・2調査区出土遺物(2)  
図版22 令和2・3年度 第1・2調査区出土遺物(3)  
図版23 令和2・3年度 第1・2・3調査区出土遺物  
図版24 令和2・3年度 第1・2調査区出土遺物(4)  
図版25 令和2・3年度 第1・2調査区出土遺物(5)  
図版26 令和2・3年度 第1・2調査区出土遺物(6)  
図版27 令和2・3年度 第1・2調査区出土遺物(7)  
図版28 令和2・3年度 第3調査区 出土遺物  
図版29 令和3年度 第1調査区 出土遺物  
図版30 令和3年度 第2調査区 出土遺物(1)  
図版31 令和3年度 第2調査区 出土遺物(2)  
図版32 令和3年度 第2調査区 出土遺物(3)  
図版33 令和3年度 第2調査区 出土遺物(4)  
図版34 令和3年度 第2調査区 出土遺物(5)

# 第1章 調査の経過と調査方法

## 第1節 調査にいたる経緯

府中遺跡は、和泉市の西北部、府中町を中心に一部黒鳥町、桑原町に広がり、標高 20 ~ 24 m付近の段丘上に展開する遺跡であり、南北約 1.2km、東西約 1 kmを測る範囲をもつ。

遺跡の中央部に所在する泉井上神社のあたりには和泉国府跡が想定されており、遺跡の南部は和泉寺跡の一部が重なる。また、遺跡の中央部を小堀街道（熊野街道）が南北に縱断する。

今回の発掘調査は、都市計画道路大阪岸和田南海線街路築造事業（府中工区）に伴う記録保存調査である。この工区については、平成 17 年度以降、本府教育委員会において順次発掘調査を実施し、市道府中阪本線以南については、すでに調査を終了し報告書が刊行されている（大阪府教育委員会 2012、2013、2015）。

市道府中阪本線以北については、平成 27 年度に事業者である大阪府都市整備部鳳土木事務所建設課と文化財保護課が協議を行い、建設予定地内を事前に確認調査を行い、その結果に基づいて発掘調査を実施することとなった。その結果、平成 27、28 年度及び平成 29 年度にわたって発掘調査が実施され、それぞれ平成 29 年度、平成 30 年度に調査報告書が刊行された（大阪府教育委員会 2018、2019）。

本書では、府中遺跡における都市計画道路大阪岸和田南海線建設予定地の未調査部分において、さらに調査を実施した箇所を報告するものである。今回の調査対象地は令和元年度調査、令和2・3年度調査、令和3年度調査の大きく3ヶ所に分割される（図1・2）。令和元年度調査は、平成 27、28 年度

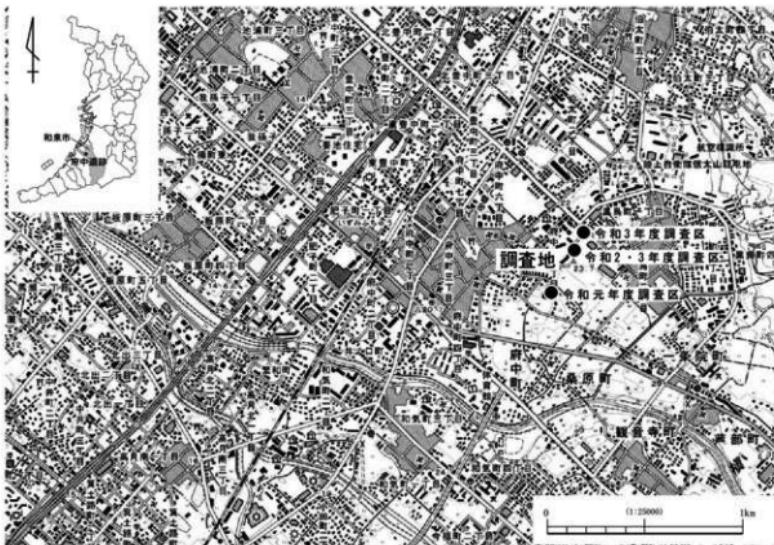


図1 調査位置図

調査D・E区の東に隣接し（B区）平成29年度調査第2区の南に隣接する箇所（A区）である。令和2・3年度調査は、平成27・28年度調査F・G区の市道を挟んで北側の箇所（第1・2調査区）及び平成29年度調査第1区の南に隣接する箇所（第3調査区）である。令和3年度調査は市道和泉大津阪本線に接続する部分で、平成29年度調査第1区の市道を挟んで東側の箇所（第1調査区）及び平成29年度第1区の西に隣接する箇所（第2調査区）となる。これらの所在地は和泉市府中町と黒鳥町にまたがっている。これらの調査により市道府中阪本線以北、和泉大津阪本線までの区間の調査については終了したことになる。

本発掘調査は、令和元年12月から令和2年3月、令和3年1月から6月、令和3年10月から12月に実施し、それぞれ調査面積203m<sup>2</sup>、898m<sup>2</sup>、335m<sup>2</sup>の合計1436m<sup>2</sup>であった。

## 第2節 調査の方法

### 調査の経過

調査の経過については、各年度調査第1節において報告する。

### 調査の方法

地区設定については、世界測地系（JGD2000）の平面直角座標系第IV系に基づく、第1区画南北6×東西8km、第II区画南北1.5×東西2km、第III区画100×100m、第四区画10m×10mとした図上半の区割りのとおり設定している。本調査地は、X=-168,000、Y=-52,000が基線となり、第I区画でE4・D4に位置する。さらに第II、第III区画では令和元年度調査はE4-2-20、D4-14-2A、令和2・3年度調査はE4-2-1L、E4-3-20L、E4-2-1M、E4-3-20M、令和3年度はE4-3-20K、E4-3-20Lにまたがる区割りとなる。遺物の取り上げについては、本来この区画を基本とするものであるが、令和2・3年度、3年度調査区については座標系に対し斜行することから、各調査区の形状に合わせて図のとおり、令和2・3年度は5mメッシュ、令和3年度は10mメッシュでの地区を設定した（図3）。

遺構番号は、遺構の種類に関係なく各年度調査区ごとに3桁の通し番号を付した。なお令和2・3年度の第1・2調査区についてはU字溝を境に隣接するため、通し番号を付した。

掘削に際しては、整地上、近現代の盛土、近代耕作土をバックホウで掘削し、その下層については人力で掘削し、遺構検出・遺構掘削を行った。遺構掘削に際しては、半裁または地層観察用の畦を残すことによって地層断面の観察、写真撮影、断面図の作成を行った。

検出した遺構面の実測について、遺構全体図は図化作業の効率化をはかるために、ドローンによる空中写真測量を実施した。個々の遺構、遺物出土状況等の実測については、調査区周辺に配した4級基準点をもとに、必要に応じ20分の1・10分の1の縮尺で個別に実測図を作成した。また、調査区の土層断面図は、原則として20分の1の縮尺で作成し、東京湾平均海面（T.P.）を基準とした。

撮影にはデジタルカメラ（フルサイズセンサー及びAPS-Cセンサー）を使用し、特にフルサイズセンサーのデジタルカメラは、遺構検出面の全景や重要な遺構の撮影の際に使用した。

整理作業について、現場で作成した遺構図面類は、台帳を作成し、報告書に掲載するものについてはデジタルトレースを行った。出土遺物については、洗浄、マーキング、接合、復元等の作業を適宜実施し、必要なものについては実測図を作成し、報告書掲載図面についてはデジタルトレースを行った。デジタルトレースには、Adobe社のIllustratorCS4およびCCを使用した。報告書の編集作業には、Adobe社のIllustratorCS4およびCCを使用した。また報告書掲載遺物については、委託作業にて撮影を行った。

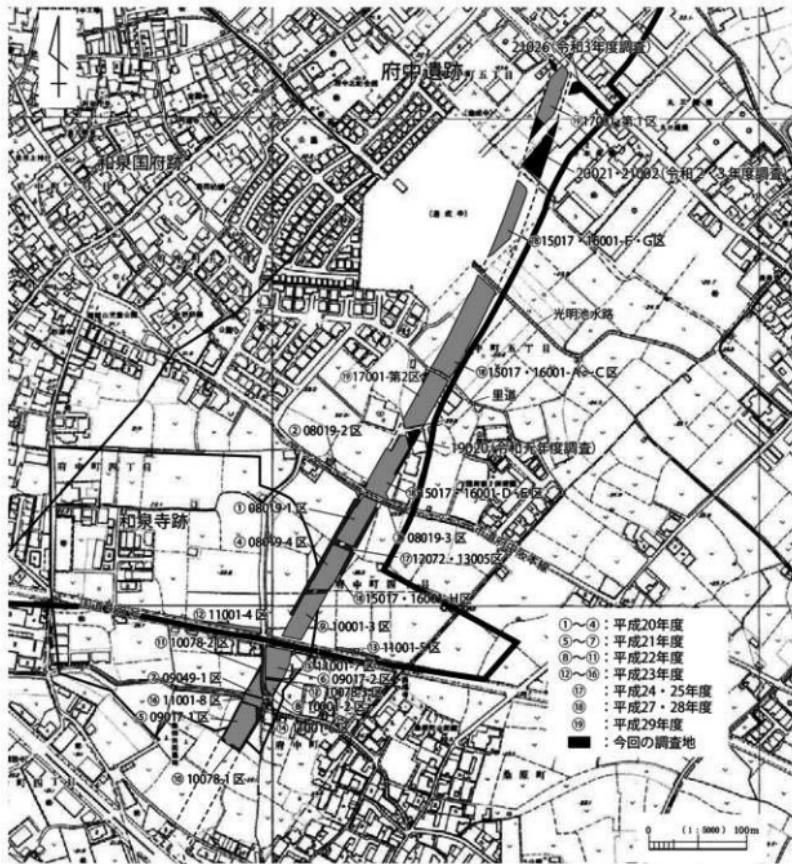


図2 既往の調査区と令和元年度～3年度調査地位置図

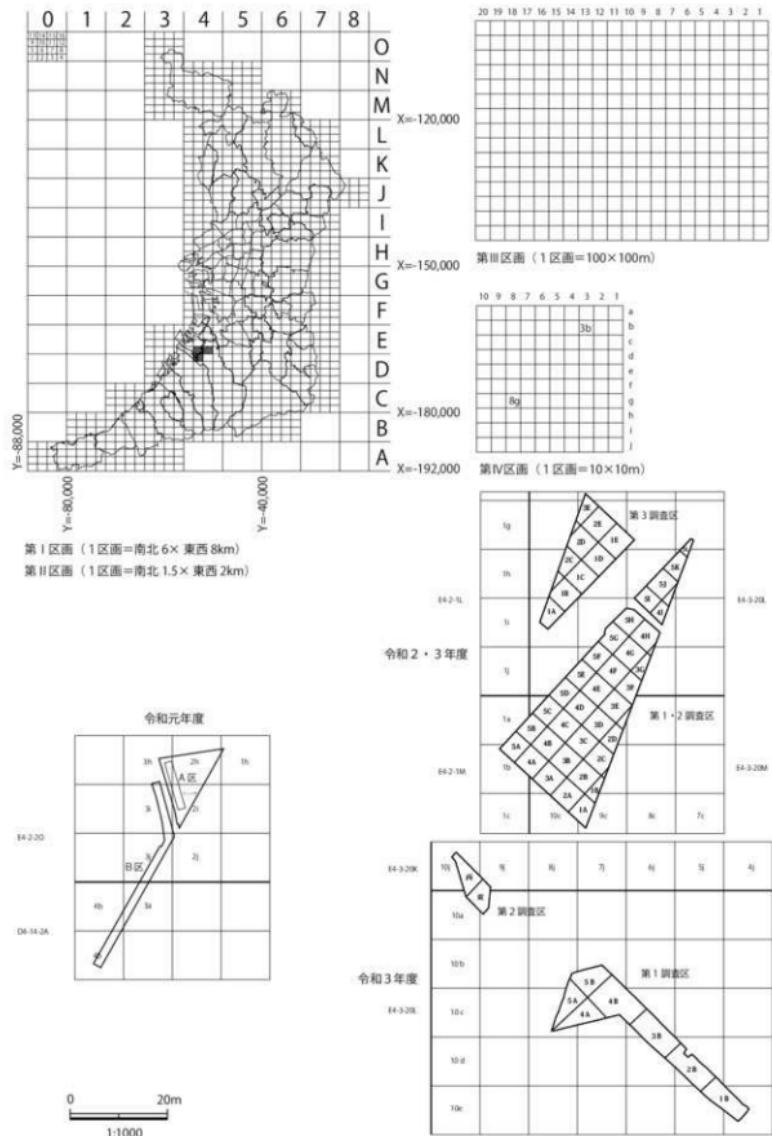


図3 地図割り図

## 第2章 地理的・歴史的環境と既往の調査成果

### 第1節 地理的環境

和泉市は大阪府の南西部に位置する。市域の南部には和歌山県との境となる和泉山地があり、その北側は海岸部に向けて泉州丘陵や信太山丘陵が広がっている（図1・4）。横尾川や松尾川は和泉山系を源流として、これらの丘陵地、台地の間を流れている。流域に小規模な谷底平野を形成するもののその発達は悪く、中流域では段丘を形成させながら蛇行している。横尾川右岸の丘陵地、台地は、信太山丘陵と呼ばれ、現在自衛隊の駐屯地や演習場がある。丘陵上には比較的平坦な部分もあり、縁辺部には谷を発達させる。これらの中には光明池や大野池などのように谷下流に堤を設けた溜池がみられる。また横尾川と松尾川の間の丘陵地、台地は和泉丘陵とよばれ、こちらも縁辺部には谷を発達させており、梨本池や谷本池などのように堤を設けて溜池となっている部分がある。

府中遺跡は横尾川右岸に位置し、国土地理院発行の数値地図 25000（土地条件図）によれば（図4）、信太山丘陵から派生する更新世段丘に位置する。調査地周辺ではこの段丘面の平坦地が横尾川から丘陵の間1km程度の幅で広がり、大阪湾側にむかってこの平坦地がさらに広がっていく。この段丘面上には、土地条件図から谷底平野、凹地、水域、旧水部があり、段丘面形成後も河川等による堆積が繰り返されていたことが想定される。実際に大阪岸和田南海線の築造に伴う既往の調査からもその様相を窺うことができる。たとえば、市道府中阪本線よりも南で行われた調査では旧河川を検出しておらず、それが古墳時代後期まで完全には埋積されず窪地として残存すること、またその後に形成された古代の遺構面も洪水堆積層によって覆われることが報告されている（大阪府教育委員会 2012・2013／報告書については表1参照、以下同じ）。また市道府中阪本線以北においても平成27・28年度調査A・B・C区、平成



図4 府中遺跡周辺土地条件図（国土地理院地図を改変 1:25,000）

29年度調査第2区において複数の自然流路跡を確認している（大阪府教育委員会2018・2019）。これらは古墳時代から平安時代にかけて埋没したことがわかつており、本報告における令和2・3年度調査においても小規模な自然流路を検出しており、河川の影響を受けた範囲が北側まで広がっていた様相が追認された。また平成29年度調査第2区では古墳時代中期前半とされる土壙墓が検出された遺構面基盤層を構成する水成堆積物が紀元前1401～1266年（縄文時代後期後葉～晩期前葉）に遡ることを報告している（大阪府教育委員会2019）。このことからも当該地が縄文時代以降、河川による堆積が頻繁に繰り返されていたことがわかる。なお、これらの旧河川の流向については、おむね東西方向に流れるものと想定することができ、流路が固定化する前の横尾川およびその支流による影響を受けていると考えて大過なかろう。

当地一帯は中世以降、急速に生産域と化していくことがこれまでの調査から判明している。河川による堆積が繰り返されていた当地一帯において、水田を経営するためには灌漑施設の整備が不可欠であつたはずであり、地形の発達とともに水田の発達を可能とした水利の発達、およびその整備をもたらした社会背景についても、理解を深めて行く必要がある。

## 第2節 歴史的環境

本節では、府中遺跡周辺の遺跡の動向を確認したのち、大阪岸和田南海線築造に伴う既往の調査で得られた主要な成果について確認する。まず遺跡周辺の動向について、時代ごとに概観する。

**旧石器時代** 和氣遺跡で翼状剥片が、大床遺跡、伯太北遺跡、万町北遺跡、觀音寺遺跡、上フジ遺跡、西山遺跡等で国府型ナイフ形石器が見つかっている。

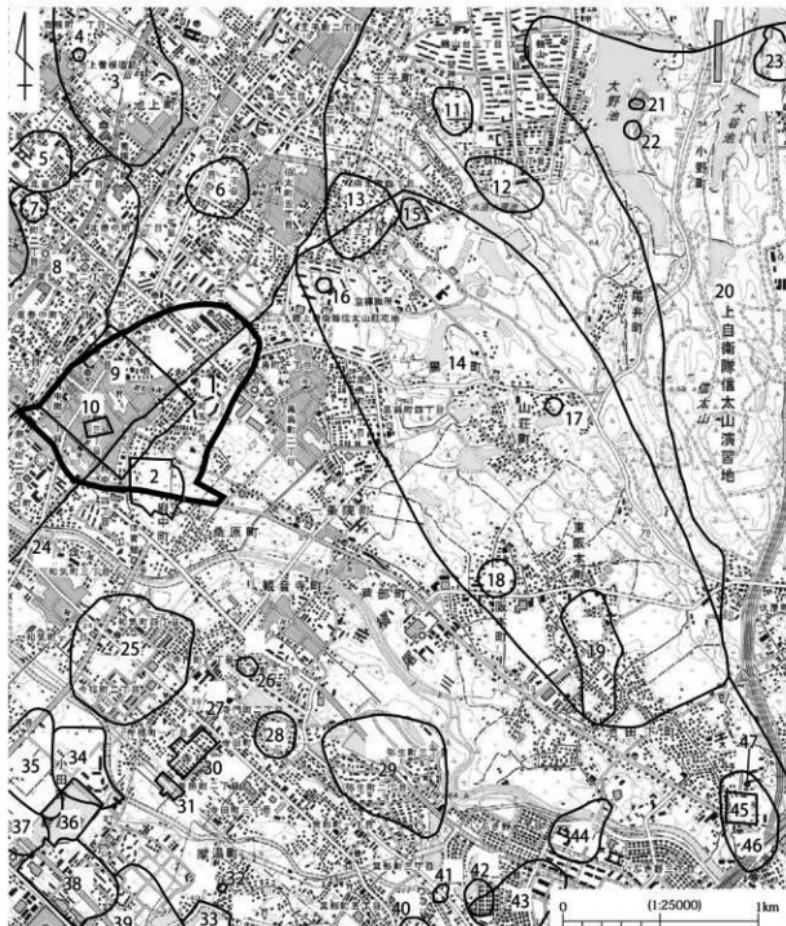
**縄文時代** 前期では仏並遺跡、池田寺遺跡、小田遺跡などで土器が出土している。中期では仏並遺跡で竪穴建物や土器棺墓、府中遺跡、池田寺遺跡、池上曾根遺跡、万町北遺跡などで土器などが出土している。晚期では仏並遺跡、府中遺跡、池上曾根遺跡、万町北遺跡などで土器などが出土している。

**弥生時代** 前期中葉には池浦遺跡、前期後葉には環濠をもつ大集落である池上曾根遺跡が現れる。中期には池上曾根遺跡で集落の拡大が認められ中期後葉には最盛期を迎える。この時期には横尾川中流域の万町北遺跡、池下田遺跡、松尾川右岸の寺田遺跡、左岸の輕部池遺跡で建物遺構が検出されている。後期には池上曾根遺跡の大規模集落が解体し規模が縮小する。また觀音寺山遺跡や惣ヶ池遺跡が認められるようになる。後期後葉には今木遺跡、輕部池西遺跡、山ノ内遺跡で建物遺構が検出されている。庄内式併行期には府中遺跡や豊中遺跡、七ノ坪遺跡、寺田遺跡でも集落が検出されている。

**古墳時代** 前期には府中遺跡、和氣遺跡、寺田遺跡、小田遺跡、田治米宮内遺跡遺跡、西大路遺跡等で引き続き集落が営まれ、寺田遺跡、田治米宮内遺跡は後期にかけて継続する。古墳では和泉黄金塚古墳、摩湯山古墳、丸笠山古墳、久米田古墳群、信太千塚古墳群などが造営される。また陶邑窯跡群では須恵器生産が盛行する。

**飛鳥～奈良時代** 飛鳥時代には万町北遺跡、二俣池北遺跡などが古墳時代から継続する。奈良時代ではこれらに加え、府中遺跡、板原遺跡、小田遺跡などで集落が形成されている。この時期の古代寺院跡としては、信太寺跡、和泉寺跡、坂本寺跡、池田寺跡、和泉國分寺跡等がある。今回の調査と一連の道路事業による和泉寺跡の調査では、推定寺域の外側、南西部付近から文字瓦等が多数出土している。府中遺跡内には和泉国府が推定されているが、関連する明確な遺構は見つかっていない。

**平安時代** 池田寺遺跡、万町北遺跡、二俣池北遺跡などで奈良時代から集落が継続している。万町北遺跡では「大同五年」（810年）と記された木簡が出土している。



- |                  |               |             |           |          |               |                 |
|------------------|---------------|-------------|-----------|----------|---------------|-----------------|
| 1 府中道跡           | 2 和泉寺跡        | 3 池上曾根道跡    | 4 曾根城跡    | 5 七ノ坪道跡  | 6 伯太北道跡       | 7 大福寺跡          |
| 8 曽中道跡           | 9 和泉国府跡       | 10 国府城跡     | 11 聖淵社道跡  | 12 惣ヶ池道跡 | 13 伯太瀬岸塚跡     | 14 信太千塚古墳群      |
| 15 丸笠山古墳         | 16 王塚古墳       | 17 黒鳥山荘遺跡   | 18 抜本寺跡   | 19 順成道跡  | 20 陶邑窓跡群大野池地区 |                 |
| 21 大野池道跡(北地区)    | 22 大野池道跡(南地区) | 23 山田古墳群    | 24 熊野街道   | 25 和氣道跡  | 26 観音寺城跡      |                 |
| 27 孤塚古墳          | 28 寺門古墳群      | 29 観音寺山道跡   | 30 寺道跡    | 31 摩湯北道路 | 32 イナリ古墳      | 33 摩湯山古墳        |
| 34 輢部池道跡         | 35 小田道跡       | 36 輢部池      | 37 輢部山西道跡 | 38 山ノ内道跡 | 39 山県北道路      | 40 和泉丘陵 A1 地点道跡 |
| 41 和泉丘陵 A87 地点道路 | 42 池田山道路      | 43 唐国池田山古墳群 | 44 池田下道路  | 45 池田寺跡  | 46 池田寺道跡      | 47 池田寺瓦窯        |

図5 府中道跡周辺の遺跡 (1:20,000)

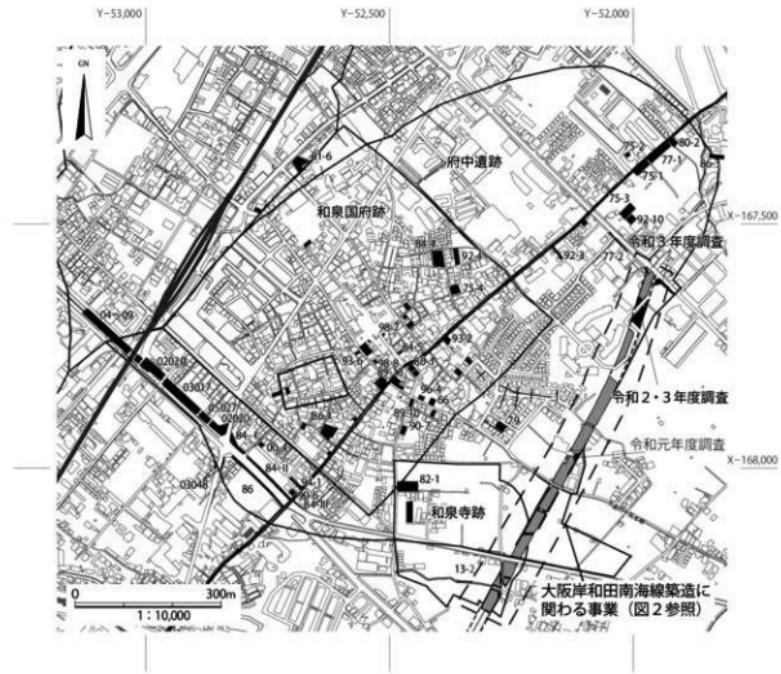


図6 周辺の主要調査地点（調査箇所の番号は表1と対応）

中世 二俣池北遺跡、水込遺跡、山直中遺跡、和氣遺跡、府中遺跡で集落跡が検出されている。

次に、大阪岸和田南海線築造に伴う既往の調査で得られた主要な成果について、遺跡の南方で実施された調査から順に確認する（図5・6、表1）。

市道府中阪本線より南方では、先述したように旧河川を検出し、横尾川の影響を受けたことが判明している（大阪府教育委員会 2012・2013・2015）。この流路の多くは古墳時代後期にかけて埋没していくが、その過程で、弥生時代後期を中心とした多量の土器が出土している。出土状況からみてこれらの土器は意図的に置かれた可能性がある。当該期の生活に関する遺構はこの調査区では検出されておらず、周辺に集落の存在が想定される。上記の土器群については、生駒西麓産、北近畿産、淡路型など外来系土器が含まれることが特徴として挙げられる。また平成 29 年度調査第 1 区では、弥生時代中期後半及び後期末～古墳時代初頭を中心とした竪穴住居や掘立柱建物を検出している。これらは和泉市教育委員会の調査成果も踏まると集落が北西方に向広がることが想定され、先述した多量の土器が出土した流路とは 600m 程度離れ、遺構の広がりにも断絶があることから、別の集落域だった可能性がある。

古墳時代は、市道府中阪本線以北も含め、鉄鋤や鉄鋸、韓式系土器（ただし分析の結果、胎土は土師器と同様であるとされたものもある）が出土しており、外来系土器、とりわけ朝鮮半島との関係を示す遺物が出土している。図2・6に示す平成27・28年度調査A～C区の南端では、旧河川のへりに韓式

表1 府中遺跡・和泉寺跡・和泉国府跡の既往の調査

調査番号	主な時代	主な遺構	主な遺物	報告書
81 - 6	5c後半～6c後半、平安	掘立柱建物1棟、溝、土坑、ピット	須恵器环蓋・程ね鉢・滑石製筋鉢車、黒色土器・綠釉陶器瓦、須恵器环蓋、土師器小皿	和泉市教委 1983「府中遺跡発掘調査概要」Ⅲ
82 - 1				
77 - 1 次	弥生～古墳前期	豊穴住居2基、燒土坑、溝	大量の古式土師器	和泉市教委 1978「府中遺跡発掘調査概要」Ⅱ
77 - 2 次	弥生～古墳前期	豊穴住居、土坑、溝	弥生土器	
75 - 1 次	弥生・古墳	溝、落込み、ピット	弥生土器	
75 - 2 次		土坑、ピット		
75 - 3 次	弥生中期～古墳後期	豊穴住居、溝、袋状土坑	弥生土器、須恵器	和泉市教委 1976「府中遺跡発掘調査概要」
75 - 4 次			古代の土器、弥生、須恵器	
79	古墳後期後半～奈良	掘立柱建物4棟(奈良)土坑、溝、落込み	土師器	和泉市教委 1980「府中遺跡発掘調査概要」Ⅳ
86 - 1	近世		陶磁器	和泉市教委 1987「府中遺跡発掘調査概要」Ⅶ
86 - 3	古墳後期後半	溝、ピット・落込み	須恵器	
84 - 5	中世以降・近世	溝、土坑・落込み・ピット	肥前磁器・焼焼	和泉市教委 1986「府中遺跡発掘調査概要」Ⅵ
84 - 4	古墳後期～奈良・平安	溝、ピット	須恵器、土師器	和泉市教委 1985「府中遺跡発掘調査概要」Ⅴ
80 - 1	中世・近世	ピット・土坑	土師器・軒平瓦・瓦	
80 - 2	古墳前期・中世以降	溝、ピット・井戸(中世以降)		和泉市教委 1981「府中遺跡発掘調査概要」
13 - 2		溝、円形土坑	瓦・土師器	和泉市教委 2015「和泉市埋蔵文化財発掘調査概要」25
00 - 4	弥生	円形・方形周溝	弥生土器	和泉市教委 2002「和泉市埋蔵文化財発掘調査概要」12
02020～06017	縄文中期～古墳、	上器積造構造、土坑、方形周溝	縄文土器・弥生土器・土師器	大阪府教委 2010「府中遺跡」 (府理文調査報告 2010-5)
84 - I～III区	弥生中・後期、古墳	豊穴住居、土坑 方形周溝	弥生土器(皿様式)・石斧・石鎌 弥生土器(V様式)	大阪府教委 1985「府中遺跡発掘調査概要」
86	弥生中・後期、古墳初	土坑、溝、中世屢敷地 井戸	弥生土器・土師器・縄文後期土器 縄文土器・弥生土器・石器・土師器・瓦器	大阪府教委 1987「府中遺跡発掘調査概要」Ⅱ
04～09	縄文～近世	中世屢敷地、井戸、土坑		大阪府教委 2012「府中・豈中・板原遺跡」 (府理文調査報告 2011-9)
66	奈良	掘立柱建物、周溝	土師器・須恵器・錢貨(皇朝十二銭)・上馬	大阪府教委 1966「和泉国府跡発掘調査概要」
89 - 13		ピット、土坑	土師器・須恵器・瓦器・錢貨(洪武通宝・大觀通宝)	和泉市教委 1991「和泉市埋蔵文化財発掘調査概要」1
89 - 10	古墳後期	円形土坑	土師器・須恵器	和泉市教委 1990「府中遺跡発掘調査概要」X
98 - 7	奈良前半以降、近代	整地層・溝	土師器・須恵器・平瓦	
98 - 8	平安以降	河川廻跡	瓦	和泉市教委 1999「和泉市埋蔵文化財発掘調査概要」9
96 - 4	5c後半～7c	ピット・整地層	土師器・須恵器・蛤鏡(江戸時代)	和泉市教委 1998「和泉市埋蔵文化財発掘調査概要」8
94 - 1	中世以降	溝	土師器	
93 - 2	近世	ピット・埋甕	陶磁器・焼焼・軒丸瓦	
93 - 6	近世	方形土坑		和泉市教委 1995「和泉市埋蔵文化財発掘調査概要」5
92 - 10	古墳後期	落込み、ピット	土師器・須恵器	
90 - 6	中世以降	長方形土坑	土師器	和泉市教委 1992「和泉市埋蔵文化財発掘調査概要」2
90 - 7	中世以後	土坑	瓦・土器片	
92 - 3	古墳後期・中世	掘立柱建物、ピット、土坑、溝	土師器・須恵器・瓦器・瓦質土器	和泉市教委 1993「和泉市埋蔵文化財発掘調査概要」3
92 - 4	古墳後期	円形ピット	土師器・須恵器	
08019・10001・12072	弥生末～古墳初、奈良・中世	土器つまり、自然路、掘立柱建物、土坑、溝	弥生土器・土師器(弥生時代末古墳時代初期)・滑石製品(有孔円盤・臼玉)・瓦質土器	大阪府教委 2012「和泉寺跡・府中遺跡」(府理文報告 2011-3)・同 2015「和泉寺跡・府中遺跡」Ⅲ(府理文報告 2014-5)
09017～11001	弥生～古墳	柱穴、自然路	弥生土器・土師器・韓式系土器、瓦	大阪府教委 2013「和泉寺跡・府中遺跡」Ⅱ (府理文報告 2012-5)
	奈良	土坑、溝		
	中世	掘立柱建物、土坑、溝	土師器・須恵器・瓦器	
15017・16001	古墳	豊穴建物、自然路	土師器・須恵器・韓式系土器、鐵鏟	大阪府教委 2018「府中遺跡」(府理文報告 2017-3)
	平安	掘立柱建物、土坑、溝	黒色土器	
	中世	掘立柱建物、土坑、溝	土師器・瓦器	
03048	縄文	集石遺構	石製品(磨石・石皿・台石)	大阪府教委 2005「府教文化財調査事務所年報」8
17001	弥生末～古墳初	豊穴建物、掘立柱建物	弥生土器・土師器	大阪府教委 2019「府中遺跡」II(府理文報告 2018-2)

系土器を伴う小規模な竪穴建物を検出しており（大阪府教育委員会 2018）、当地付近に渡来系の文化を有する人びとの活動があったことが推測できる。また平成 29 年度調査第 2 区では、河川付近あるいは埋没した河川の上面に古墳時代中期、後期、終末期に渡って断続的に墓域が形成される。土壙墓、土器棺墓、石敷き墓に須恵器の环や短頸壺などが供獻され、長期間にわたって墓域として利用されていたことが分かっている。

古代については、市道府中阪本線より南方は、瓦の出土や正方位に則る地割の存在から、古代寺院「和泉寺」の比定地（和泉寺跡）となっている。古代寺院に直接的に関わる遺構はこれまで検出されていないが、遺物については、古代氏族名「珍縣主」・「坂合部連」が記された文字瓦が出土していることが特筆される（大阪府教育委員会 2013）。これらの瓦は 7 世紀末～8 世紀前半のものであり、地割などから総合的に判断すれば、比定地における和泉寺の実在を示す資料と評価できる。

その後、平安時代に活発な活動が認められるのは 平成 27・28 年度 D・E 区であり、旧河川が埋没したのち、5 棟の掘立柱建物をはじめとして、10～11 世紀頃の遺構群が検出されている。

中世になると、先述したように当地における生産域化が急速に進行している。その中で、居住地として利用されたのは、市道府中阪本線より南方で、かつ旧河川の影響を受けていない場所である。旧河川部は自然科学的分析から水田として利用されたことが判明しており、旧地形が中世段階まで土地利用のあり方を規制していたことがわかる。

近世以降については、点在する集落を除き、当地一帯がさらに生産域化していくようである。そして、こうした農村としてのあり方は、近現代まで継続していくこととなる。

## 第3章 令和元年度調査成果

### 第1節 調査の経過

令和元年度に実施した調査区域は平成27～28年に実施した調査の東に隣接する箇所にあたる（大阪府教育委員会2018・大阪府教育委員会2019）。

現況の水路があるため調査区域を2箇所に分け、北側をA区、南側をB区と呼称して調査を実施した。調査はB区からはじめ、次にA区を調査した。B区では北端において003溝を検出した際に当初の掘削域より遺構が伸びていることが予想されたため、当初の調査区域を拡張し遺構確認の調査を実施した。また、A区には建物のコンクリート基礎が残存していた。既往の調査成果を検討した結果、これまでに検出した遺構の標高より深く掘削され、コンクリート基礎が設置されていることが判明した。そのため基礎は撤去せず周囲の不搅乱部分を対象として調査を実施した。

遺構の検出は2面行った。空中写真測量は第2面において実施し、50分の1の図面を作成した。A区は既往の調査成果より河道にあたることから、一部を深く掘削し遺物の有無や堆積状況を観察した。

調査は令和元年12月に開始し、令和2年3月に終了した。調査面積は203m<sup>2</sup>である。

### 第2節 層序

隣接する既往調査と同様の層序となるが、改めて記載する。B区東壁を基本層序とした（図7）。

第1層：中粒砂～極細砂含む灰色砂質シルトで層厚は15cmである。近現代の耕作土である。

第2層：小礫～細砂含む明褐灰色粘質シルトで層厚は15cmである。近世の耕作土である。

第3層：大礫～細砂含む黄灰色粘質シルトで層厚は8cmである。中世の耕作土である。

第4層：大礫～中粒砂含む褐灰色砂質シルト。古代以前に堆積した河川堆積層である。上部5cm前後の厚さで土壤化及び鉄分の沈着が認められる。上部と下部の層界は明確ではなかった。下部は河川によって運ばれてきた土砂が厚く堆積している。調査後に行われた和泉市による埋設管工事を立会した際には現地盤高から約2.6m下まで同様の堆積であることを確認した。

調査は第3層を除去した第3層下面を第1面とし、第4層上面から任意に5cm除去した第4層下部上面を第2面とした。

### 第3節 調査成果

#### 第1項 検出した遺構

##### 第1面（図8）

第3層を除去した面において溝及び畦畔を検出した。

##### 001・005・008～013溝

A・B区で検出した溝である。A区ではN-13°-Wの軸を持っており、B区では003溝を境としてその南側でN-30°-Eの軸を持つ。隣接する既往調査においてもそれぞれこれと並行する溝を検出している。いずれも耕作に伴う鋤溝である。

##### 002畦畔・003溝・004畦畔

B区の北端で検出した遺構で、002はわずかな高まりを持つ畦畔、003は礫を敷いた溝、004は大きな高まりを持つ畦畔である。第3層を除去した面で検出したが東壁を検討した結果、第3層上面から

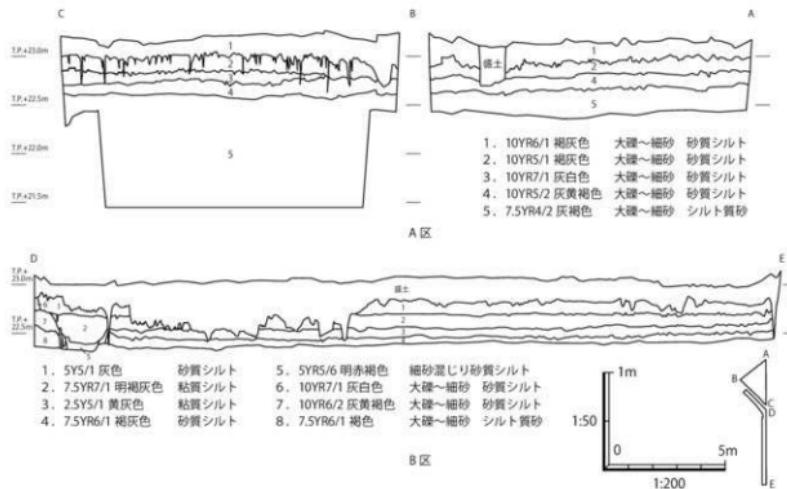


図7 A・B区壁断面図

切り込まれた遺構である。

いずれもN-13°-Wの軸を持つ。A区の鋤溝と平行する。003溝は幅1.4m、深さ0.24mを測る。溝を掘削した後、均質な土を底に入れ拳大の円礫を敷き詰めていた。通水していた堆積層ではなく、雨水などが流れている程度と推測する。その後は第2層によって人為的に埋められている。

003溝からは青磁・白磁・瓦質土器が出土しており、14世紀後半から15世紀初めの所産である。機能については、素掘りの溝ではないことから耕作地の区画や水路ではなく、居住域を区切る役割を担っていたと想定する。

#### 006

既往調査に分断されたため半円の小穴として検出した。直径は0.3mを測り、深さは検出面から1.5cmである。埋土は第2層である。本来は上層から掘削された遺構で、第3層を除去した面から遺構を検出したため、最深部のみを検出している。埋土から近世の所産で柱穴の可能性がある。

#### 第2面（図8）

第4層上部を除去した面において溝及び柱穴を検出した。

#### 007 柱穴

柱穴である。既往調査において対となる柱穴を検出しており、南西に広がりを持つ掘立柱建物となる可能性がある。柱痕は認められず偽礫により埋め戻されている。埋土から土師器皿（図10-39・40）が出土しており、埋土には第3層が含まれていることから中世の所産と考えられる。

#### 014・016・017溝

016・017は既往調査において検出した溝305・306の続きである。いずれの溝も並行して掘削しておりN-57°-Wの軸を持つ。耕作に伴う鋤溝である。

#### 015

小穴である。耕作に伴う掘削痕跡である。

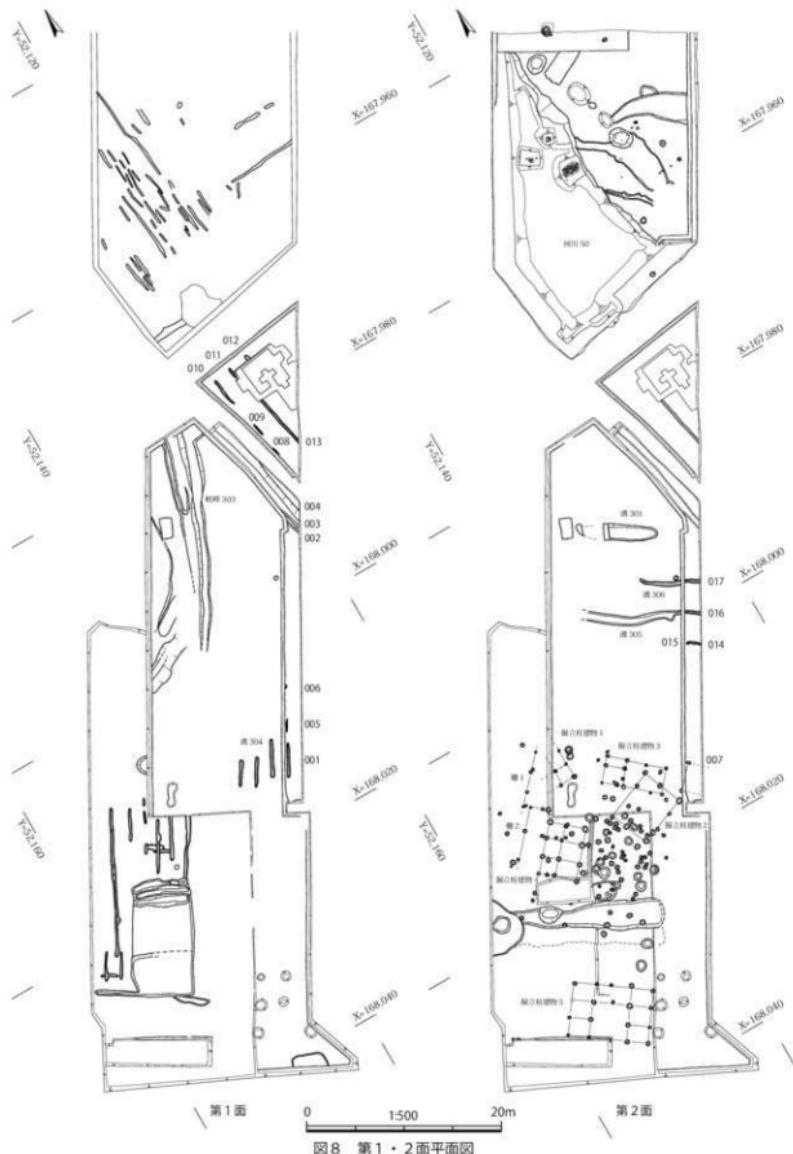


図8 第1・2面平面図

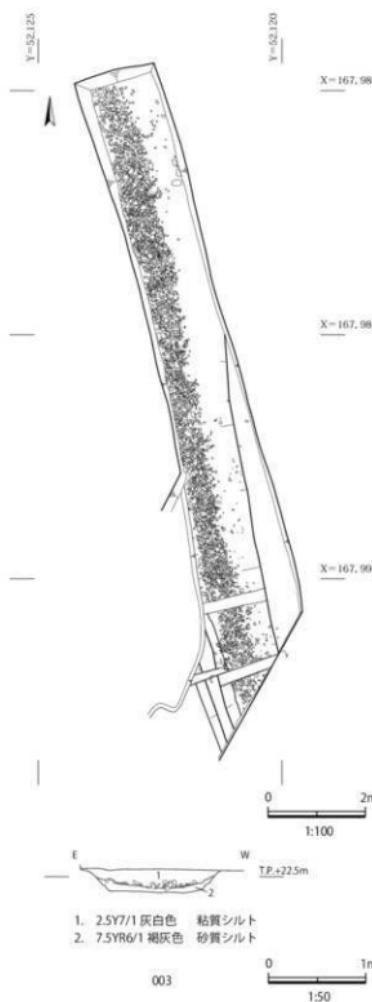


図9 003溝平面・断面図

高台を持つ底部で、回転クロナデにより高台端部の内面をわずかに拡張させる。16～22は土師器杯である。18・19は外側をケズリ調整のちナデ調整が施される。23～26は土師器皿である。23は体部内面に板ナデが施される。24は外反する口縁部で端部を丸くおさめる。内外面ともに粗いハケメ調整が施される。25は口縁端部を下方へと拡張させ、端部外面に段を有する。26は口縁部を外反さ

## 河川

隣接する既往調査で河川50と名付けた自然河川の流向にあたるA区において、河川の時期を確認するためA区の一部をさらに深く掘削し、堆積層の観察と遺物の有無を確認した。T.P.+21.5mまで河川堆積層を確認し、埋土からは古墳時代前期の土師器(図版19～42)が出土した。

河川堆積層は今回のA・B区全域において検出しており、調査区から南に0.6km離れた位置に西流している横尾川の旧流路またはその支流と考えられる。既往調査でも4～5世紀頃まで河川として機能していたが、その後流路が移動し、冠水時に細かい砂やシルト質の土砂が堆積する環境になったと指摘している。古代には河川から離れた環境となり、河川によってできた自然堤防上に掘立柱建物を造営し居住域にしたと考えられる。

## 第2項 出土遺物

### 第3層(図10)

1～4は瓦器楕である。1・3・4は内面に僅かにミガキが残る。和泉型。5・6は土師器皿である。5の口縁部は直線的に短く外方へと開き、口縁部と体部との境は鈍く稜線が入る。6は口縁部を強くヨコナデすることにより外反させている。7は白磁皿である。透明釉が施されるが、外表面は口縁部のみで体部は露胎である。8は須恵器杯身である。TK209型式。9は須恵器器台である。3つの円形透孔が穿たれ、波状文が残る。脚部の一部と考えられる。10は須恵器の土馬の脚部である。足裏には蹄を表現したと考えられる円形と直線状の線刻が施される。中世の遺物はいずれも14世紀代である。

### 第4層(図10)

11・12は須恵器杯蓋である。TK209型式。13は須恵器杯である。口縁端部に煤が付着していることから灯明皿として利用されていた。14・15は須恵器壺である。14は口縁部で外方へと開いたのち端部をつまみ上げることにより段を有する。15は

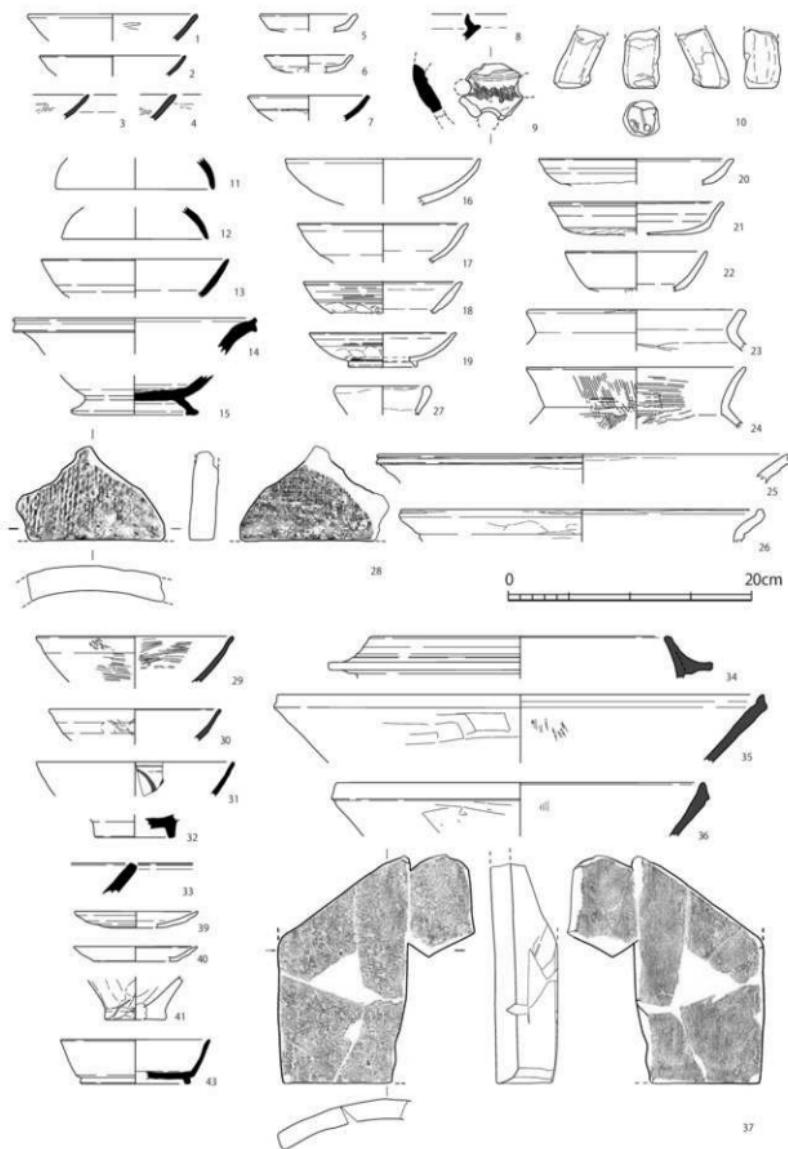


図10 第3・4層、遺構出土遺物実測図

せたのち端部をつまみあげ上部へと拡張する。27は製塙土器である。内面にはユビオサエが明瞭に残る。28は須恵質の平瓦である。凹面には布目、凸面には繩蓆文が残る。

古墳時代後期の須恵器（11・12）を除いて10世紀後半から11世紀初頭の遺物である。

#### 002 畦畔

29は瓦器椀である。内外面ともに口縁部付近まで密にミガキが施される。和泉型。13世紀。

#### 003 溝

30は瓦器椀である。内面は摩滅が激しいが外面は口縁部付近までミガキが施される。13世紀前半。31は龍泉窯系青磁碗である。内面に蓮弁文が施される。32は白磁の高台である。内面には透明釉が施されるが、外面及び高台は露胎である。33は陶器鉢である。備前焼であろうか。34は瓦質土器羽釜である。摩滅が激しいが口縁部は有段である。35・36は瓦質土器擂鉢である。外面はケズリ調整が施され、内面にわずかに措目が残る。37は須恵質の平瓦である。端部はケズリ調整により成形されている。図化していないが38は緑釉陶器杯である。体部から底部にかけての破片で内外面ともに緑釉が施される。10世紀代。

青磁・白磁・陶器・瓦質土器は14世紀後半から15世紀初めの所産である。

#### 007 柱穴

39・40は土師器皿である。13世紀くらいか。

#### A区トレチ

41は弥生土器の底部である。外面に縱方向のハケメ調整が施される。内面には縱方向のナデが認められる。弥生時代後期の所産であろう。図化していないが土師器甕の体部（42）が出土した。外面はハケメ調整を施し、内面はケズリ調整である。布留形甕であり形は球形であることから、古墳時代前期の所産と考えられる。

#### 搅乱

43は隣接する調査区の中から出土した遺物であるが遺物の残存状況がよく、遺構の時期を検討するため掲載した。須恵器杯である。10世紀前半。

## 第4節 小結

令和元年度調査は、既往調査に追加する成果であった。

古墳時代の河川と考えられるA区のトレチからは弥生時代後期及び古墳時代前期の遺物が出土し、既往調査の成果と一致する。調査区周辺は古代まで河川が流入しており、たびたび河道となる不安定な環境であったと考えられる。

007柱穴からは13世紀と考えられる遺物が出土しており、既往調査において検出した掘立柱建物の柱穴には平安時代の建物だけではなく、鎌倉時代の建物も存在すると考えられる。

新たに検出した003溝は、流水による堆積層がないことや溝底に石を敷き詰めていることから耕作に伴う水路ではなく土地を区画するための溝と考えられる。溝の中には14世紀後半から15世紀初めの遺物が廃棄されており、調査区周辺での室町時代の居住域を想定することができる。室町時代に居住域として利用されて以降は近代まで一貫して耕作地であった。

## 第4章 令和2・3年度調査成果

### 第1節 調査の経過

令和2・3年度に実施した調査区域は平成27・28年度に実施した調査(大阪府教育委員会2018)のF・G地区及び平成29年度に実施した調査の第1区(大阪府教育委員会2019)に挟まれる箇所にある。

平成27・28年度F・G地区の市道及び水路を挟んで北側、商業施設の旧駐車場部分にある箇所を第1・2調査区、平成29年第1区の南に隣接する箇所を第3調査区とした。なお第1・2調査区は水路を挟むため、分割して調査を行ったが、隣接しているため併せて報告する。

遺構の検出は2面行った。空中写真測量は第2面において実施し、50分の1の図面を作成した。

### 第2節 層序

隣接する既存の調査と同様の層序となるが、改めて記載する。また、第1・2調査区東壁を基本層序とした(図11)。

第1層：黒褐色砂質シルトで層厚は20cmである。近現代の耕作土である。作土層、床土層をa,bとして細分した。

第2層：黄褐色砂質シルトで層厚は15cmである。中世の耕作土である。作土層、床土層をa,bとして細分した。

第3層：灰黄褐色砂混じりシルトで層厚は10cmである。古代以前の遺物を含む層である。この層は落ち込み001付近から第1調査区の中央(X=-167,710ライン付近)まで窪んだ地形となっており、その部分に堆積している。南側には堆積せず、第2層の直下が第5層となる。

第4層：礫混じり黒褐色砂、灰黄褐色砂質シルト。落ち込み001の堆積で、弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物小片を含む。

第5層：にぶい黄褐色砂混じりシルト～黒褐色砂礫。弥生時代以前に堆積した層である。基盤層となる。砂礫層部分がわずかに高まりとなっており、砂礫層の堆積後、地形の低いところにシルト層が堆積している。

第6層：暗灰黄色粘質シルト。第5層上面に薄く堆積する。第3層同様、地形の窪んだ部分にわずかに堆積した自然堆積層である。掘立柱建物1の北東側の一部分はこの第6層の上面で検出しており、弥生時代後期末から古墳時代初頭～平安時代までの間に堆積したものと考えられる。

調査は第2層を除去した第2b層上面を第1面とし、第2b層・第3層及び第6層を除去した第5層上面を第2面として調査を実施した。

### 第3節 第1・2調査区調査成果

#### 第1項 検出した遺構

##### 第1面(図12)

第2層のうち床土層と考えられる2b層上面に溝群を検出した。第2節で述べたように旧地形は第1調査区北側から第2調査区に向かって上がっており、第1層以下の各層は収束していく。したがって溝群は第1調査区の中央より南側のみで検出できた。

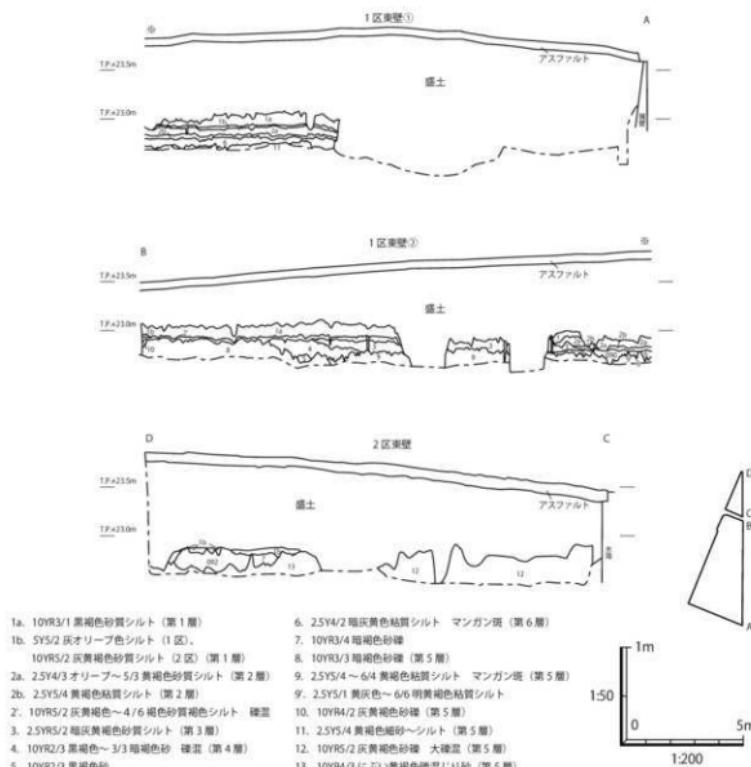


図 11 第1・2調査区東壁断面図

002～051・056～063溝

第1調査区で検出した溝である。N-45°-Wの軸とそれと直交するN-45°-Eの軸のものがあり、いずれも耕作に伴う鋤溝である。第2層より瓦質土器が出土しており15世紀代が上限と考えられる。平成27・28年度F・G区で検出した鋤溝群と方位、年代ともに一致する。

## 第2面（図13）

## 049 土坑（図14）

直径60cm、深さ20cm程の土坑である。埋土は、礫や炭化物の混じる暗灰黄色砂質シルトからなる。出土遺物から13世紀代の遺構であろう。

## 081 土坑（図15）

長径120cm、短径80cm、深さ25cmの土坑である。掘立柱建物1の西隅に位置する。埋土は黄灰色細粒砂からなり、土坑の底に1枚の完形の土師器皿が出土している。埋納遺構と考えられ、平成27・

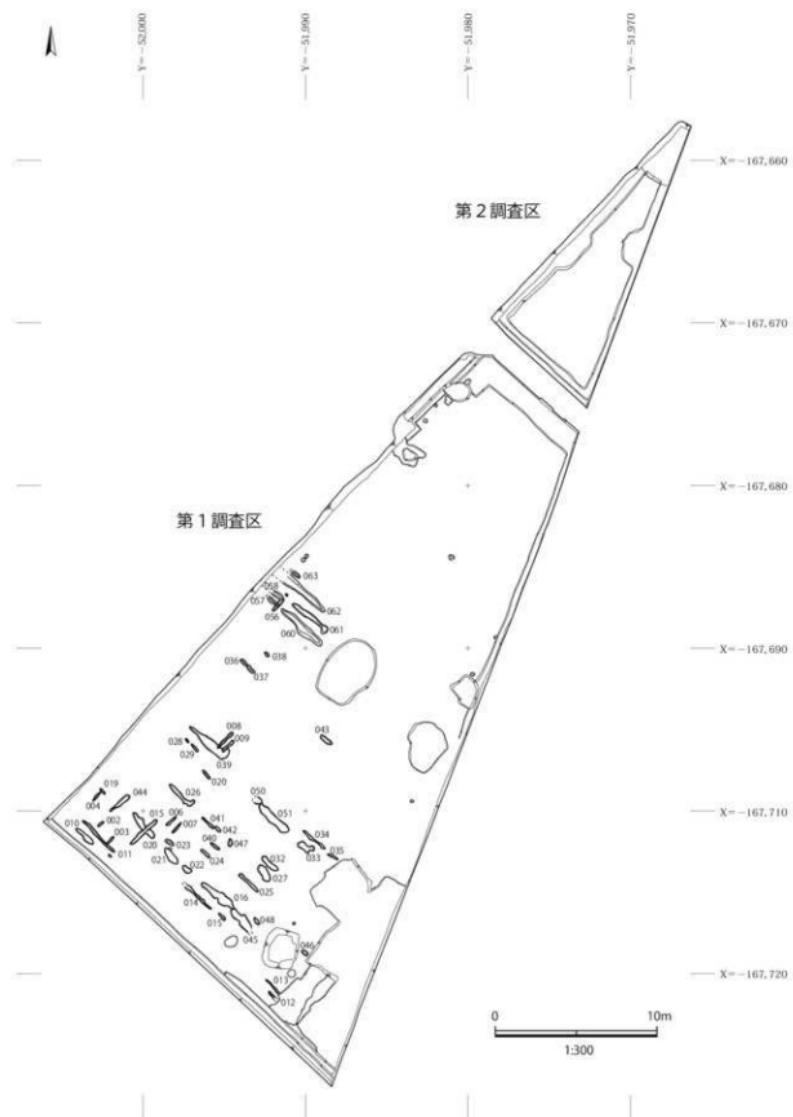


図12 第1・2調査区第1面平面図

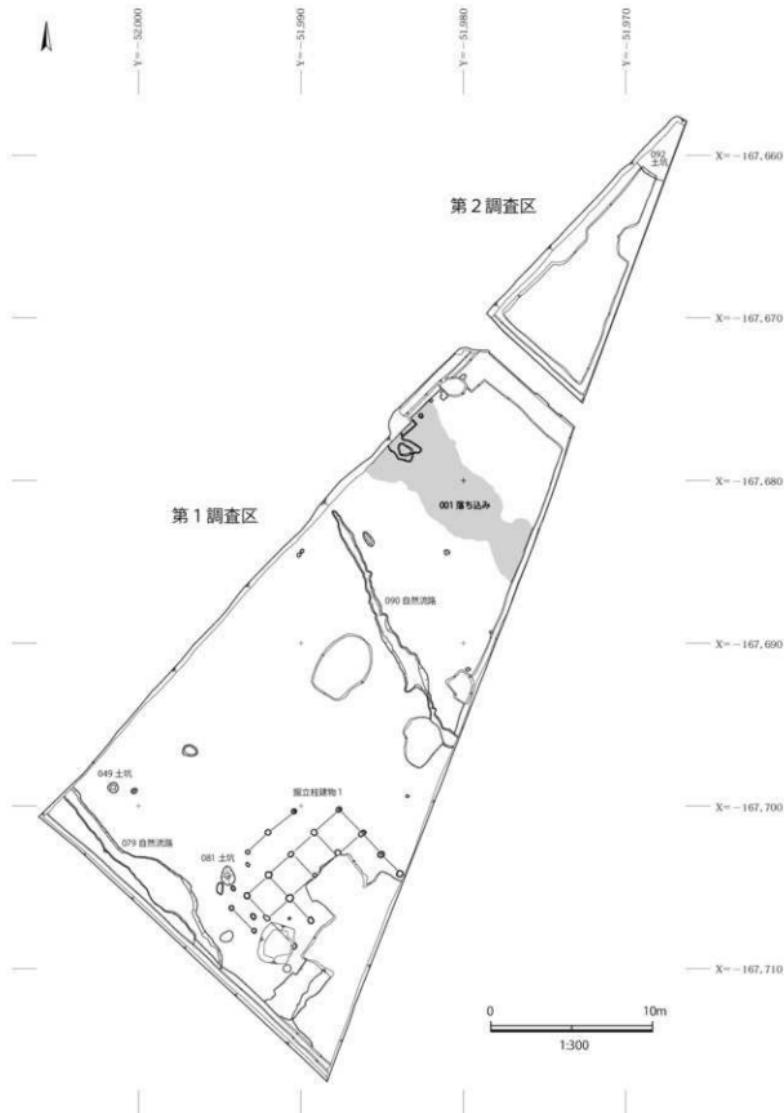


図13 第1・2調査区第2面平面図

28年調査D・E区掘立柱建物3で検出されたものと類似する。掘立柱建物1に関連する土坑となる可能性がある。

#### 掘立柱建物1(図16)

建物の軸は北東-南西方向を向きN-47°-Wの軸とそれと直交するN-43°-Eの軸となる。規模は四間×四間、もしくはそれ以上と考えられ、柱間は約1.9mであった。柱穴の掘方は直径40cm程度のものがほとんどで、一部柱痕を残す。根石は確認できなかった。建物最西端の064-066の列は隅に柱穴を持たず、直径もやや小さく、一部浅いものが見られる。また南端087-088も同様に柱穴の直径も小さく、055-085柱列との柱間も1.2m程と狭くなっている。これらのことからこの2列については、建物に付属する柱穴列と判断した。出土した遺物から10世紀後半の建物と考えられる。なお、先述のとおりこの建物の北東側の一部は第6層上面で検出しており、厳密に言えば、弥生時代～古墳時代遺構と同一面ではない。

#### 001 落ち込み(図13)

第2調査区より広がる基盤層となる砂礫層からの地形の下がりに沿って幅2m程のごく浅い落ち込みを検出した。堆積している層は暗褐色砂質土が主体で、基盤層に由来する礫が多く含み、弥生時代後期～古墳時代初頭の壺底部などの土器片や石器が出土した。人為的な遺構ではなく、調査区北側の集落から流れ込み、地形の落ち込みに堆積したものと考えられる。この落ち込みを境に南に行くにつれ遺物の分布は希薄になっていく。

#### 079 自然流路(図17)

周辺の調査で検出されている流路と同様、大きく東西方向に流れる自然流路である。幅60～80cm程度、深さ20cmの流路であるが、中央で2m程度の幅に膨らむ。もともとの流路を砂礫層が覆っていることから、増水時に流路北側が削られたものと考えられる。出土した遺物から弥生時代以前に形成し、古墳時代後期以降に埋没したものと考えられる。

#### 090 自然流路(図17)

暗褐色のシルトが堆積する。地形の窪みに流れ込んだ小さな流路である。第3調査区005自然流路に繋がるものと考えられる。弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。

#### 092 土坑(図18)

第2調査区の北端に検出した土坑である。基盤層となる砂礫層を堀込んだ遺構である。調査区の端で検出しつつ削平も受けていることから正確な大きさは分からないが、3m以上の大きさはあるものと考えられる。遺構内に周溝やピットは確認できなかった。小型丸底壺や小型器台が出土している。出土遺物から弥生時代後期末から古墳時代初頭と考えられる。

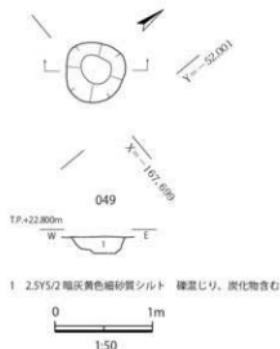


図14 049 土坑平面・断面図

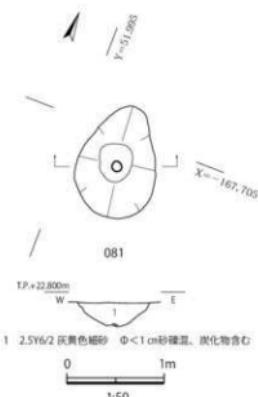


図15 081 土坑平面・断面図

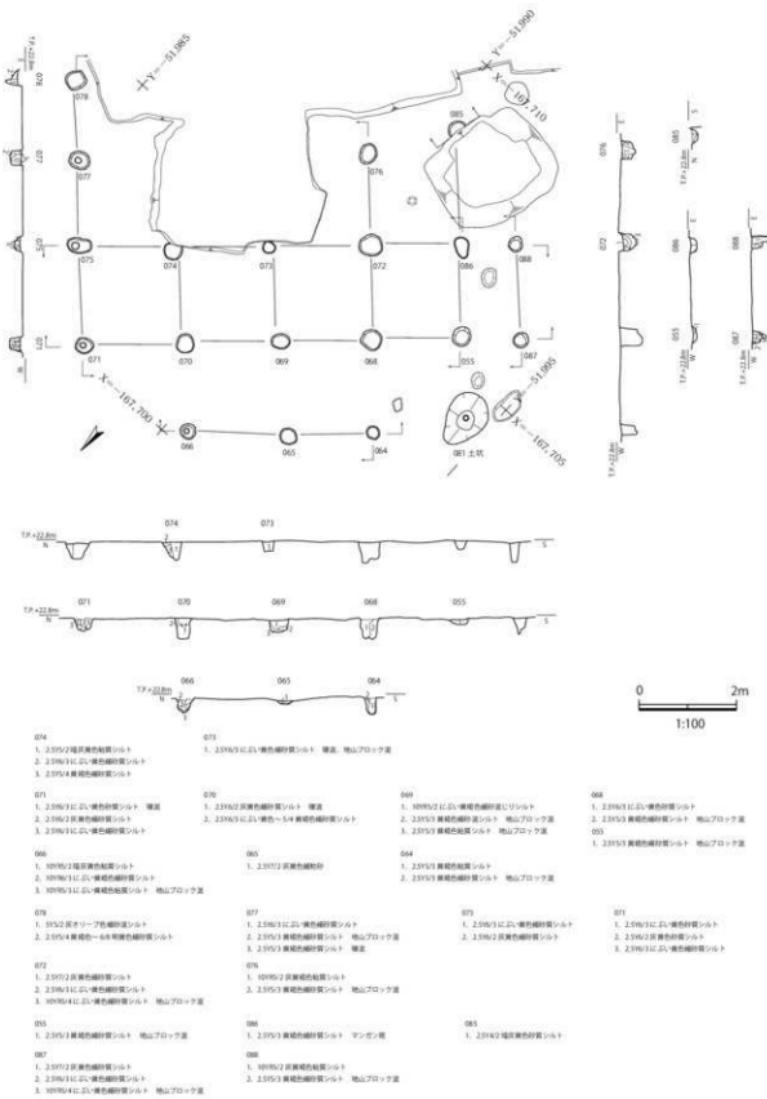


図16 掘立柱建物1平面・断面図

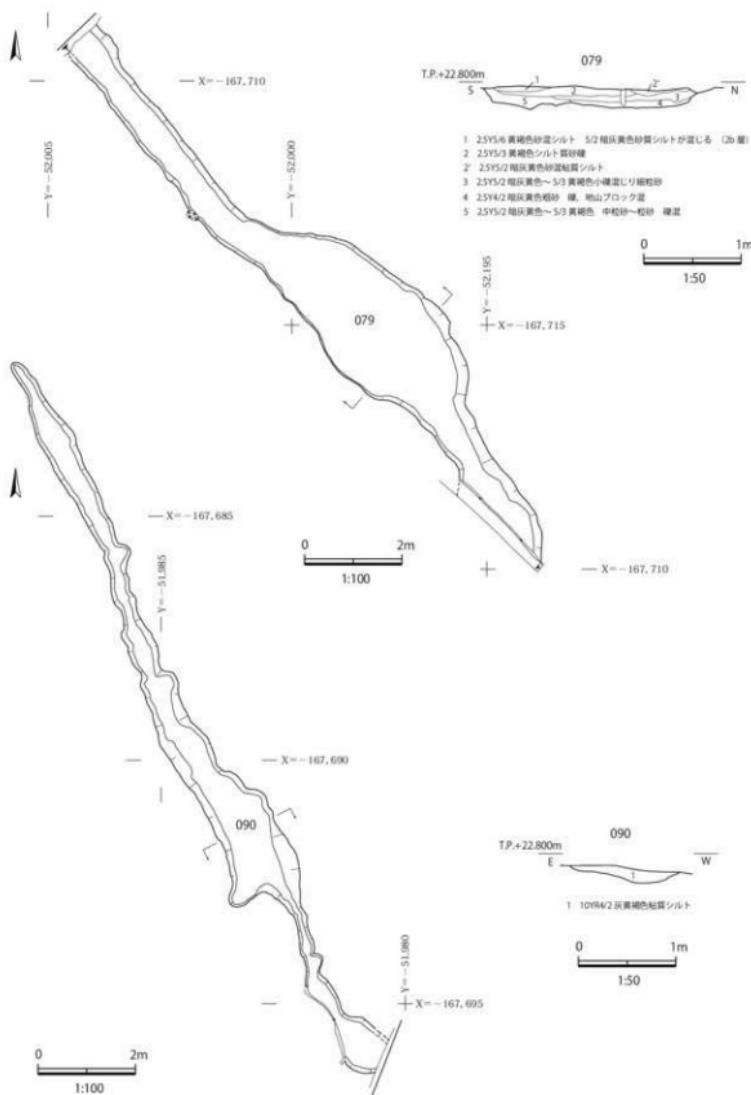


図17 079・090 自然流路平面・断面図

## 第2項 出土遺物

## 049 ピット（図19）

44は土師器皿である。直線的な口縁がつく。13世紀後半。

## 081 土坑（図19）

45は土師器皿である。底部にかけて顯著にユビオサエのあとを残し、口縁部にはナデが施される。10世紀後半となる可能性がある。

## 掘立柱建物1（図19）

46・47・49～51は黒色土器もしくはそれに類似する土師器碗である。46と50は底部で、ハ字状の高台がつく。47・49・51は口縁部で、口縁にはナデがめぐり、やや外反する器形となる。49は黒色土器B類。内面に沈線が巡り、外面はミガキが施される。48・52は土師器皿である。底部付近にユビオサエナの痕を残し、口縁部にはナデが巡る。10世紀後半。

## 001 落込み（図19）

53・54は甕の口縁部である。55は鉢である。口縁には簾状文が巡る。56は長頸壺である。57～62は甕の底部である。57～60は凹み底で、底部付近にタタキ目を残す。61・62は平底である。63～65は高杯の脚部である。まっすぐ棒状の形となる。66～69は椀形高杯の脚部で下方に向かって広がる器形となり透し孔をもつ。70は叩き石である。中心部及び端部にアバタ状の敲打痕を残す。

## 079 自然流路（図19）

72は須恵器环身である。六世紀後半。73は弥生土器、壺の底部であると考えられる。厚さが約4cmで厚手のものである。弥生時代中期以前と考えられる。

## 090 自然流路（図19）

71は甕の底部である。弥生時代後期末から古墳時代初頭。

## 092 土坑（図19）

74・75は甕口縁部である。76は内面にユビオサエの痕を残す。77・78は小型丸底壺である。口縁部はやや短い。外面にハケ目を残す。79は高杯脚部である。81は甕底部である。82～84は小型器台である。82は四方向の透かし穴と考えられる。外面にハケ目を残す。83は3方向の透かし穴である。

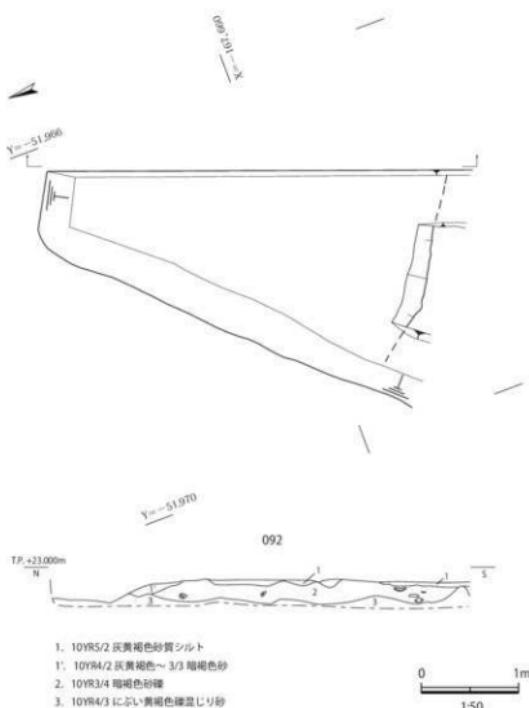


図18 092 土坑平面・断面図

049 土坑



44

掘立柱建物 1



46

088



48

070



49

081 土坑



45

068



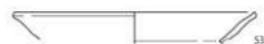
47

074



48

001 落ち込み



53



54



55



56



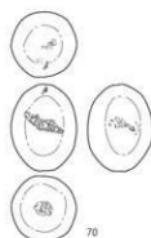
57



58



59



090 自然流路



60

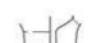
61



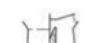
62



63



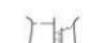
64



65



66



67



68



69

079 自然流路



72



73

092 土坑



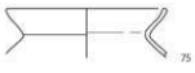
74



77



82



75



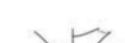
78



79



76



80



81



83



84

0

20cm

図19 遺構出土遺物実測図

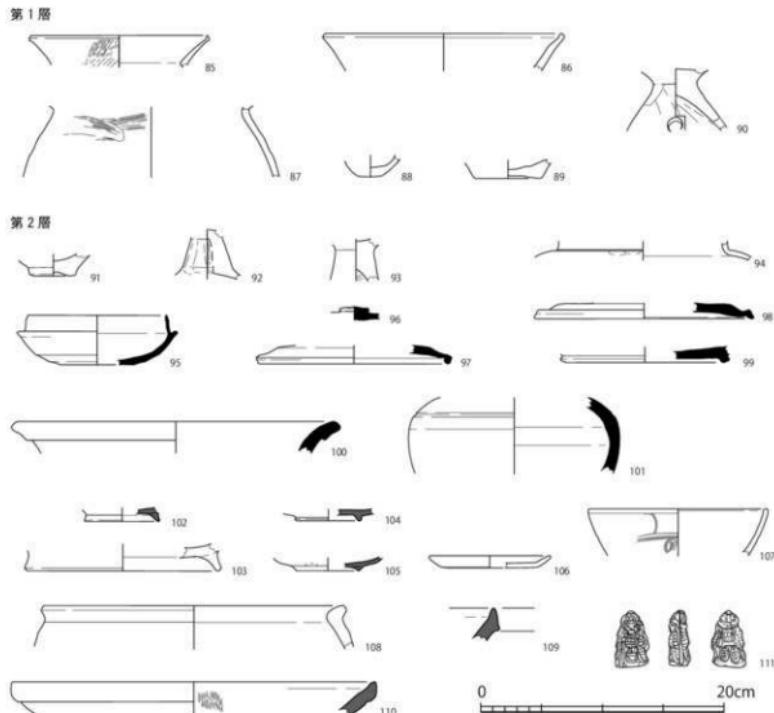


図20 1層・2層出土遺物実測図

84は四方向の透かし穴と考えられ、内面にハケ目を残す。

#### 第1層（図20）

85～90は1層出土土器で、第二調査区出土のもののみである。第二調査区では遺構面直上まで造成を受けており、わずかに残る1層より出土した。特に092土坑周辺での出土がほとんどである。85,86は甕口縁部である。口縁端部をつまみ上げわずかに立ち上がる器形となる。85の外側にはハケ目が残る。87は甕胴部である。横位のハケ目を残す。88,89は甕底部である。90は小型器台の脚部である。四方向の透かし穴と考えられる。古墳時代初頭の所産である。

#### 第2層（図20）

91は甕底部である。わずかに凹底となる。92・93は高坏の脚柱部である。94は壺の頸部片である。屈曲部にユビオサエ痕を残す。91～94は弥生時代後期末～古墳時代初頭の土器である。95は須恵器环身である。6世紀。96は甕の口縁部である。96～99は須恵器环Bである。96は蓋のつまみ部分である。97・98は蓋で、98の口縁部はS字状を呈する。99は环の底部で、高台が外よりにつくものと考えられる。101は壺の胴部である。肩部に沈線が巡る。97～100は8世紀の所産である。103

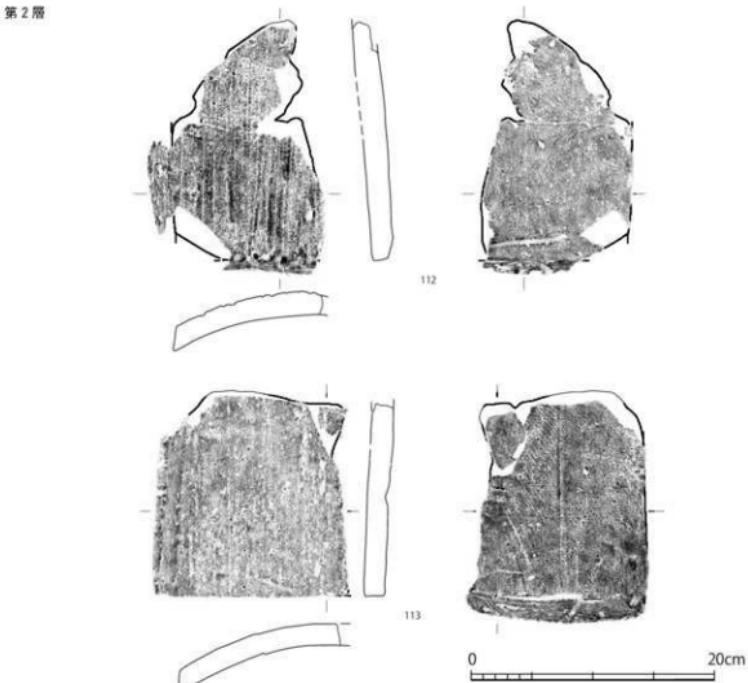


図21 第2層出土遺瓦実測図

は黒色土器の底部である。103は高台が約1cm、底部径も大型のものである。平安時代後半の所産であろう。102・104・105は瓦器椀の底部である。ユビオサエの痕を残し、高台も低いものである。13世紀代。106は土師器皿である。口縁が体部から直線的に張り出す。13世紀後半。108は土師器羽釜である。口縁部が外側に折れ曲がる器形となる。14世紀代。109・110は瓦質摺鉢。摩滅が著しいがその器形から15世紀代の所産と考えられる。107は青磁椀である。111は土製人形である。毘沙門天を表現したものである。1層と2層の境から出土している。近世の所産である。112・113は平瓦である(図21)。112は凹面に布目が残る。113は凹面に布目及びコビキA、凸面には繩席文が残る。

### 第3層(図22)

114は繩文土器深鉢である。口縁部が外反する器形となり、端部より一段下がったところに凸帯が巡る。端部及び凸帯上に刻みが施される。晩期後半、凸帯文2期。

115～118は甕の口縁部である。いずれも外反する器形となる。115・117は端部がわずかにつまみ上げられる。118は小型の器形となる。119～122、126～128は甕の底部である。119～122は平底で外面はタタキである。121は右上がりのタタキで、内面はハケ調整となる。126・127は凹底となる。128は丸底に近い器形で、中心に凹み(刺突)がある。123は壺の底部である。厚さは3cm程度

## 第3層

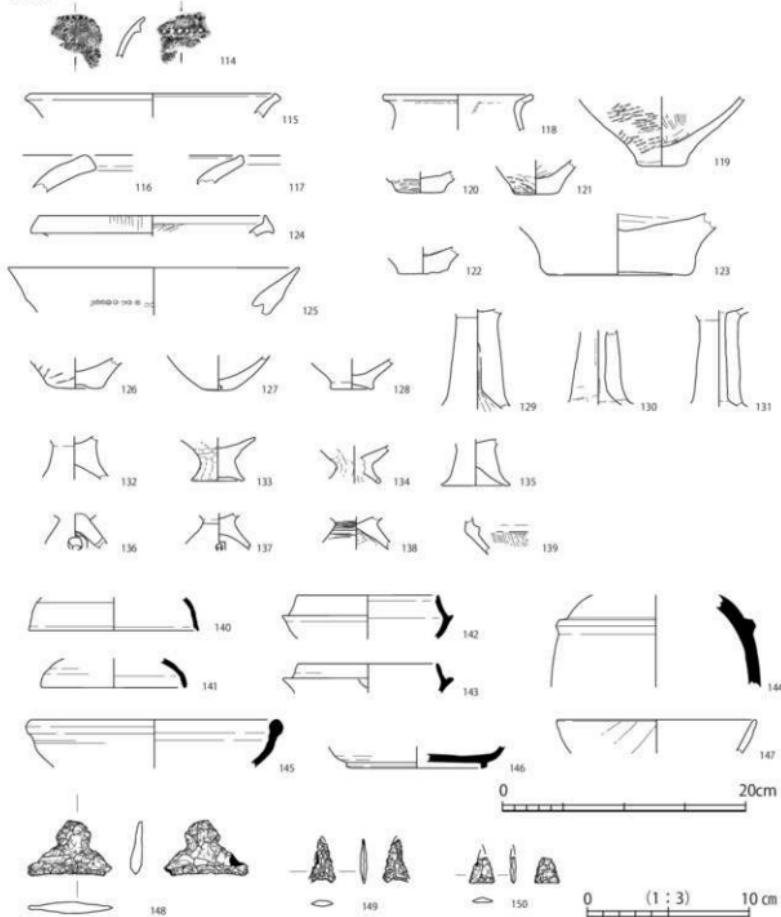


図22 第3層出土遺物実測図

で弥生時代中期以前の壺である可能性がある。129～132は高環脚柱部である。130は短い脚部であり、楕円形高環であると考えられる。133～135は製塩土器の脚台である。小さい底部に楕円形の体部をもつ。136～138は小型器台の脚部である。136は四方向の円形の透かし孔、137は円形の透かし孔をもつ。139は壺の肩部である。凸帯が巡る。115～139は123を除き、弥生時代後期末から古墳時代初頭の所産である。これらの遺物は第1調査区北側で出土したものが多く、北側の弥生時代集落由来のものであるといえる。

140・141は須恵器坏蓋、142・143は坏身である。140～143は古墳時代後期の所産である。146は坏Bの底部である。8世紀代。145は須恵器鉢である。口縁端部が肥厚する。144は須恵質の土器である。壺状の器形を呈すると考えられ、肩部には凸帯が巡る。147は土師器椀である。表面は摩滅が著しい。

148は石匙である。平面形は三角形で円形のつまみが付く。刃部が押圧剥離により作り出される。149は凹基式の石鎌である。150は三角形の無茎式の石鎌である。いずれも弥生時代の所産であろう。

## 第4節 第3調査区調査成果

### 第1面

第3調査区では、後世の攪乱により第1・第2層が大きく削りこまれており、第1・2調査区の第1面に相当する面は確認できなかった。

#### 第2面（図23）

##### 001 落ち込み

第1・2調査区と同様なごく浅い落ち込みの堆積である。平成29年度第1区より広がる基盤層となる砂礫層からの地形の下がりに沿って幅4m程のごく浅い落ち込みが広がる。堆積層は灰黄褐色砂質シルトから黒褐色砂質シルトが主体で、基盤層に由来する礫や炭化物を多く含む。弥生時代後期末～古墳時代初頭の甕底部などの土器片や石器が出土した。調査区北側の集落の高まりから流れ込み、地形の落ち込みに堆積したものである。第1・2調査区同様、この落ち込みを境に南に行くにつれ遺物の分布は希薄になっていく。

##### 004 土坑（図24）

長径70cm、短径50cm、深さ20cmの土坑である。埋土は黒褐色砂質シルトである。遺物はほとんど出土しなかったが、遺物小片や埋土の様相から弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構と考えられる。落ち込み001より以降で検出した唯一の当該期の遺構である。

##### 005 自然流路（図24）

第1・2調査区で検出した090自然流路に繋がる流路である。第1・2調査区ではシルト層の堆積であったが、第3調査区では、砂の堆積が見られる。また蛇行するもしており、流水により浸食が強かつたことが窺える。第1～第3調査区の中で最深部であり、現地形と同様、西側に向かって流れる流路であったと考えられる。

### 第2項 出土遺物

#### 001 出土遺物（図25）

151・153は甕である。151は直線的に外折する口縁である。153は頸部から胴部にかけての破片で、タタキである。152は甕の口縁部である。端部を面取りし、わずかに外反する。155～159は甕の底部である。155は平底で、外面にユビオサエの痕を残す。156は平底で、外面はタタキである。158は凹底で、外面はタタキである。159は平底で、外面はタタキである。154、157は底部である。平底となる。160～163は高环の脚部である。161は脚裾にむかって緩やかに広がり、円形透かし孔をもつ。162・163は椀形高环である。164は敲石である。楕円形を呈し、一部は欠損している。端部と中心部にアバタ状の敲打痕を残す。被熱している。いずれも弥生時代後期末から古墳時代初頭である。

#### 3層出土遺物（図25）

165～166は甕の口縁部である。165・166は外反する口縁をもつ。167は頸部より外折し、内湾

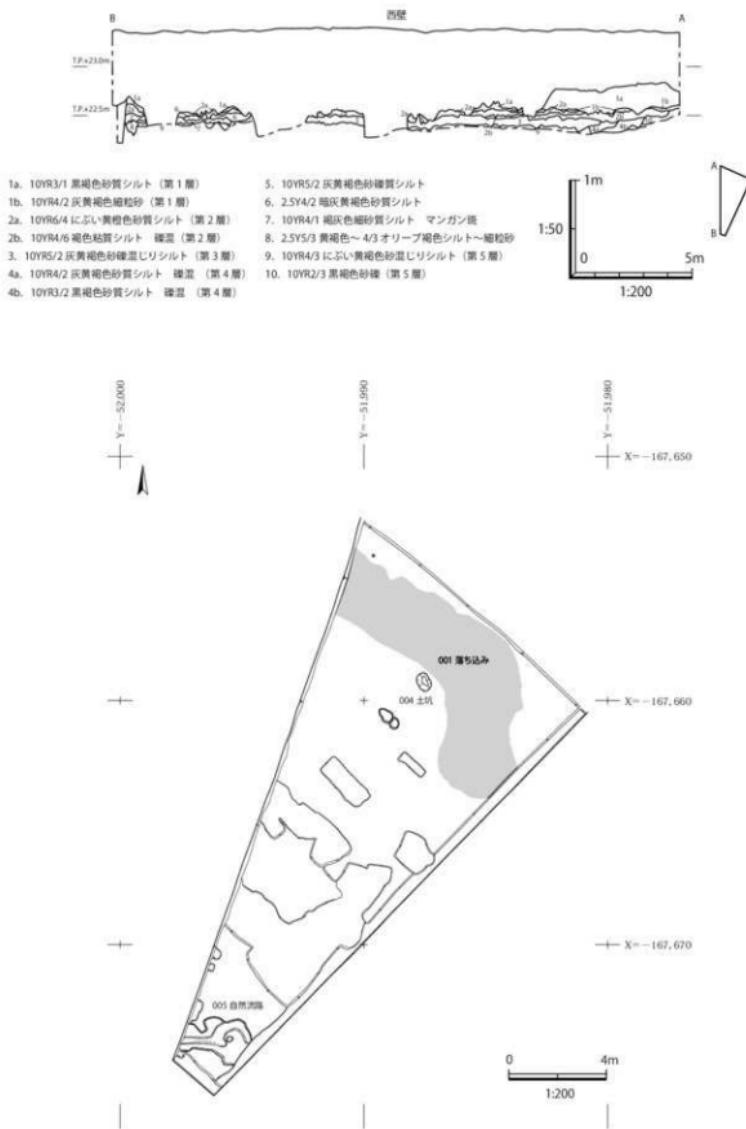


図23 第3調査区平面・断面図

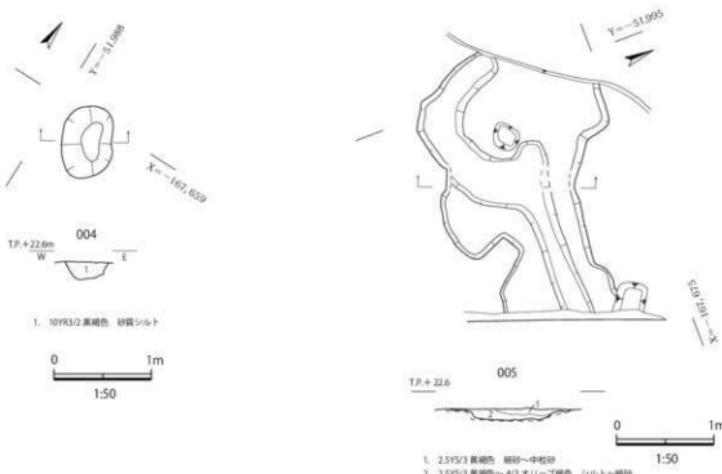


図24 004 土坑・005 流路平面・断面図

する口縁をもつ。168～170は甕の底部で、中心に凹みをもつ。胴部は右上がりのタタキを残す。169、170は平底である。171は加飾性複合口縁壺の口縁部である。櫛描波状文が巡り、円形竹管浮文が貼り付けられる。172は楕円高環の脚部である。173、174は高環の脚柱部である。165～174は弥生時代後期末～古墳時代初頭である。175は土師器羽釜である。古墳時代か。176は須恵器壺Bの底部である。8世紀代。177は須恵器壺の肩部である。

## 第5節 小結

令和2・3年度調査では、これまでの周辺の調査成果と同様、中世の鋤溝群、古代の掘立柱建物、弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構を確認した。中世の鋤溝群は、2層の出土遺物から15世紀代であり、平成27・28年度調査区G区とおむね同時期のものと言えよう。古代の掘立柱建物は10世紀後半であり、推定される条里と向きを合わせている。平成27・28年度調査D・E区検出掘立柱建物群とほぼ同時期のものと考えられる。掘立柱建物1はこれら建物群より300m程度北に位置しており、別の集落が存在していたものと考えられる。弥生時代後期末から古墳時代初頭については、第1・3調査区で落ち込み001を検出した。地形が高くなる礫層から低くなるシルト層に変わる部分に広がっており、これが平成29年度1区で確認した当該期集落の南限であると考えられる。南側の地形の低い部分に人が住み始めるのは古代以降であった。

001 落ち込み

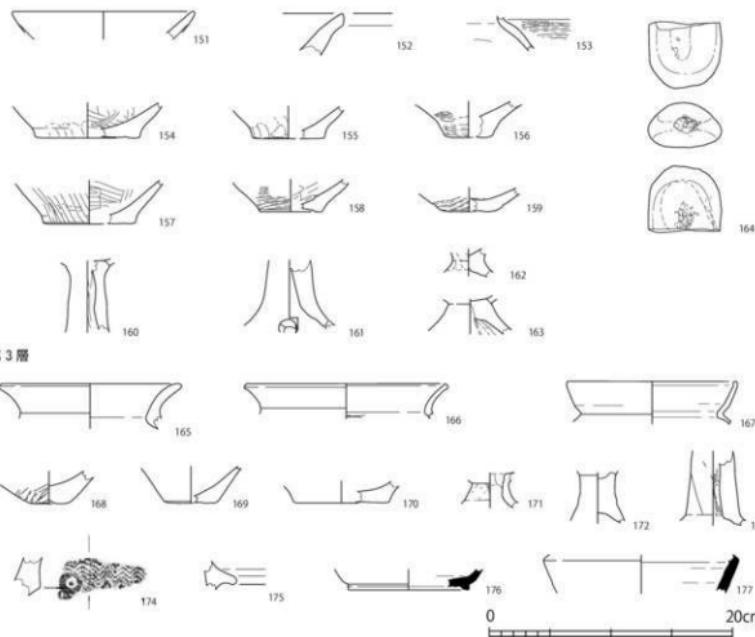


図25 001 落ち込み・第3層出土遺物実測図

## 第5章 令和3年度調査成果

### 第1節 調査の経過

令和3年度に実施した調査区域は平成29年に実施した調査の第1区（大阪府教育委員会2019）の東側及び西に隣接する箇所にあたる。市道を挟み東側、商業施設の旧駐車場部分にあたる箇所を第1調査区、西に隣接する箇所を第2調査区とした。第2調査区は一部ガス管、水道管が埋設されており、当初より規模を縮小して調査を実施した。

遺構の検出は1面行った。空中写真測量はこの1面において実施し、50分の1の図面を作成した。

### 第2節 層序

第1調査区南壁及び第2調査区北壁を基本層序とした（図26・31）。

第1層：小礫を含む黒褐色砂質シルトで層厚は20cmである。近現代の耕作土である。作土層、床土層をa.bとして細分した。

第2層：小礫を含む暗灰黄色砂質シルトで層厚は20cmである。中世の耕作土である。a.b.cに細分した。

第3層：暗灰黄色砂質シルトで層厚は10cmである。古代以前の遺物を含む層である。第1調査区では確認できなかった。

第4層：中礫を含む灰黄褐色砂質シルト。弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物小片を含む。第1調査区では確認できなかった。

第5層：黄褐色砂質シルト（第1調査区）、褐色砂～礫（第2調査区）。弥生時代以前に堆積した層である。令和2・3年度調査と同様、砂礫層部分がわずかに高まりとなっており、砂礫層の堆積後、地形の低いところにシルト層が堆積している。

調査は第1調査区では第2層を除去した第5層上面を検出面、第1調査区は第3層を除去した第4層上面を検出面とした。なお第5層上面には遺構は検出できなかった。

### 第3節 第1調査区

#### 第1項 検出した遺構

##### 001～020・025・035溝（図27）

第1調査区で検出した溝である。N-45°-Wの軸とそれと直交するN-45°-Eの軸のものがあり、いずれも耕作に伴う鶴溝である。第2層より瓦質土器が出土しており15世紀代と考えられる。周辺の調査で検出した鶴溝群と方位、年代ともに一致する。

##### 048土坑（図28）

不定形の土坑である。深さも浅く、削平を受けている。瓦器碗が出土している。

##### 049土坑（図28）

方形の土坑である。深さは20cm程度、埋土は灰黄色砂質シルトが主体となる。

##### 051土坑（図28）

楕円形の土坑である。深さは40cmで、埋土は灰黄色砂質シルトが主体となる。粘土ブロックが含まれ、

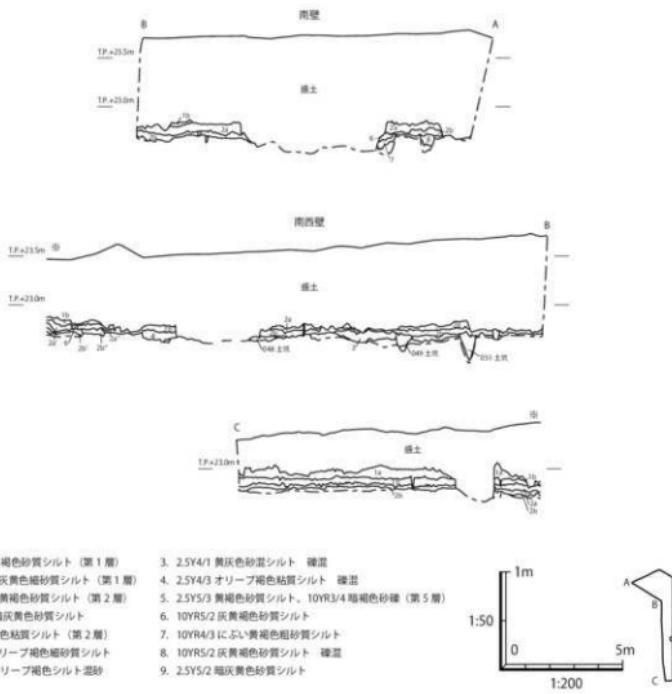


図26 第1調査区西・南壁断面

掘削後に埋め戻されたものと考えられる。

### 054 土坑 (図 29)

隅丸方形の土坑である。長径 3.4 m、短径 1.8m、深さは 30cm 程度の大型の土坑である。埋土は灰黄色砂質シルトが主体となるが、複数の層の堆積がしている。これらの土坑はすべて鋤溝に切られているもので、15 世紀以前のものである。瓦器の小片を含むことから中世以降に掘削されたものであろう。遺物量はごく少なく、平成 27.28 年調査 F・G 区の土坑のように水成堆積も認められない。埋土にブロックが認められることや基盤層のシルト部分に掘削されていることから、土取りの可能性を指摘しておきたい。

037、038 ピット（図29）

時期は中世以前であるが、遺物は出土していないため、明確な時期は不明である。

### 064 土坑(図30)

楕円形の土坑である。埋土は暗褐色土が主体となる。礫や弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器を含む。

### 062 土坑（図30）

横円形の土坑である。埋土は暗褐色土が主体となる。礫や弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器を

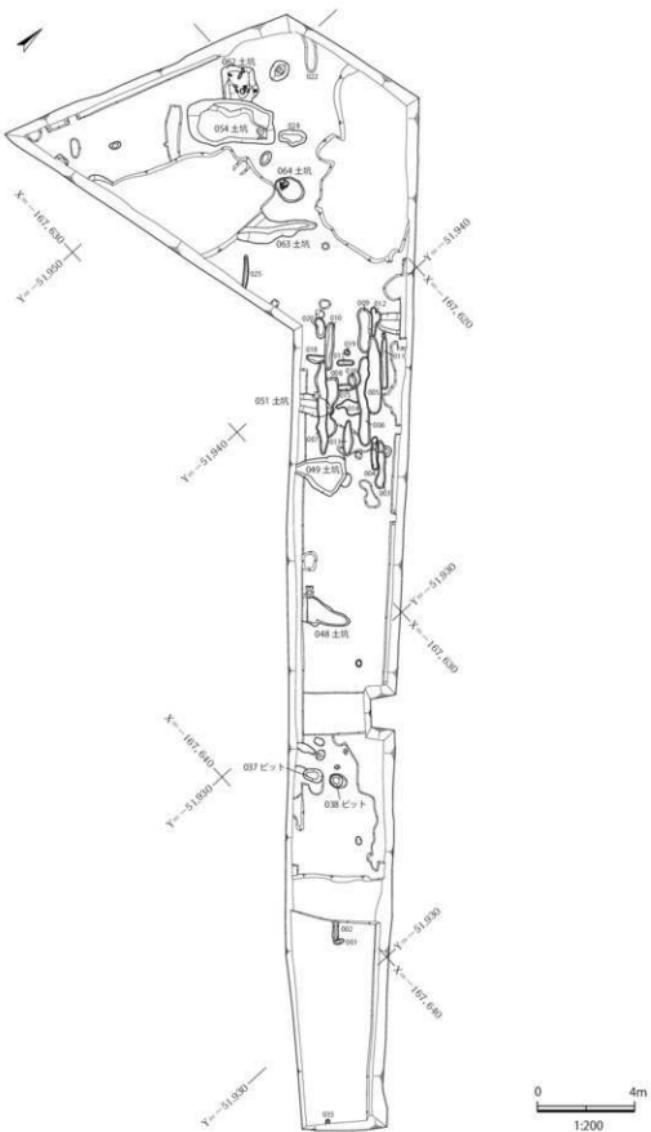


図27 第1調査区平面図

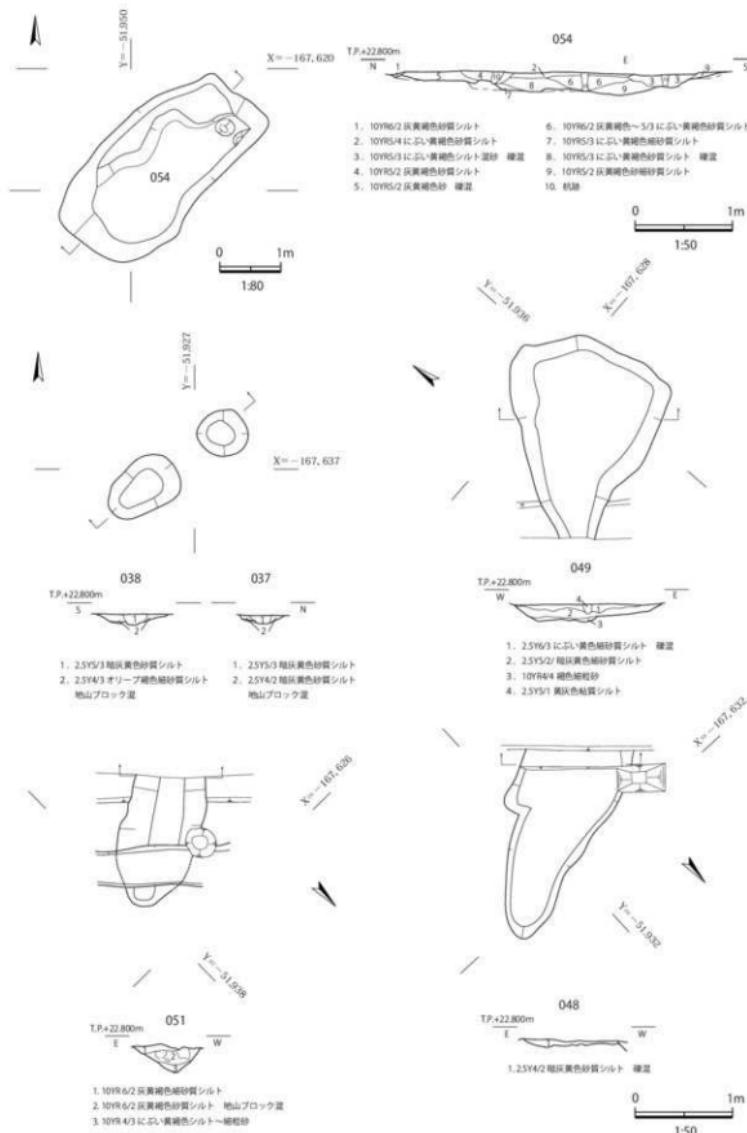


図28 037・38 ピット・048・049・051・054 土坑遺構平面・断面図

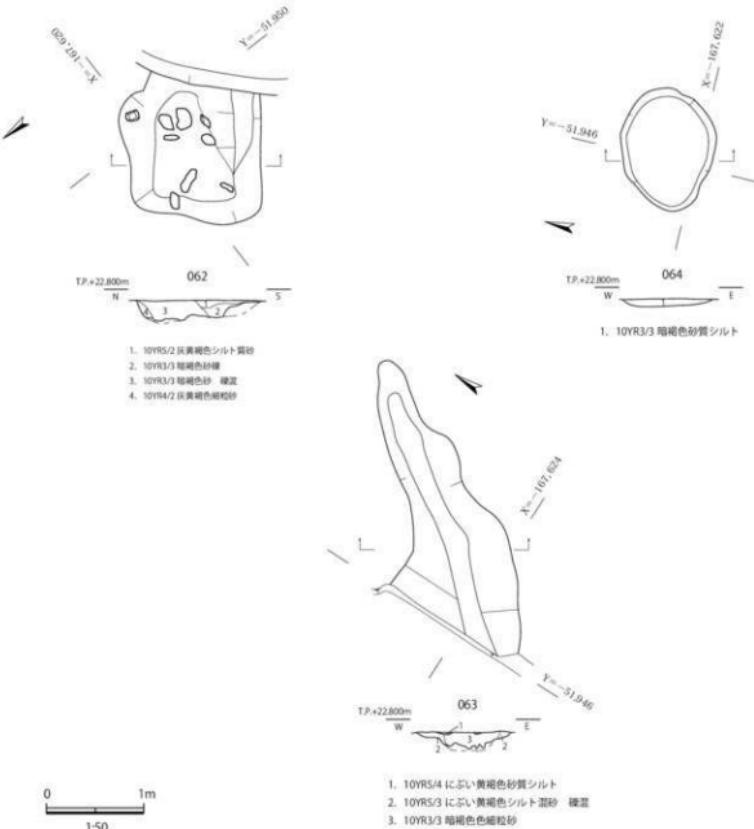


図 29 062・063・064 土坑遺構平面・断面図

含む。

#### 063 土坑（図 29）

不定形の土坑である。ごく浅く、遺物小片が集積している。埋土は暗褐色土が主体となる。弥生時代後期末から古墳時代の土器が出土した。

#### 第2項 出土遺物

##### 022、048、049、051 土坑（図 30）

178は瓦器碗の底部。低平な高台をもつ。13世紀代。022溝出土。179は瓦器皿。直線的な口縁をもつ。048 土坑出土。180は瓦器皿。049 土坑出土。底部付近はユビオサエの痕を残し、口縁部はナデが巡る。181は須恵器環蓋。051 土坑出土。051ではこの他土師器皿などが出土している。

##### 062、063、064 土坑（図 30）

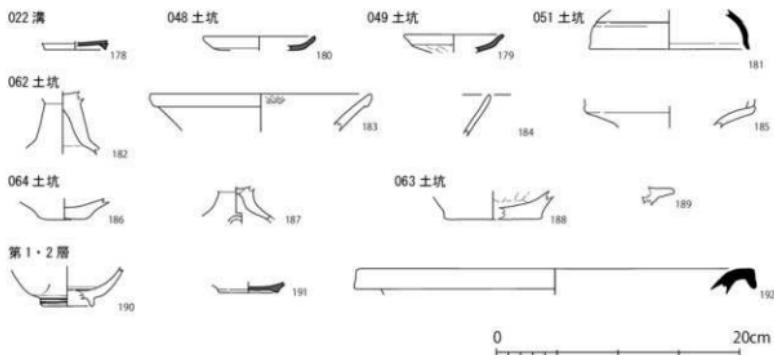


図30 第1調査区出土遺物実測図

182は高環の脚部である。183は壺の口縁部である。端部が肥厚し、内面に波状文が描かれる。184は壺の口縁部である。直線的に開く器形となる。185は複合口縁壺の頸部から口縁部である。062土坑出土。186は壺の底部である。187は橢形高環の脚部である。円形の透かし孔をもつ。弥生時代後期末～古墳時代初頭である。064土坑出土。188は土器の底部である。平底で内面にユビオサエの痕を残す。189は土師器羽釜の鋲部である。063土坑出土。弥生時代から古墳時代の遺物が混在する。

#### 第1・2層（図30）

190は染付椀。18世紀以降である。191は瓦器椀である。低平な高台をもつ。13世紀代である。192は須恵器壺口縁部である。古墳時代後期である。

### 第4節 第2調査区

#### 第1項 検出した遺構

##### 001溝（図32）

幅約120cm、深さ80cmの溝である。東西方向を向く。基盤層となる礫層を掘り込んでいる。003土坑の遺物が流れ込んでいるものと考えられ、弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺物が中心に出土するが、古墳時代後期の土器も含まれる。平成29年度調査第1区土坑64は、方位が同一であり、埋土が礫を含む暗褐色砂からなり、001溝と類似する。出土遺物についても須恵器壺が出土していることから、この土坑がこの溝に繋がるものと考えられる。古墳時代に開削されたものであろう。

##### 002土坑（図32）

椭円形に近い土坑と考えられる。埋土は黒褐色砂質シルトが主体となる。弥生時代後期末から古墳時代初頭の壺の底部が出土している。

##### 003土坑（図32）

圓丸方形に近い形を呈する。基盤層の礫層部分を掘り込んだもので、埋土は黒褐色シルト質砂が主体となり、礫を含む。遺構埋土の上層を中心に弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器が出土した。平面形状から竪穴建物となる可能性があるが、ピットや周壁構を確認することはできなかった。

##### 005竪穴建物（図34）

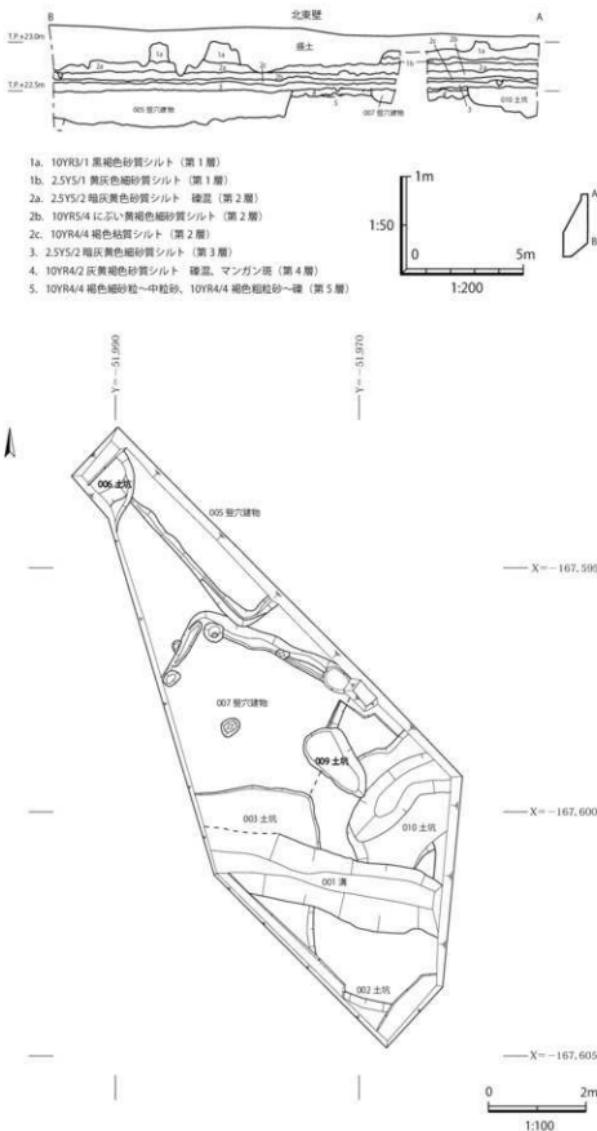


図 31 第2調査区平面・断面図

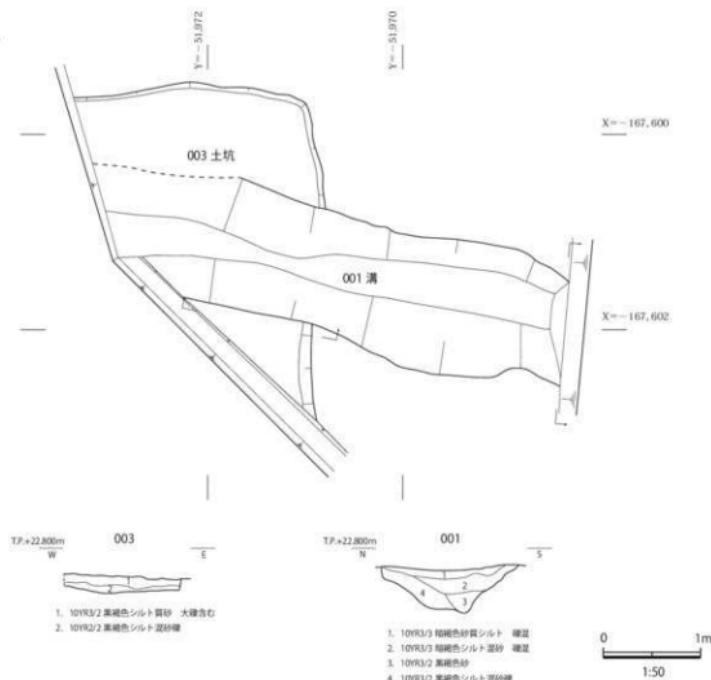


図32 001溝・003土坑遺構平面・断面図

開丸方形となる竪穴建物である。深さ40cmほどである。検出したのは全体のわずかな範囲で、正確な大きさは不明であるが、一辺4.5m以上となる。埋土は黒褐色砂質シルトが主体となる。周壁溝を確認したが、柱穴は確認できなかつた。弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器が出土した。

**006 土坑（図34）**

円形の土坑と考えられる。深さは40cm程度。埋土は暗褐色砂質シルトが主体となる。検出したのはごくわずかな範囲であるため、遺構が広がる可能性がある。弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器が出土した。

#### 007 竪穴建物（図35）

開丸方形となる竪穴建物である。全体は検出されていないが、一辺は3.6mで、やや小型となる。深さは20cm程度で005に比べるとやや浅い。埋土は黒褐色砂質シルトが主体となるが、西側には複数層の堆積が見られる。特に

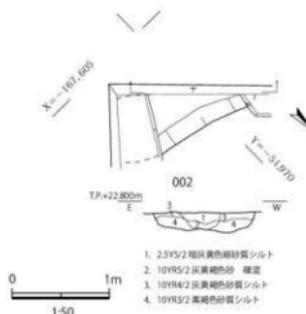


図33 002土坑遺構平面・断面図

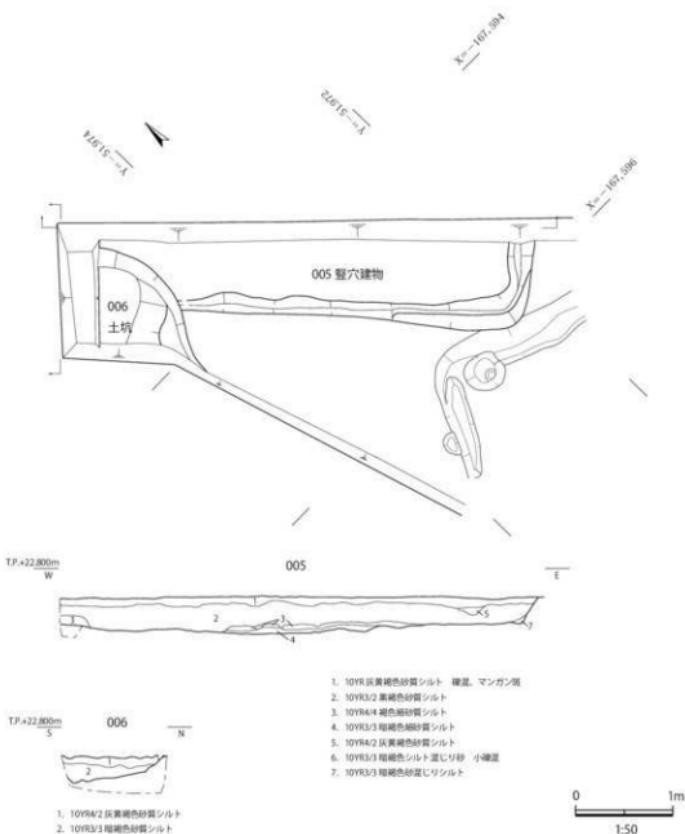


図34 005 壁穴建物・006 土坑遺構平面・断面図

床面の西側には砂礫が集中して堆積していた。東側部分については、遺構の切り合いが多く判然としない部分があった。弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器が出土した。

#### 009 土坑（図35）

楕円形に近い形の土坑である。埋め土は黒褐色砂質シルト1層となる。007 壁穴建物の一部を削平している。

#### 010 土坑（図35）

不定形の大型土坑である。底面も不定形で、土坑の中心付近が深く掘り込まれ、最大30cmとなる。埋土は暗褐色砂が主体となり、礫を多く含む。弥生時代後期末から古墳時代初頭の土器が出土したが、古墳時代初頭の新しい様相の土器を含む。

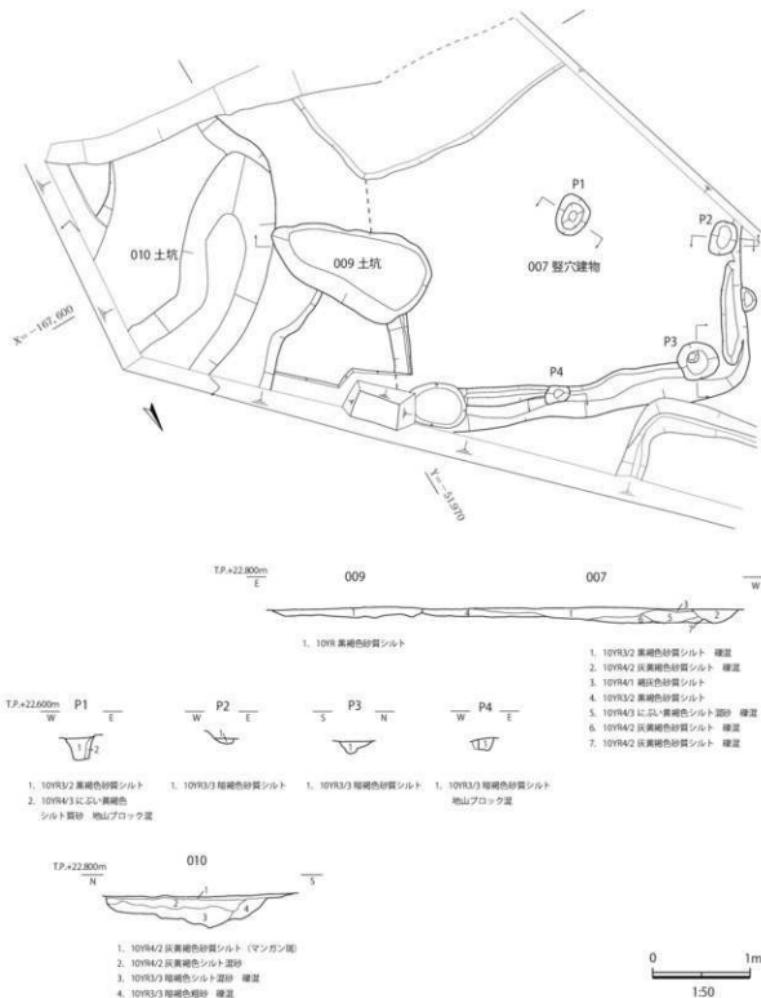


図 35 007 竪穴建物・009・010 土坑遺構平面・断面図

## 第2項 出土遺物

## 001溝(図36)

193・194は鉢である。頸部から外折するが、屈曲はわずかである。内外面ナデ調整である。195は加飾性複合口縁壺である。口縁端部がすぼまり、口縁部下部に円形浮文が貼り付けられる。196は高

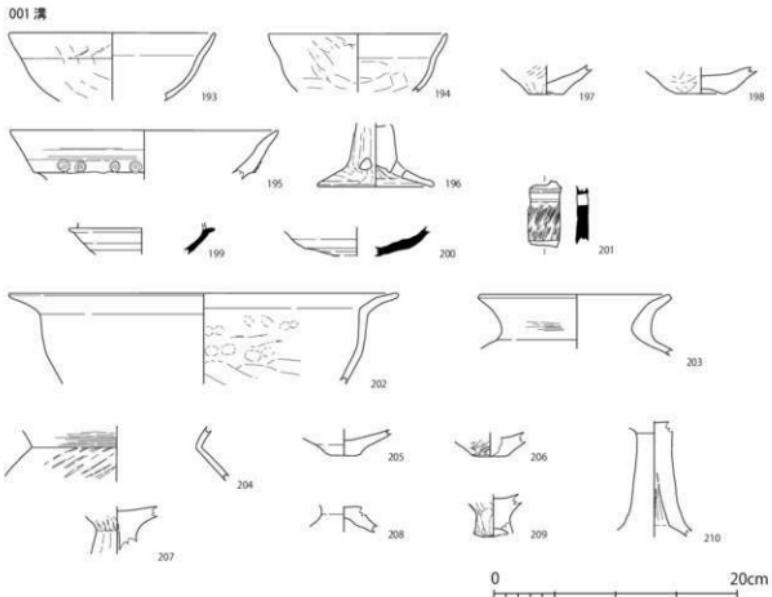


図 36 001 溝出土遺物実測図

壊の脚部である。脚柱部は中実で、裾部が広がる。円形の透かし孔をもつ。197・198は甕の底部である。193～198は弥生時代後期末から古墳時代初頭である。199は須恵器壊身、200は高環の壊身部分で、いずれも口縁部が欠損している。201は須恵器の器台もしくは高環の脚部である。2条の沈線下に櫛描波状文が描かれる。透かし孔をもつ。須恵器は古墳時代後期の所産であろう。

202は大型の鉢である。頸部から外折する器形となる。内面上部にユビオサエの痕を残し、下部はナデ調整となる。203は甕の口縁部である。やや厚手で口縁が外反する器形となる。204は口縁が外折する器形で、胴部外面にタタキ目を残す。205・206は甕の底部である。207は高環の脚部である。208は小型器台の脚部である。209は製塙土器の脚部である。210は高環の脚柱部である。長脚となる。弥生時代後期末から古墳時代初頭が主体となる。

#### 002 土坑（図 37）

211は甕の胴部から底部である。平底で、胴部にかけて右上がりのタタキ目を残す。

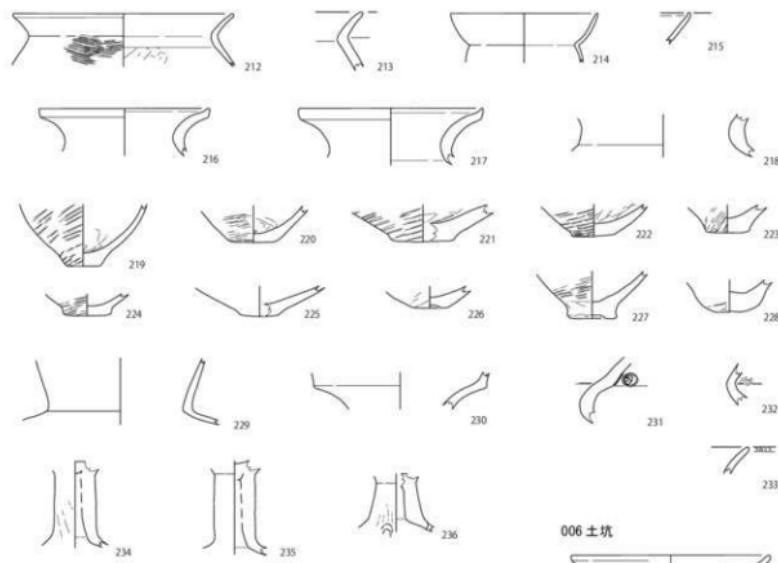
#### 003 土坑（図 37）

212・213・215は甕である。212は口縁が外折する器形で、胴部に横から左上がりのタタキ目を残す。214は口縁が外折する。215は口縁部片で、端部をわざかにつまみ上げている。214は小型丸底壺である。口縁部が内湾し、胴部よりも径が大きい。216、217は広口壺の口縁部である。頸部から外反し、口縁端部がわずかに立ち上がる器形となる。218は壺の頸部と考えられる。219～228は甕の底部である。右上がりのタタキがあるものが大半である。226・227は凹底、228はやや丸みを帯びた底部となる。229は直口壺。230～233は壺である。230は複合口縁壺の頸部片である。231は加飾性複合口縁壺

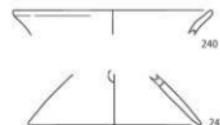
002 土坑



003 土坑



006 土坑



005 穴建物



007 穴建物



010 土坑

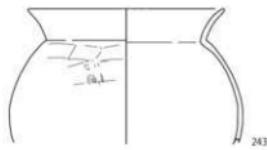


図37 遺構出土遺物実測図

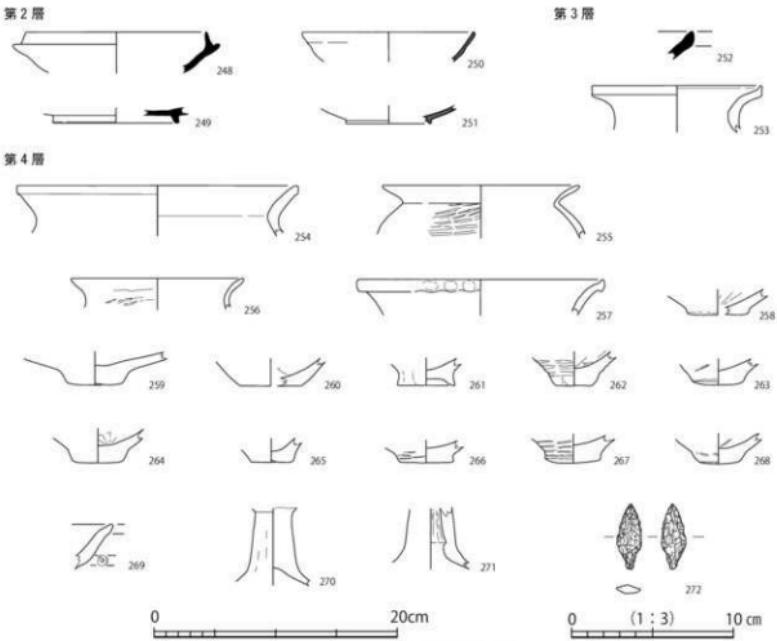


図38 第2・3・4層出土遺物実測図

である。口縁下部に円形浮文が貼り付けられる。232は頸部で波状文が描かれる。233は口縁端部に刻みを施す。234～236は高环の脚柱部である。236は円形の透かし孔をもつ。いずれも弥生時代後期末から古墳時代初頭である。

#### 005 穫穴建物（図37）

237・238は甕の底部である。238は右上がりのタタキを残す。239は複合口縁壺である。弥生時代後期末から古墳時代初頭。

#### 007 穫穴建物（図37）

241は甕の底部である。横方向のタタキを残す。242は小型器台の脚部である。円形透かし孔をもつ。弥生時代後期末から古墳時代初頭。

#### 006 土坑（図37）

240は甕の口縁部である。わずかに外反する。弥生時代後期末から古墳時代初頭。

#### 010 土坑（図37）

243は甕である。口縁が外折する器形となる。外面にはハケ目を残す。244・246は小型鉢である。244は底部付近にわずかにタタキ目を残し、胴部はナデ調整となる。246は内外面ナデと考えられる。245は甕の底部である。底部中心に凹みをもつ。247は複合口縁壺である。口縁端部に刺突列をもつ。内外面はミガキである。弥生時代後期末から古墳時代初頭。やや新しい様相となる。

#### 第2層（図38）

248は須恵器杯身。古墳時代後期。249は須恵器杯B。底部。8世紀。250・251は瓦器椀。250は口縁部にナデが巡る。251は底部。低平な高台が付く。13世紀代か。

#### 第3層（図38）

252は須恵器甕と考えられる。253は壺の口縁部。口縁は外反し、端部をつまみ上げている。弥生時代後期末から古墳時代初頭。

#### 第4層（図38）

254～256は甕の口縁部である。254,255は外反する口縁をもつ。256は直線的に外折する口縁で胴部はタタキである。257は壺の口縁部。端部が肥厚し、つまみ上げられる。また圧痕を残す。258～268は底部である。259は平底で胴部が大きく広がる器形となる。261は凹底となる。262・266・267は底部付近まで横方向のタタキが施される。269は加飾壺の口縁部である。口縁下部に円形波文が貼り付けられる。270・271は高杯の脚柱部である。272は有茎石雛である。

## 第5節 小結

令和3年度調査では、第1調査区で中世の鋤溝群及び土坑、第1・2調査区では古墳時代の溝、弥生時代後期末から古墳時代初頭の竪穴建物、土坑を検出した。中世の鋤溝は条里と方向を合わせている。出土遺物からおおむね14世紀が上限であると考えられる。弥生時代後期末から古墳時代初頭の遺構は第1調査区西端で数基の土坑を確認したが、これより東側は遺構も当該時期の遺物の分布も希薄であった。第2調査区は狭い調査区であったが、竪穴建物や土坑を数基検出しており、当該時期の遺物の出土も集中している。平成29年度調査や周辺の和泉市の調査を考慮すると、集落は第2調査区より北側や西側にさらに広がっていくものと考えられる。

## 第5章 総括

本書では、平成27～29年度調査における調査地の間に存在する未調査箇所における調査成果について報告をおこなった。おもな成果としては、令和元年度調査では15世紀代の礫敷溝、令和2・3年度調査では平安時代の掘立柱建物や弥生時代後期末～古墳時代初頭の土坑、令和3年度調査では、弥生時代後期末～古墳時代初頭の竪穴建物や土坑を確認し、これまでの調査成果を概ね追認することができた。ここでは市道府中阪本線以北泉大津阪本線以南までの成果をまとめ（図39）、府中遺跡北東部での遺跡の変遷について考察を加えたい。なお府中阪本線以南の成果については2012年度調査報告書においてまとめられている（大阪府教育委員会2013）。

### 弥生時代～古墳時代

平成27年度～令和3年度にかけての調査地において集落が展開し始めるのは、弥生時代中期後半以降で、平成29年度調査第1区で竪穴住居1棟を検出している。その後弥生時代後期末～古墳時代初頭にかけて集落の最盛期を迎える、府調査地西側でも同時期の住居を検出しており（和泉市1976・78）、集落は北西に広がっていくことが想定される。古墳時代の集落については、平成27・28年度A・B・C地区の自然流路付近に韓式系土器が出土する竪穴建物を検出している。また平成29年度第2区では古墳時代中期～終末期にかけての墓域を検出した。当該時期の居住域は確認できていないが、周辺に居住域が存在する可能性がある。この他、古墳時代後期の溝を平成29年度及び令和3年度調査で検出している。なお、弥生時代以前については令和2・3年度調査第1・2調査区において縄文時代晚期後半の土器が出土しているが、この1点のみで活動は希薄であったものと推測される。

### 古代

当該調査地は、推定和泉国府跡の東側に位置し、今回の調査地を含み各所で8世紀代の遺物が確認されているが、遺構については確認されていない。この地が再び集落として展開するのは10・11世紀代と考えられ、平成27・28年度D・E区で掘立柱建物5棟、令和2・3年度第1調査区で1棟を検出している。前者と後者は約400m離れて位置し、この間に当該時期の遺構は希薄で、平安時代に埋没した自然流路を挟む。このことから両者は別々のものであり、周囲にそれぞれの集落が広がっていたと考えられる。また建物は軸が座標北から45度前後東に振っており（1棟は50度前後）、推定される条里に概ね方向を揃えていることから、少なくとも10～11世紀には条里が機能していたことは指摘できる。

### 中世

12～13世紀代のピットが平成27・28年度D・E区、令和元年度B区、令和2・3年度第1調査区で確認されているが、当該調査地においては遺構は希薄で、平成20年度調査等で確認されているように集落の中心は南側にあったと考えられる。府中阪本線以北では、15世紀代が上限年代と考えられる鍬溝群が広範囲に渡って確認されており、室町時代には周辺一帯が生産域と化していた。鍬溝以外の遺構としては平成27・28年度A・B・C区や令和3年度第1調査区において土採りの土坑が検出されているが、全体としては生産域として利用されていたといえよう。一方、令和元年度調査では、南北方向に走る礫敷の溝が確認されている。調査所見から耕作に伴う水路ではなく、土地を区画する溝と考えられ、付近に居住域があったことが想定される。

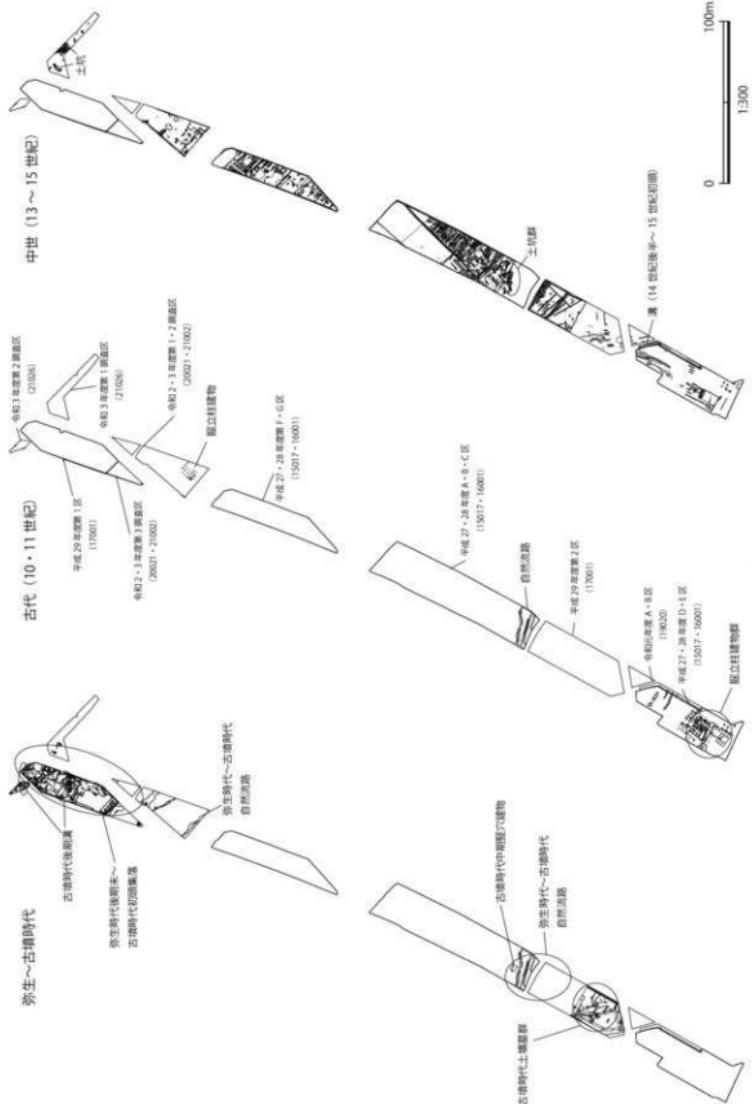


図 39 府中遺跡遺構配置

## 引用・参考文献

- 和泉丘陵内遺跡調査会 1993『万町北遺跡』和泉丘陵内遺跡調査報告書
- 和泉市教育委員会 1976『府中遺跡発掘調査概要 一和泉市府中町所在一』
- 和泉市教育委員会 1978『府中遺跡発掘調査概要・II 一和泉市府中町所在一』
- 大阪府教育委員会 2012『和泉寺跡・府中遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2011-3
- 大阪府教育委員会 2013『和泉寺跡・府中遺跡II』大阪府埋蔵文化財調査報告 2012-5
- 大阪府教育委員会 2015『和泉寺跡・府中遺跡III』大阪府埋蔵文化財調査報告 2014-5
- 大阪府教育委員会 2018『府中遺跡』大阪府埋蔵文化財調査報告 2017-2
- 大阪府教育委員会 2019『府中遺跡II』大阪府埋蔵文化財調査報告 2018-2
- 大阪府立近づ飛鳥博物館 2006『年代のものさし-陶邑の須恵器-』
- 尾上実・森島康雄・近江俊秀 1995『瓦器椀』中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 財團法人大阪府埋蔵文化財協会 1994『男里遺跡』(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書 第83号
- 佐藤隆 2004『8世紀の須恵器編年と難波宮・平城宮の並行関係』『大阪歴史博物館研究紀要』第3号
- 仁木宏 2013『第1章 人びとの生活の社会の変貌』『和泉市の考古・古代・中世』和泉市の歴史 6
- 西村歩・池峯龍彦 2006『和泉地域』『古式土師器の年代学』(財) 大阪府文化財センター
- 濱道孝尚・岸本直文 2012『和泉国の条里制の概観』『和泉郡の条里』和泉市史紀要第19集
- 森 隆 1995『黒色土器』中世土器研究会『概説 中世の土器・陶磁器』真陽社
- 和氣遺跡調査会 1979『和氣遺跡発掘調査報告書』



## 【付表 観察表 令和元年度】

被裁番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 括弧内は復元径)			色調		胎土	備考
					口径	器高	底径・高台径	内面	外面		
1	A区	3層	瓦器	椀	(14.0)	残2.2		2.5Y8/2 灰白	5Y5/1 灰	2.5Y8/2 灰白	密
2	B区	3層	瓦器	椀	(12.0)	残1.7		2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y8/1 灰	密
3	B区	3層	瓦器	椀				5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	2.5Y8/2 灰白	密
4	B区	3層	瓦器	椀		残2.1		2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y7/2 灰黄	密
5	A区	3層	土師器	皿	(8.0)	残1.45	10YR7/4 にぶい黄柾	10YR8/3 浅黄柾	10YR7/4 やや暗(カサリ 混合心)		
6	B区	3層	土師器	皿	(7.2)	残1.45	10YR5/2 灰褐	7.5YR6/4 にぶい柾	7.5YR5/6 密(カサリ疎少 し含む)		
7	B区	3層	陶器	椀	(10.0)	残2.1		2Y6/1 黄灰	2Y6/1 黄灰		
8	B区	3層	須恵器	杯		残2.1		N6/0灰	N6/0灰	7.5YR6/2 灰褐	密
9	B区	3層	須恵器	器台		残4.9		2.5Y5/1 黄灰	5Y6/1灰	10R4/1 赤褐	密
10	B区	3層	須恵器質 土製品	脚部		残4.85		2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	密
11	A区	4層	須恵器	蓋	(13.0)	残2.6		2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	密
12	A区	4層	須恵器	蓋	(12.0)	残2.6		10YR6/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	10YR6/1 褐灰	密
13	A区	4層	須恵器	口縁部	(15.4)	残3.15		2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	密
14	B区	4層	須恵器	蓋	(20.0)	残3.0		2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/1 黄灰	密
15	B区	4層	須恵器	蓋		残3.3	高台 10.45	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	密
16	A区	4層	土師器	杯	(16.0)	残3.8		7.5YR7/6 柾	7.5YR7/6 柾	7.5YR6/4 密(カサリ疎含 む)	
17	B区	4層	土師器	杯	(14.0)	残3.25	10YR5/3 にぶい黄柾	10YR5/3 にぶい黄柾	7.5YR7/4 にぶい柾	7.5YR6/4 密(カサリ疎)	
18	B区	4層	土師器	杯	(13.0)	残2.6	7.5YR6/6 柾	7.5YR7/4 にぶい柾	7.5YR6/6 柾	7.5YR6/4 やや暗(長石、 カサリ疎含む)	
19	B区	4層	土師器	皿	(12.0)	2.85	7.5YR7/4 にぶい柾	7.5YR7/4 にぶい柾	7.5YR7/4 にぶい柾	7.5YR7/4 密(カサリ疎・ 金雲母含む)	
20	B区	4層	土師器	杯	(16.0)	残2.2	10YR5/2 灰黄柾	7.5YR6/4 にぶい柾	7.5YR5/4 にぶい柾	7.5YR5/4 密	
21	A区	4層	土師器	皿	(14.2)	残2.75	5YR6/6 柾	5YR6/6 柾	5YR6/6 柾	5YR6/6 密	
22	A区	4層	土師器	杯	(11.6)	残3.3	5YR6/6 柾	5YR6/6 柾	5YR6/6 柾	5YR6/6 密(カサリ疎少 し含む)	
23	B区	4層	土師器	甕	(18.0)	残3.45	7.5YR5/4 にぶい柾	2.5YR5/6 明赤柾	2.5YR5/6 明赤柾	2.5YR5/6 密(金雲母含む)	
24	A区	4層	土師器	甕	(18.0)	残5.1	10YR7/4 にぶい黄柾	5YR6/6 柾	7.5YR6/6 明褐	7.5YR5/6 密(カサリ疎含 む)	
25	B区	4層	土師器	甕	(24.0)	残2.4	5YR6/6 柾	10YR6/4 にぶい黄柾	10YR6/6 柾	10YR6/6 密(3.5 m 以下)の長石、 カサリ疎含む)	
26	B区	4層	土師器	甕	(30.0)	残2.7	10YR7/3 にぶい黄柾	7.5YR5/3 にぶい柾	10YR7/4 にぶい黄柾	10YR7/4 大の長石含む)	
27	A区	4層	土師器	製塩土器	(8.0)	残2.4	7.5YR8/6 浅黄柾	10YR8/4 浅黄柾	7.5YR8/4 浅黄柾	7.5YR8/4 密(カサリ疎含 む)	
28	A区	4層	瓦	平瓦				2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	やや密
29	B区	002	瓦器	椀	(16.0)	残3.8		2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	やや密

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 括弧内は復元径)				色調			胎土	備考
					口径	器高	底径・高台径	内面	外面	断面			
30	B区	003	瓦器	鉢	(14.0)	残 2.6		5Y6/1 灰	5Y6/1 灰	2.5Y8/1 灰白	密 (長石、雲母 含む)		
31	B区	003	白磁	碗	(16.0)	残 2.8		2.5G7/1 明オーリーブ	2.5G7/1 明オーリーブ	N8/0 灰白	密		
32	B区	003	白磁	碗		残 1.9	高台 (6.6)	5Y8/1 灰白	5Y8/1 灰白	2.5Y8/1 灰白	密 (長石含む)		
33	B区	003	陶器	鉢		残 2.5		7.5YR5/2 灰褐	7.5YR4/1 灰褐	7.5YR7/4 灰褐 (2 mm 以下長石含む)			
34	B区	003	瓦質土器	羽釜	(24.0)	残 3.5		5VA/1 灰	5V3/1 オリーブ黒	5V8/1 灰白	やや細 (2 mm 以下長石含む)		
35	B区	003	瓦質土器	鉢	(39.8)	残 5.6		N4/0 灰	N5/0 灰	5Y8/1 灰白	やや細 (2 mm 以下長石含む)		
36	B区	003	瓦質土器	鉢	(30.0)	残 4.4		N3/0 暗灰	N3/0 暗灰	10YR8/1 灰白	粗 (2 mm以下 長石含む)		
37	B区	003	瓦	平瓦				N7/0 灰白	N7/0 灰白	N7/0 灰白	粗 (2 mm以下 長石含む)		
38	B区	003	錫釉陶器	杯		残 1.7		10YR7/4 にぶい黄褐	10YR7/4 にぶい黄褐	10YR7/4 にぶい黄褐 (1 mm 以下長石含む)	密		緑釉残る
39	B区	007	土師器	皿	(10.0)	1.35		7.5YR7/6 稍	7.5YR7/6 稍	5YR7/6 稍	やや密 (長石、 石英、雲母含む)		
40	B区	007	土師器	皿	(10.0)	1.25		5YR6/6 稍	5YR6/6 稍	5YR6/6 稍	やや密 (2 mm 以下長石含む)		
41	A区	トレンチ	土師器	底部		残 3.2	(5.0)	7.5YR6/2 にぶい褐	7.5YR6/2 にぶい褐	5YR5/6 明褐色	やや細 (1 mm 以下のカサリ繊 含む)		
42	A区	トレンチ	土師器	甕		残 6.0		5YR6/6 稍	5YR6/6 稍	5YR6/6 稍	密 (1 mm以下石 保付着)		
43	B区	掘瓦	須恵器	杯	(12.1)	3.65		2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	密		

## 【付表 観察表 令和2・3年度調査】

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 括弧内は復元径)				色調			胎土	備考
					口径	器高	底径・高台径	内面	外面	断面			
44	I区	049	土師器	皿	(9.5)	0.9		5YR6/6 稍	5YR5/6 明褐色	5YR5/6 粗			
45	I区	081	土師器	皿		9.4	2.0	10YR8/3 浅黄褐	10YR8/3 浅黄褐	10YR8/2 やや密			
46	I区	擬立柱建物	黒色土器	鉢		残 1.4	高台径 (8.8)	2.5Y3/1 黒褐	10YR7/3 にぶい褐	10YR8/2 灰白	やや密		内面黒色
47	I区	擬立柱建物	黒色土器	鉢	(14.9)	残 3.0		2.5Y2/1 黒	2.5Y2/1 黒	2.5Y2/1 黒	密		外表面黒色
48	I区	擬立柱建物	土師器	鉢	(9.6)	残 1.5		10YR7/4 浅い黄褐	10YR8/3 浅黄褐	10YR7/2 にぶい黄褐	密		
49	I区	擬立柱建物	土師器	鉢	(14.3)	残 3.6		5YR7/6 稍	7.5YR7/6 稍	5YR7/6 やや粗			
50	I区	擬立柱建物	土師器	鉢		残 1.65	高台径 6.1	10YR3/2 黒褐	10YR4/2 灰黄褐	5YR6/4 にぶい稍	やや密		
51	I区	擬立柱建物	土師器	鉢		(11.8)	残 1.7	10YR6/4 にぶい黄褐	7.5YR6/6 稍	7.5YR6/6 稍	やや密		
52	I区	擬立柱建物	土師器	鉢	(9.9)	残 1.75		7.5YR8/2 灰白	10YR6/2 灰黄褐	7.5YR8/2 灰白	密		
53	I区	001	土器	甕	(19.8)	残 2.6		10YR4/3 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	10YR4/6 にぶい黄褐	やや粗 (角閃石、 生駒西側 産)		
54	I区	001	土器	甕	(16.0)	残 2.0		10YR7/4 にぶい黄褐	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰黄褐	粗		
55	I区	001	土器	鉢	(28.6)	残 4.6		10YR7/3 にぶい黄褐	10YR6/4 にぶい黄褐	10YR8/4 浅黄褐	粗		
56	I区	001	土器	甕	(12.9)	残 4.9		5YR6/6 稍	5YR6/6 稍	5YR6/6 稍	密		

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法線(cm/括弧内は復元径)			色調			胎土	備考
					口径	器高	底径・高台径	内面	外面	断面		
57	1区	001	土器	甕	残2.8	底径4.3	10YR8/2 灰白	10YR8/2 灰白	10YR6/1 粗			
58	1区	001	土器	甕	残1.9	底径4.95	2.5YR6/6 粗	10YR7/4 にぶい・濃相	10YR7/4 にぶい・黄相			
59	1区	001	土器	底部	残2.0	底径3.95	5YR7/6 相	5YR6/8 相	5YR6/8 相			
60	1区	001	土器	甕	残1.5	底径3.45	5YR6/6 粗	5YR6/6 相	5YR6/6 相			
61	1区	001	土器	甕	残1.55	底径4.4	2.5Y5/1 黄灰	10YR8/3 浅黄相	2.5Y7/1 灰白			
62	1区	001	土器	底部	残3.0	底径(4.1)	2.5Y7/2 灰黄	10YR8/2 灰白	2.5Y4/1 黄相			
63	1区	001	土器	高环	残7.45		2.5Y4/2 暗灰黄 相	7.5YR6/6 相	2.5Y7/1 灰白			
64	1区	001	土器	高环	残6.0		5YR6/6 相	5YR6/6 相	5YR5/2 灰相			
65	1区	001	土器	高环	残7.5		7.5YR6/8 相	5YR6/8 相	5Y5/2 灰オリーブ相			
66	1区	001	土器	高环	残6.2		5YR7/4 にぶい・相	5YR8/4 洪相	2.5Y7/1 灰白		透かし	
67	1区	001	土器	高环	残6.0		10YR7/6 明赤褐	10YR8/2 灰白	10YR4/6 褐		透かし	
68	1区	001	土器	高环	残4.0		7.5YR8/4 浅黄相	7.5YR7/4 浅・相	10YR8/2 灰白	やや密		
69	1区	001	土器	高环	残4.5		2.5YR6/8 相	5YR7/6 相	2.5Y7/2 灰黄		透かし	
70	1区	001	石器	敲石	長さ7.2	幅5.4						
71	1区	090	土器	甕	残2.0	底径4.3	5YR6/8 相	10YR8/3 浅黄相	2.5YR6/6 相	やや粗		
72	1区	079	須恵器	环身	(14.0)	残3.0	N7/0 灰白	N7/0 灰白	N5/0 灰	やや密		
73	1区	079	土器	甕	残3.4	底部径 (14.0)	2.5Y8/4 淡黄	10YR8/2 灰白	2.5Y7/1 灰白	粗		
74	1区	092	土器	甕	(22.8)	残3.9	10YR8/4 浅黄相	10YR8/4 浅黄相	10YR5/3 にぶい・黄相	やや密		
75	2区	092	土器	甕	(13.0)	残4.1	10YR7/3 にぶい・黄相	10YR5/3 にぶい・黄相	7.5YR6/4 にぶい・相	やや密		
76	2区	092	土器	壺	残3.9		10YR8/4 浅黄相	7.5YR8/6 浅黄相	7.5YR7/6 相	やや密		
77	2区	092	土器	小型丸底壺	(11.4)	残3.85	2.5YR6/8 相	2.5YR6/8 相	2.5YR8/6 浅黄相	やや粗		
78	2区	092	土器	小型丸底壺	残3.7		2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	2.5YR5/8 明赤褐	やや密		
79	2区	092	土器	高环	残6.6		5YR6/6 相	5YR6/6 相	5YR6/6 相	やや粗		
80	2区	092	土器	甕	残2.1	底部径3.5	10YR3/1 黒褐	7.5YR5/3 にぶい・相	7.5YR6/4 にぶい・相	粗		
81	2区	092	土器	甕	残1.4	底部径3.8	5YR5/8 明赤褐	7.5YR6/6 相	5YR5/8 明赤褐	やや粗		
82	2区	092	土器	小型器台	残4.3		7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	やや粗	透かし	
83	2区	092	土器	小型器台	残4.5		7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	10YR8/6 相	透かし		
84	2区	092	土器	小型器台	残4.5		5YR6/8 相	5YR6/8 相	10YR8/4 浅黄相	やや粗	透かし	
85	2区	092	土器	甕	(14.8)	残2.6	5YR7/4 にぶい・相	5YR7/4 にぶい・相	7.5YR5/4 にぶい・相	やや粗(雲母微 細粒含む)		
86	2区	1層	土器	甕	(19.8)	残3.1	7.5YR7/6 相	7.5YR8/8 黄相	2.5Y6/2 灰黄	やや粗		
87	2区	1層	土器	甕	残5.9		10YR8/4 浅黄相	10YR8/4 浅黄相	10YR8/4 浅黄相	やや密		
88	2区	1層	土器	底部	残1.8	底径1.9	5YR6/8 相	5YR7/6 相	10YR8/4 浅黄相	やや密		

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 箔孔内は復元径)			色調			胎土	備考	
					口径	器高	底径・高台径	内面	外面	断面			
89	2区	1層	土器	甕	残1.55	底径 (5.4)	10YR5/3 黄い黄褐	10YR7/3 にぶい黄粉	7.5YR6/6 粗	粗			
90	2区	1層	土器	小型器台	残5.15		5YR6/8 粗	5YR6/8 粗	7.5YR8/6 浅黄粉	やや粗	透かし		
91	2区	1層	土器	甕	残1.8	底径3.8	2.5YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄粉	2.5Y7/1 灰白	粗			
92	1区	2層	土器	高环	残4.1		7.5YR8/4 浅黄粉	10YR8/3 浅黄粉	10YR6/1 褐	やや密 (玄母微 細粒含む)			
93	1区	2層	土器	高环	残3.5		7.5YR5/6 明闇	7.5YR5/6 粗	10YR4/3 にぶい黄褐	やや粗			
94	1区	2層	土器	甕	残1.6		7.5YR7/4 にぶい白	5YR7/4 にぶい白	2.5YR6/6 粗	やや密			
95	1区	2層	須恵器	环身	(11.3)	残4.1	N6/0 灰	5Y6/1 灰	N6/0 灰	密			
96	1区	2層	須恵器	环蓋		残1.1	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	やや密			
97	1区	2層	須恵器	环蓋	(15.4)	残1.5	2.5Y7/2 灰黄	NT7/0 灰白	5Y5/1 灰	やや粗			
98	1区	2層	須恵器	环蓋	(18.0)	残1.3	5Y7/1 灰白	NT7/0 灰白	N6/0 灰	密			
99	1区	2層	須恵器	环身		残1.3	N6/0 灰 (13.9)	N6/0 灰	2.5YR5/3 にぶい赤褐	密			
100	1区	2層	須恵器	甕	(27.0)	残2.65	5Y7/2 灰白	5Y6/1 灰	2.5Y6/1 黄灰	密			
101	1区	2層	須恵器	甕		残6.25	2.5Y7/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	2.5YR5/1 赤	やや密			
102	1区	2層	瓦器	檢		残1.15 高台径 (6.0)	10YR2/1 黑	10YR2/1 黑	10YR2/2 灰白	密			
103	1区	2層	黑色土器	椗		残2.3	高台径 (16.2)	10YR4/1 褐灰	2.5YR6/6 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい褐	やや密		
104	1区	2層	瓦器	椗		残1.0	高台径 (5.0)	2.5Y5/2 褐灰黄	2.5Y7/2 灰黄	10YR6/6 明黄闇	やや密		
105	1区	2層	瓦器	椗		残1.2	高台径 (3.2)	2.5Y7/2 灰黄	2.5Y4/1 灰黄	2.5Y8/1 灰白	密		
106	1区	2層	土師器	皿	(10.0)	1.0		5YR6/6 明赤褐	5YR5/6 明赤褐	5YR6/6 明赤褐	やや粗		
107	1区	2層	青磁	椗	(14.6)	残3.9		10Y5/2 オリーブ灰	10Y5/2 オリーブ灰	10Y7/1 灰白	密		
108	1区	2層	土師器	羽釜	(24.0)	残3.6		7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR6/6 にぶい褐	10YR7/3 にぶい黄粉	粗		
109	1区	2層	瓦質土器	摺鉢		残2.7	5Y4/1 灰	5Y4/1 灰	2.5Y5/6 黄褐	やや粗			
110	1区	2層	瓦質土器	摺鉢	(30.0)	残2.8	2.5Y4/1 黄灰	5Y5/1 灰	5Y7/1 灰白	密 (玄母ごく僅 かに含む)			
111	1区	2層	土器品	人形		3.5	7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい褐	7.5YR6/4 にぶい褐	やや密 (角留門?) にぶい褐			
112	1区	2層	瓦	平瓦	体部最大 長19.9 幅12.4		(凸) N3/0 (凹) N3/0 頬灰	(凸) N3/0 (凹) N3/0 頬灰	5Y8/1 灰白	粗 (2mm以下長 石含む)			
113	1区	2層	瓦	平瓦	現存最大 長17.0 幅14.0		(凸) N6/0 (凹) N5/5/1 灰	5Y8/1 灰白	粗 (長石含む)				
114	1区	3層	縄文土器	深跡		残3.3	2.5Y3/1 黒闇	10YR4/3 にぶい黄粉	2.5Y3/1 黒闇	粗			
115	1区	3層	土器	甕	(20.0)	残2.0	10YR6/3 にぶい黄粉	2.5YR6/6 粗	5YR7/6 粗	密			
116	1区	3層	土器	甕?		残3.1	7.5YR8/3 浅黄粉	7.5YR8/4 浅黄粉	2.5Y7/1 灰白	粗			
117	1区	3層	土器	甕?		残2.4	5YR6/6 粗	5YR6/1 褐灰	7.5YR7/6 粗	やや粗			
118	1区	3層	土器	甕	(12.0)	残3.0	7.5YR7/6 粗	7.5YR7/6 粗	7.5YR7/6 粗	密 (1mm以下長 石少量含む)			
119	1区	3層	土器	甕		残5.7	底径 (4.0)	2.5YR3/1 灰白	10YR7/2 にぶい黄粉	2.5YR7/2 灰黄	やや粗 (2mm以 下長石含む)		

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 括弧内は復元径)			色調 内面	色調 外面	胎土	備考	
					口径	器高	底径・高台径					
120	1区	3層	土器	甕	残1.7	底径3.8	10YR8/1 灰白	2.5YR6/4 にぶい相	N3/0暗灰	やや粗 (2mm以下長石含む)		
121	1区	3層	土器	甕	残2.8	底径3.8	7.5YR8/3 浅黄緑	7.5YR7/4 にぶい相	10YR6/4 灰	粗 (2mm以下長石、石英含む)		
122	1区	3層	土器	甕	残2.2	底径(4.0)	10YR4/1 褐灰	7.5YR7/6 相	10YR5/2 灰	粗		
123	1区	3層	土器	壺	残5.1	底径(12.0)	2.5YR6/6 相	5YR7/4 にぶい相	10YR7/1 灰白	粗 (3~5mm以下長石含む)		
124	1区	3層	土器	壺	(18.7)	残1.7	7.5YR8/4 浅黄緑		10YR7/6 明黄緑	やや粗		
125	1区	3層	土器	壺	残3.9	底径(24.0)	10YR7/6 明黄緑	5YR6/8 相	5Y7/2 灰白	やや密		
126	1区	3層	土器	甕	残2.5	底径4.4	7.5YR6/6 相	2.5YB1/1 灰白	2.5Y6/1 黄灰	粗	中心に凹み	
127	1区	3層	土器	甕	残2.9	底径(2.4)	10YR8/4 浅黄緑	7.5YR8/3 浅黄緑	10YR5/2 灰黄緑	粗	中心に凹み	
128	1区	3層	土器	底部	残8.3		10YR8/4 浅黄緑	10YR8/4 浅黄緑	10YR5/1 褐灰	粗		
129	1区	3層	土器	高环	残6.2		7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	粗 (2mm以下長石、石英含む)		
130	1区	3層	土器	高环	残7.9		7.5YR7/4 にぶい相	7.5YR7/4 にぶい相	10YR8/1 灰白	粗 (2mm以下長石、石英、カサリ縫合含む)		
131	1区	3層	土器	高环	残2.5	底径(3.6)	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	2.5Y8/3 淡黄	粗		
132	1区	3層	土器	高环	残3.5		7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	10YR7/6 にぶい黄緑	やや密		
133	1区	3層	土器	製塙土器	残3.5		10YR7/6 明黄緑	10YR7/6 明黄緑	10YR7/6 明黄緑	やや密 (1mm以下長石含む)		
134	1区	3層	土器	製塙土器	残3.1		10YR8/3 浅黄緑	7.5YR6/6 相	2.5Y6/1 黄灰	やや粗		
135	1区	3層	土器	製塙土器	残3.8		7.5YR7/4 にぶい相	7.5YR7/4 にぶい相	7.5YR4/3 周	やや密 (2mm以下長石、カサリ縫合含む)		
136	1区	3層	土器	小型器台	残2.9		10YR8/3 浅黄緑	7.5YR6/6 相	2.5Y6/1 黄灰	粗	透かし	
137	1区	3層	土器	小型器台	残3.15		10YR7/1 灰白	10YR6/2 灰黄緑	7.5YR5/6 明緑	密	透かし	
138	1区	3層	土器	小型器台	残2.7		7.5YR8/2 灰白	10YR8/3 浅黄緑	2.5YR4/1 密 (1mm以下長石少量含む)			
139	1区	3層	土器	壺	残2.55		7.5YR7/4 にぶい相	2.5YR4/1 周	2.5Y8/2 灰白	密		
140	1区	3層	須恵器	环蓋	(14.0)	残2.6	N5/0 灰	2.5Y6/1 黄灰	2.5Y6/2 灰黃	やや粗		
141	1区	3層	須恵器	环蓋	(11.6)	残2.4	N6/0 灰	7.5Y7/1 灰白	7.5Y7/1 灰白	やや密		
142	1区	3層	須恵器	环身	(11.6)	残3.6	7.5Y7/1 灰白	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	やや密		
143	1区	3層	須恵器	环身	(11.4)	残2.4	N2/0 灰白	N2/0 灰白	7.5YR6/1 周	ヘラ指 き?		
144	1区	3層	須恵器	壺?		残7.6	2.5YR6/1 赤鉄	10YR3/1 黑闇	10YR5/1 周灰	密		
145	1区	3層	須恵器	跡?	(20.1)	残4.1	5Y7/1 灰白	5Y7/1 灰白	5Y5/1 灰	密		
146	1区	3層	須恵器	环		残1.8 高台(11.6)	2.5Y7/2 灰黄	7.5Y7/2 灰白	2.5Y4/2 暗灰黄	やや密		
147	1区	3層	土師器	椀	(16.0)	残2.8	7.5YR4/3 褐	7.5YR6/4 にぶい相	7.5YR7/3 にぶい相	やや粗		
148	1区	3層	石器	石匙	最大長 3.4	最大幅 5.15					サヌカイ ト	
149	1区	3層	石器	石鍬	最大長 2.7	最大幅 1.6					サヌカイ ト	
150	1区	3層	石器	石鑿	最大長 (2.2)	最大幅 1.6					サヌカイ ト	
151	3区	001	土器	甕	(15.0)	残2.3		5YR7/6 相	5YR7/6 相	10YR4/6 褐	やや粗	

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 管孔内は復元径)			色調			胎土	備考
					口径	器高	底径・高台径	内面	外面	断面		
152	3区	001	土器	甕	残 3.5			10YR6/6 明鏡面	10YR6/6 明鏡面	2.5Y5/2 暗灰黄	粗	
153	3区	001	土器	甕	残 2.9			7.5YR7/4 にぶい黄	5YR6/6 粗	7.5YR6/6 粗	粗	
154	3区	001	土器	底部	残 2.9	底径 (8.6)		7.5YR6/3 明鏡面	10YR7/4 にぶい黄粉	10YR4/2 从黄鏡	粗	
155	3区	001	土器	底部	残 2.7	底径 (5.8)		2.5Y6/2 灰黄	2.5Y4/1 灰灰	2.5Y4/1 黄灰	粗	
156	3区	001	土器	甕	残 3.0	底径 (3.6)		2.5Y4/1 灰灰	2.5YR6/6 粗	2.5Y7/2 灰黄	粗	
157	3区	001	土器	底部	残 3.6	底径 (7.6)		10YR6/2 灰鏡面	10YR4/1 灰白	10YR5/2 灰黄鏡	中砂粗	
158	3区	001	土器	甕	残 2.7	底径 (5.1)		10YR8/3 浅黄柾	10YR7/4 にぶい黄柾	2.5Y7/1 灰白	粗	
159	3区	001	土器	甕	残 1.95	底径 (4.7)		10YR7/3 にぶい黄柾	7.5YR5/2 灰鏡面	10YR7/3 にぶい黄柾	粗	
160	3区	001	土器	高环	残 5.9			5YR7/6 柾	10YR8/4 浅黄柾	2.5Y4/1 灰灰	中砂粗	
161	3区	001	土器	高环	残 5.7			10YR8/2 灰白	10YR8/4 浅黄柾	5Y3/1 粗		
162	3区	001	土器	製埴土器?	残 2.2			2.5YR6/6 柾	2.5YR6/6 柾	7.5YR5/3 にぶい混	中砂粗	
163	3区	001	土器	高环	残 2.9			10YR8/3 浅黄柾	10YR8/4 浅黄柾	10YR6/1 灰白	密	
164	3区	001	石器	敲石	長さ 5.5	幅 6.0						
165	3区	3層	土器	甕	(15.0)	残 3.7		5YR6/6 柾	5YR7/6 柾	10YR7/4 にぶい黄柾	粗	
166	3区	3層	土器	甕	(16.7)	残 2.9		10YR4/6 柾	10YR5/4 にぶい黄柾	10YR4/6 柾	粗 (角閃石多量、 1mm以下雲母微 細粒を含む)	牛胸西體 胎土
167	3区	3層	土師器	甕	(13.7)	残 3.55		10YR7/3 にぶい黄柾	10YR6/2 灰黄鏡	10YR7/2 にぶい黄柾	中砂密	
168	3区	3層	土器	甕	残 2.7	底径 (3.35)		2.5Y7/1 灰白	2.5Y6/1 灰白	2.5Y7/1 灰白	中砂粗	底部凹凸
169	3区	3層	土器	甕	残 3.05	底径 (4.4)		10YR7/3 にぶい黄柾	10YR8/3 浅黄柾	10YR7/1 灰白	粗	
170	3区	3層	土器	甕	残 1.75	底径 (7.8)		10YR7/2 にぶい黄柾	5YR7/6 柾	10YR4/1 灰白	粗	
171	3区	3層	土器	高环	残 2.9			7.5YR7/6 柾	10YR8/2 灰白	7.5Y5/2 明鏡	密	
172	3区	3層	土器	高环	残 4.2			10YR8/3 浅黄柾	10YR8/2 灰白	2.5Y5/2 暗灰黄	粗	
173	3区	3層	土器	高环	残 6.15			2.5Y8/3淡 黄	10YR8/2 灰白	10YR5/6 灰白	粗	
174	3区	3層	土器	甕	残 3.2			2.5Y5/2暗 灰黄	10YR5/4 にぶい黄柾	10YR4/1 灰白	中砂粗 (云母微 細粒含む)	
175	3区	3層	土師器	羽釜	残 2.4			7.5YR5/6 明鏡	7.5YR6/6 柾	7.5YR5/6 明鏡	粗	
176	3区	3層	須恵器	环	残 1.7	高台径 (9.9)		N7/0 灰白	N6/0 灰	N6/0 灰	密	
177	3区	3層	須恵器	甕	残 3.15			2.5GY6/1 オリーブ灰	7.5Y7/1 灰白	N7/0 灰白	密	

## 【付表 観察表 令和3年度調査】

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 括弧内は復元径)			色調			胎土	備考
					口径	器高	底径・高台径	内面	外面	断面		
178	1区	022	瓦器	椀		残 0.7	底径 (5.0)	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y7/4 浅黄	密	
179	1区	048	瓦器	椀	0.0	残 1.2		10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	密	
180	1区	049	瓦器	皿	(8.0)	残 1.5		5Y3/1 オリーブ黒	5Y3/1 オリーブ黒	2.5Y8/2 灰白	密	
181	1区	051	須恵器	杯身	(13.0)	残 3.3		N7/ 灰白	2.5Y5/1 黄灰	2.5Y5/1 灰灰	密	
182	1区	062	土器	高环		残 5.1		5YR6/6 相	2.5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	密	
183	1区	062	土器	壺	(18.0)	残 3.1		10YR6/3 にぶい黄粉	5YR6/6 相	10YR6/4 にぶい黄粉	密	
184	1区	062	土器	甕				7.5YR7/4 にぶい相	2.5Y4/1 黄灰	7.5YR6/6 相	密	
185	1区	062	土器	壺		残 1.8		7.5YR6/6 相	5YR7/6 相	7.5YR6/6 相	密	
186	1区	064	土器	甕		残 1.8	底径 (3.8)	7.5YR7/6 相	2.5Y5/1 黄灰	7.5YR7/6 相	密	
187	1区	064	土器	高环		残 2.7		7.5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	密	
188	1区	063	土器	甕		残 2.4	底径 (8.0)	10YR7/3 にぶい黄粉	10R6/6 赤	7.5YR6/6 相	密	
189	1区	063	土器	羽釜				7.5YR6/6 相	7.5YR6/4 にぶい相	5YR7/4 にぶい相	密	
190	1区	1・2層	染付	椀		残 3.3	底部径 (4.0)	7.5GY8/1 明緑灰	7.5GY7/1 明緑灰	5Y8/1 灰白	密	
191	1区	1・2層	瓦器	椀		残 0.9	高台径 (4.6)	5Y4/1 灰	10YR5/3 にぶい黄粉	2.5Y7/2 灰黄	密	
192	1区	1・2層	須恵器	甕	(32.0)	残 2.1		2.5Y7/1 灰白	5Y4/1 灰	2.5Y5/1 赤灰	密	
193	2区	001	土器	鉢	(16.8)	残 5.6		2.5Y7/3 浅黄	7.5YR6/6 相	5YR6/6 相	密	
194	2区	001	土器	鉢	(14.6)	残 4.8		7.5YR7/3 にぶい黄粉	10YR5/2 灰黄褐	5YR6/6 相	密	
195	2区	001	土器	壺	(21.8)	残 4.1		10YR7/4 にぶい黄粉	5YR6/8 相	2.5Y6/1 黄灰	密	
196	2区	001	土器	高环		残 5.3	底径 9.2	5YR6/8 相	5YR6/8 相	5YR6/8 相	透かし	
197	2区	001	土器	甕		残 2.4	底径 (2.8)	7.5YR6/4 にぶい相	5YR5/6 明赤褐	7.5YR5/3 にぶい相	密	
198	2区	001	土器	甕		残 2.2	底径 (4.0)	2.5Y5/2 暗赤黄	10YR4/1 暗赤褐	10YR6/3 にぶい黄粉	密	
199	2区	001	須恵器	杯身	(12.0)	残 2.2		7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1 灰	7.5Y6/1J 灰	密	
200	2区	001	須恵器	高环		残 2.4		N7/ 灰白	N6/ 灰	N7/ 灰白	密	
201	2区	001	須恵器	特殊器台							透かし	
202	2区	001	土器	大型鉢	(31.8)	残 7.5		10YR6/4 にぶい黄粉	10YR7/3 にぶい黄粉	10YR5/1 黄灰	密	
203	2区	001	土器	甕		残 5.1		10YR7/3 にぶい黄粉	5YR6/6 相	10YR8/2 灰白	や少粗	
204	2区	001	土器	甕		残 4.6		10YR7/4 にぶい黄粉	5YR6/6 相	10YR7/4 にぶい黄粉	密	
205	2区	001	土器	甕		残 2.2	底深径 2.6	5YR6/8 相	10YR6/6 明黄褐	10YR5/2 灰黄褐	密	
206	2区	001	土器	甕		残 2.0	底部径 (3.0)	10YR7/4 にぶい黄粉	7.5YR7/4 にぶい相	2.5Y4/1 密 (白灰塗母を 含む)		

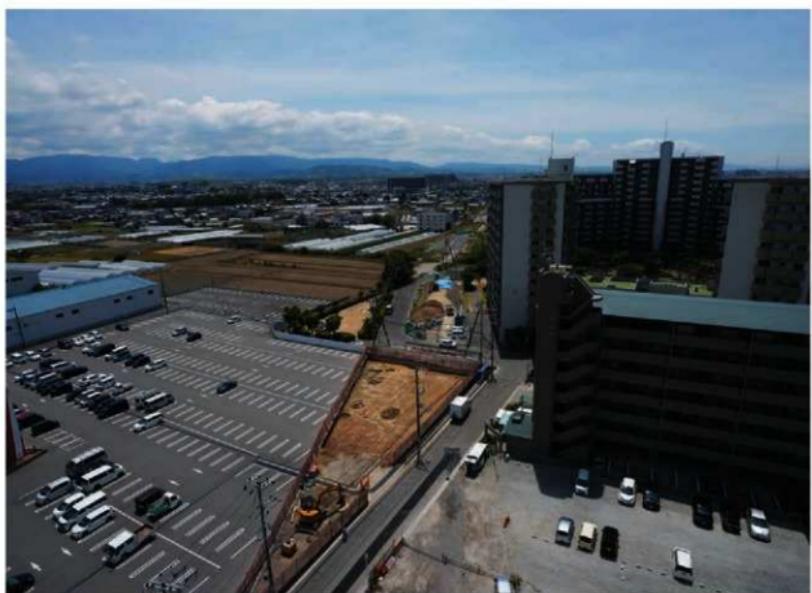
測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 管孔内は復元径)			色調			胎土	備考
					口径	器高	底径・高台径	内面	外面	断面		
207	2区	001	土器	高环	残 3.9			5YR6/8 相	5YR7/6 相	10YR6/3 にぶい黄相 密		
208	2区	001	土器	小型器台	残 2.1			10YR7/4 にぶい黄相 灰	2.5YR4/1 黄	10YR7/6 明黄褐	やや密	
209	2区	001	土器	製造土器	残 3.5			7.5YR7/3 にぶい相	10YR8/4 浅黄相	2.5Y6/2 相 (3mm以下の白 灰黄)		
210	2区	001	土器	高环	残 9.5			10YR7/4 にぶい黄相 相	7.5YR7/6 相	2.5Y6/1 黄	密	
211	2区	002	土器	甕	残 4.9	底径 3.0		10YR7/2 にぶい黄相 相	5YR6/6 相	7.5YR6/3 にぶい相 密		
212	2区	003	土器	甕	(18.0)	残 4.4	—	10YR7/2 にぶい黄相 相	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	密	
213	2区	003	土器	甕	—	—	—	10YR7/2 にぶい黄相 相	7.5YR6/4 にぶい相	7.5YR6/6 相	密 (母変を含む)	
214	2区	003	土器	小型丸底甕	(12.0)	残 4.1	—	5YR6/6 相	5YR6/6 相	5YR6/6 相	密	
215	2区	003	土器	甕	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄相 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	10YR5/4 にぶい黄相 密	やや密	
216	2区	003	土器	甕	(14.0)	残 3.9	—	10YR7/4 にぶい黄相 相	7.5YR7/6 相	7.5YR5/2 灰相	密	
217	2区	003	土器	甕	(15.0)	残 4.7	—	5YR6/6 相	5YR6/8 相	5YR6/6 相	やや粗	
218	2区	003	土器	甕	—	残 3.6	—	5YR6/6 相	5YR6/6 相	10YR6/1 相	密	
219	2区	003	土器	甕	—	残 5.1	底部 2.9	10YR6/2 灰黄褐	5YR6/4 にぶい相	7.5YR7/3 にぶい相	密	
220	2区	003	土器	甕	—	残 3.1	底径 (4.0)	5YR6/8 相	10YR7/2 にぶい黄相 相	10TR4/1 相	やや密	
221	2区	003	土器	甕	—	残 3.0	底径 (5.0)	7.5YR7/4 にぶい相 相	2.5YR6/4 にぶい相	7.5YR7/4 にぶい相	粗	
222	2区	003	土器	甕	—	残 2.7	底径 3.5	7.5YR4/2 灰黄褐	10YR7/2 にぶい黄相 相	7.5YR5/2 灰相	密	
223	2区	003	土器	甕	—	残 2.2	底径 3.4	10YR7/3 にぶい黄相 相	5YR6/6 相	10YR7/4 にぶい黄相 相	やや粗	
224	2区	003	土器	甕	—	残 1.9	底径 (3.8)	5YR6/8 相	5YR6/8 相	5YR6/8 相	粗	
225	2区	003	土器	甕	—	残 2.5	底径 (3.0)	7.5YR6/4 にぶい相 相	10YR5/2 灰黄褐	10YR5/2 灰黄褐	密	
226	2区	003	土器	甕	—	残 1.8	底径 3.1	5YR6/6 相	5YR6/6 相	7.5YR6/2 灰相	密	
227	2区	003	土器	甕	—	残 3.9	底径 (4.0)	10YR5/1 相	7.5YR6/4 にぶい相 相	10YR7/2 にぶい黄相 相	密	
228	2区	003	土器	甕	—	残 2.6	底径 4.3	5YR6/6相	2.5YR6/6 相	10YR6/1 相	やや粗	
229	2区	003	土器	甕	—	残 5.5	—	7.5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	10YR6/2 灰黄褐	密	
230	2区	003	土器	甕	—	残 3.1	—	5YR6/6 相	5YR6/6 相	5YR6/6 相	やや粗	
231	2区	003	土器	甕	—	—	—	10YR7/3 にぶい黄相 相	5YR6/5 相	10YR6/2 灰黄褐	密	
232	2区	003	土器	甕	—	—	—	7.5YR6/4 にぶい相 相	5YR6/6 相	5YR6/6 相	密	
233	2区	003	土器	口縁	—	—	—	7.5YR7/6 相	7.5YR6/6 相	7.5YR7/6 相	密	
234	2区	003	土器	高环	—	残 7.1	—	5YR6/8 相	5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	密	
235	2区	003	土器	高环	—	残 7.8	—	5YR7/6 相	5YR7/6 相	7.5YR6/6 相	粗	
236	2区	003	土器	高环	—	残 4.8	—	2.5YR6/6 相	2.5YR6/6 相	5YR4/1 相	透かし	

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量 (cm / 括弧内は復元径)			色調			胎土	備考
					口径	器高	底径	高台径	内面	外面	断面	
237	2区	005	土器	甕	残 1.4	底径 (3.0)	7.5YR8/3 浅黄粉	7.5YR8/3 浅黄粉	2.5Y3/1 黒褐	密		
238	2区	005	土器	甕	残 3.0	底径 (4.0)	5YR6/6 相	5YR6/6 相	5YR6/4 相	にぶい相	密	
239	2区	005	土器	壺			5YR6/6 相	5YR6/6 相	5YR6/6 相	密		
240	2区	006	土器	甕	(16.0)	残 8.0	7.5YR6/6 相	10YR7/3 にぶい黄粉	7.5YR7/6 相	密		
241	2区	007	土器	甕	残 2.4	底径 (5.0)	2.5Y3/1 黒相	7.5YR6/4 にぶい相	5YR6/6 相	密		
242	2区	007	土器	小型器台	残 4.2	脚部直径 (14.0)	5YR6/6 相	5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	透かし	
243	2区	010	土器	甕	(16.0)	残 11.2	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相		
244	2区	010	土器	小型鉢	9.2	7.5	底径 (3.0)	7.5YR7/4 にぶい相	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	密	
245	2区	010	土器	甕	残 2.5	底径 3.9	10YR5/3 浅黄粉	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/2 灰褐		底部凹み	
246	2区	010	土器	小型鉢	残 3.9	底径 (4.0)	5YR6/6 相	7.5YR7/6 にぶい黄褐	10YR5/3 にぶい黄褐	密		
247	2区	010	土器	壺	(17.0)	残 3.8	7.5YR7/6 相	2.5YR6/8 相	7.5YR7/4 にぶい相	密		
248	2区	2層	須恵器	环身	(14.8)	残 3.4	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 密		
249	2区	2層	須恵器	环	残 1.3	高台径 (10.4)	N7/ 灰白	N7/ 灰白	5YR5/1 褐色	密		
250	2区	2層	瓦器	椀	(14.0)	残 2.5	7.5YR4/1 灰	5YR8/1 灰白	5Y8/1 灰白	密		
251	2区	2層	瓦器	椀		残 1.5	底径 (6.8)	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	10YR6/6 明黄褐	密	
252	2区	3層	須恵器	壺?			N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 灰白	N7/ 密		
253	2区	3層	土器	甕	(13.8)	残 3.9	7.5YR7/4 にぶい相	5YR6/6 相	10YR5/2 灰黄褐	密 (カサリ縫を 含む)		
254	2区	4層	土器	甕	(23.0)	残 4.2	5YR6/6 相	10YR7/4 にぶい黄相	10YR6/6 灰黄褐	10YR6/6 相		
255	2区	4層	土器	甕	(16.0)	残 4.4	2.5YR6/6 相	2.5YR6/6 相	7.5YR6/4 にぶい相	7.5YR6/4 相	密	
256	2区	4層	土器	甕	(14.0)	残 2.6	10YR7/4 にぶい相	5YR6/6 相	10YR7/4 にぶい黄相	10YR7/4 相		
257	2区	4層	土器	壺	(20.0)	残 3.0	7.5YR7/4 にぶい相	5YR6/6 相	10YR5/3 にぶい黄褐	密		
258	2区	4層	土器	甕	残 2.1	底径 (5.0)	2.5Y4/1 黄灰	2.5Y4/1 にぶい相	7.5YR7/4 にぶい相	10YR5/2 灰黄褐	相	
259	2区	4層	土器	底部	残 2.8	底径 4.6	2.5YR6/8 相	10YR6/6 灰黄褐	10YR6/3 にぶい赤相	密		
260	2区	4層	土器	底部	残 2.3	底径 (5.0)	2.5Y4/1 黄灰	10YR5/3 にぶい黄褐	7.5YR6/4 にぶい相	密		
261	2区	4層	土器	底部	残 2.3	底径 (4.6)	7.5YR7/4 にぶい相	5YR6/6 相	10YR7/3 にぶい黄相	密		
262	2区	4層	土器	甕	残 2.8	底径 3.0	10YR8/3 浅黄粉	10YR8/3 浅黄粉	10YR8/3 浅黄粉	密		
263	2区	4層	土器	甕	残 2.2	底径 4.2	2.5Y7/1 灰 白	10YR7/3 にぶい相	10YR7/3 明黄褐	相		
264	2区	4層	土器	甕	残 2.8	底径 4.2	10YR6/3 にぶい黄相	7.5YR7/4 にぶい相	2.5YR6/6 相	相		
265	2区	4層	土器	甕	残 2.0	底径 3.2	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	7.5YR7/6 相	相		
266	2区	4層	土器	甕	残 1.9	底径 4.4	7.5YR6/3 にぶい相	7.5YR7/4 にぶい相	5YR6/6 相	相		
267	2区	4層	土器	甕	残 2.3	底径 4.4	10YR7/3 にぶい黄相	5YR6/6 相	10YR6/2 灰黄褐	相		
268	2区	4層	土器	甕	残 2.5	底径 (3.2)	7.5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	7.5YR6/6 相	相		

測定番号	地区	遺構・層位	種類	器種	法量(cm / 穴孔内は復元径)			色調			胎土	備考
					口径	器高	底径・高台径	内面	外周	断面		
269	2区	4層	土器	壺				5YR6/6 橙	10YR7/3 にぶい・黄橙	10YR5/2 灰黄褐	密	
270	2区	4層	土器	高环		残6.4		10YR8/2 灰白	7.5YR7/6 橙	10YR6/1 褐灰	密	
271	2区	4層	土器	高环				7.5YR7/6 橙	7.5YR7/6 橙	10YR6/4 にぶい・黄橙	密	
272	2区	4層	石器	石鍬	長さ4.0 1.5	最大幅						サヌカイト

# 図 版





令和2・3年度 第1・2調査区遠景 北から



令和3年度 第1調査区遠景 南東から



図版一 令和元年度調査 A・B区 全景・壁面



A・B区  
全景  
左下が北



A区トレンチ  
南壁  
北から



B区  
東壁  
西から

図版二 令和元年度調査  
A・B区 遺構



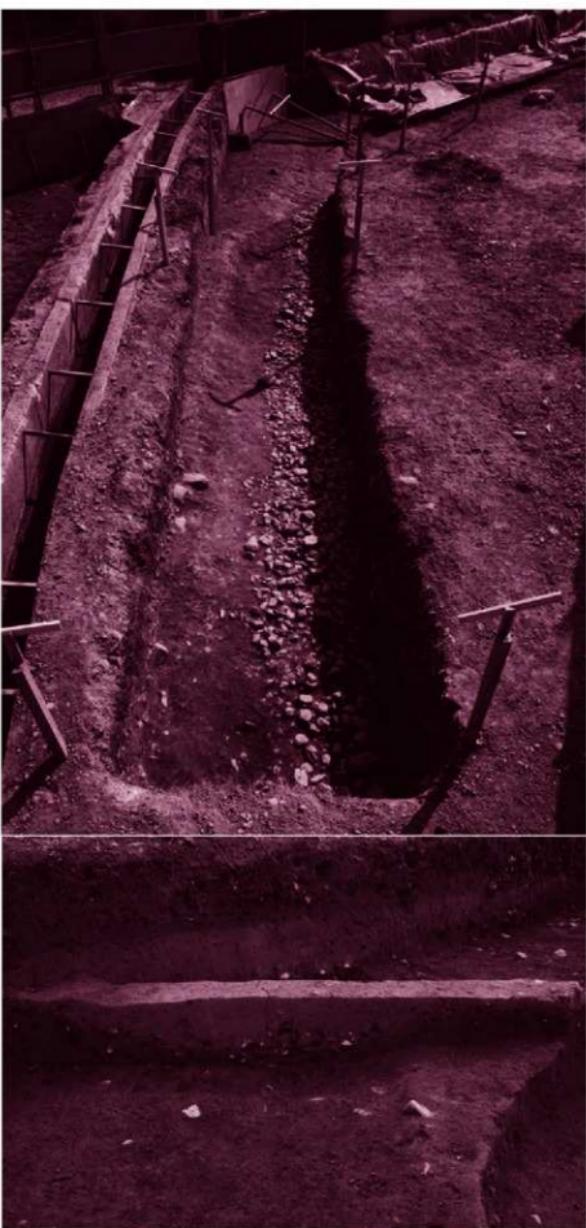
A区  
第1面  
西から



B区  
第1面  
南から



B区  
003 溝東半  
北西から



B区  
003 溝西半  
北西から

B区  
003 溝断面  
北西から

図版四 令和元年度調査  
B区 遺構(一)



B区  
第2面  
北から



B区  
007 柱穴  
南から



B区  
016 溝  
西から

図版五 令和2・3年度調査 第一二調査区 全面・壁面・遺構

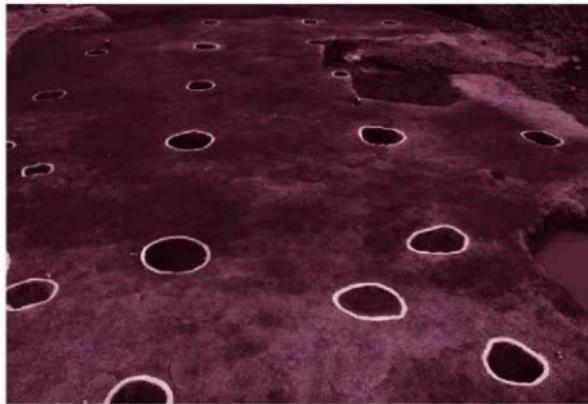


第1・2調査区  
全景  
上が東

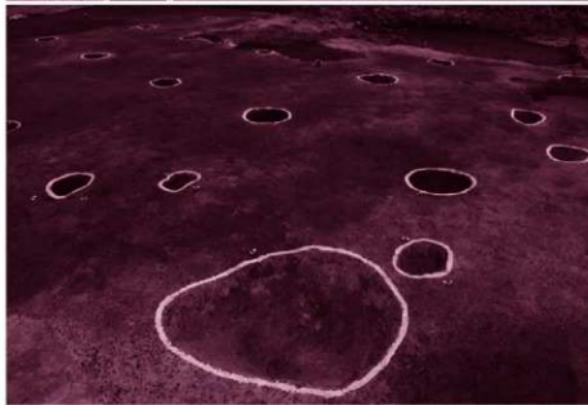
第1・2調査区  
東壁断面  
西から

第1・2調査区  
第1面  
北西から

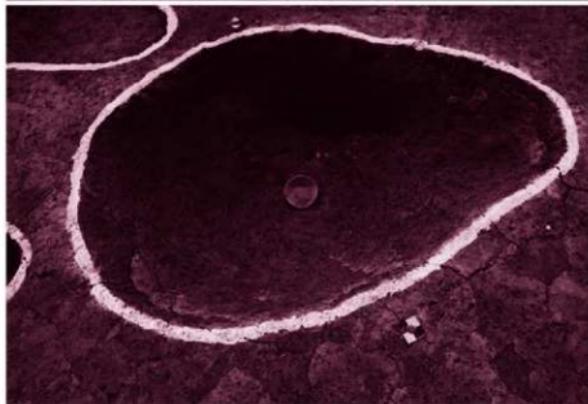
図版六 令和2・3年度調査 第一二調査区 遺構（一）



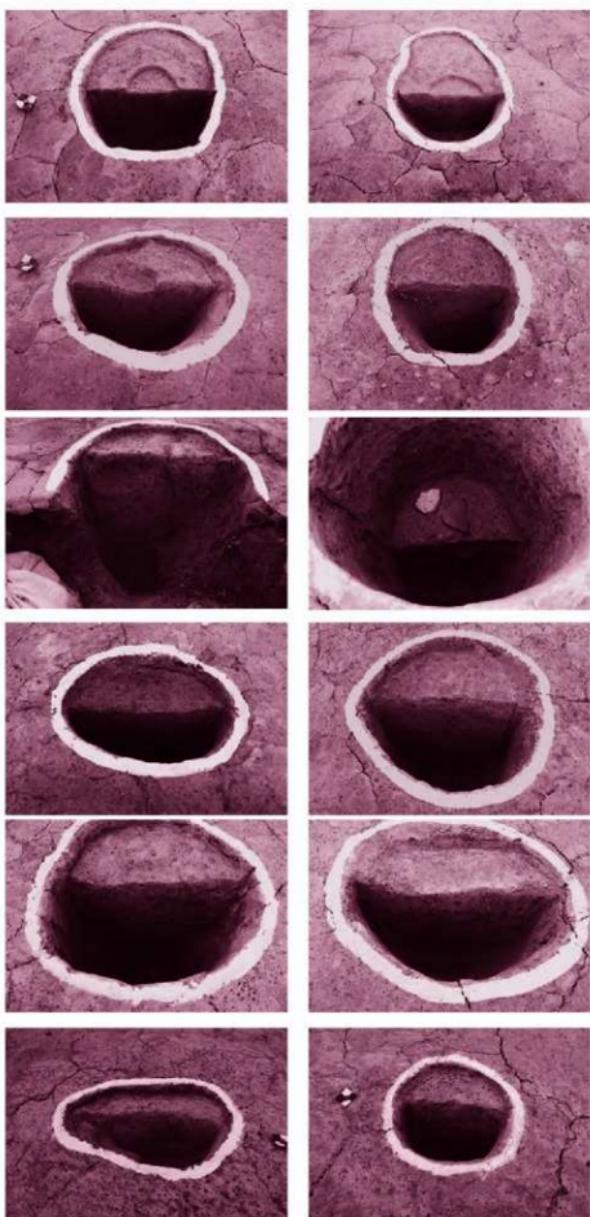
第1・2調査区  
掘立柱建物1  
南西から



第1・2調査区  
掘立柱建物1  
西から



第1・2調査区  
081 土坑  
東から



第1・2調査区

掘立柱建物1

077 北から (左上)、  
075 北から (右上)、  
066 西から (左下)、  
065 西から (右下)

第1・2調査区

掘立柱建物1

074 東から (左上)、  
070 西から (右上)、  
068 西から (左下)、  
069 西から (右下)

第1・2調査区

掘立柱建物1

072 南から (左上)、  
076 南から (右上)、  
086 南から (左下)、  
087 南から (右下)

図版八 令和2・3年度調査第一・二調査区 遺構（三）



第1・2調査区  
落ち込み 001 断面  
北西から

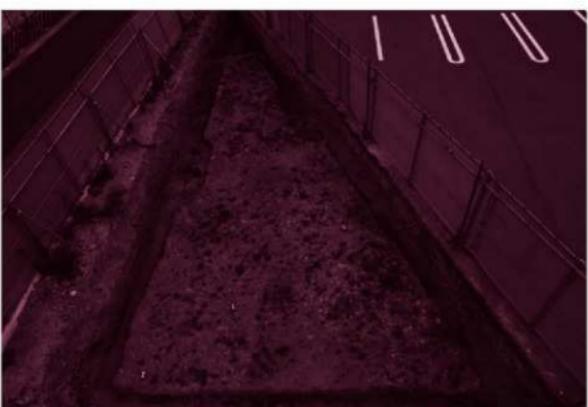


第1・2調査区  
落ち込み 001  
西から



第1・2調査区  
079 自然流路  
南東から

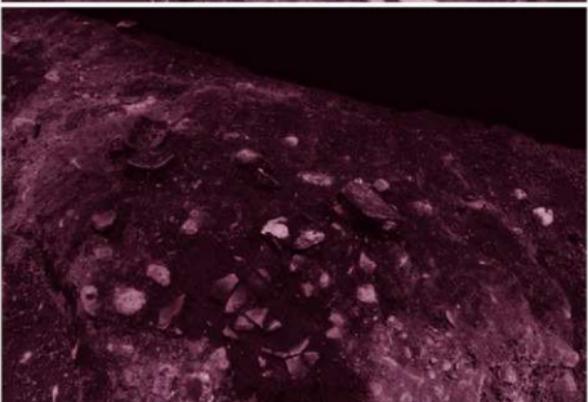
図版九 令和2・3年度調査第一・二調査区 遺構（四）



第2調査区  
全景  
南西から



第1・2調査区  
092土坑  
南から



第1・2調査区  
092土坑 出土状況  
南から

図版一〇 令和2・3年度調査  
第三調査区 全景・壁面・遺構



図版一一 令和3年度調査 第一調査区 全景



第1調査区 全景 南東から



第1調査区 全景 上が北東

図版一二 令和3年度調査  
第一調査区  
遺構（一）



第1調査区  
南壁断面  
北東から

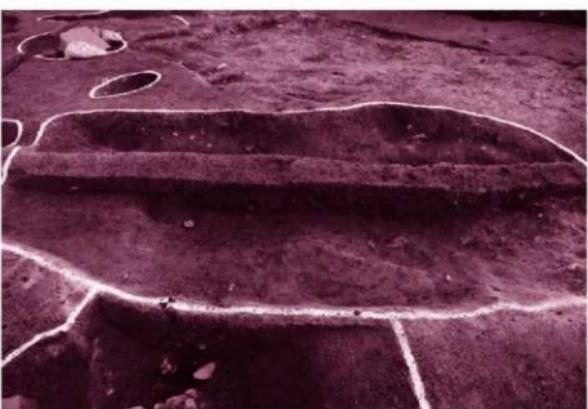


第1調査区  
勧溝群  
北西から



第1調査区  
051土坑  
北東から

図版一三 令和3年度調査 第一調査区 遺構(一)



図版一四 令和3年度調査 第二調査区 遺構・全景



第2調査区  
全景  
上が北東



第2調査区  
全景  
南東から



第2調査区  
西壁断面  
東から

図版一 令和3年度調査 第二調査区 遺構（一）



第2調査区  
001溝  
東から



第2調査区  
001溝 断面  
西から



第2調査区  
001溝 断面  
東から



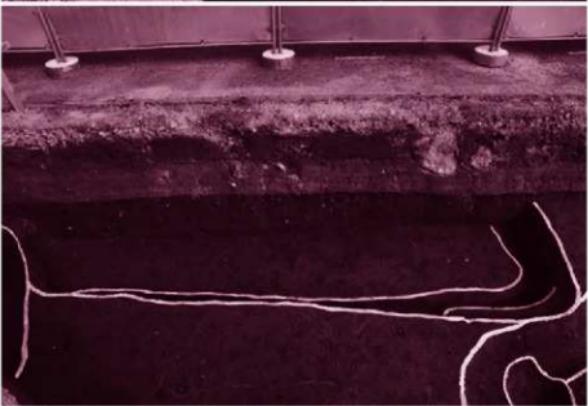
第2調査区  
003土坑  
北から



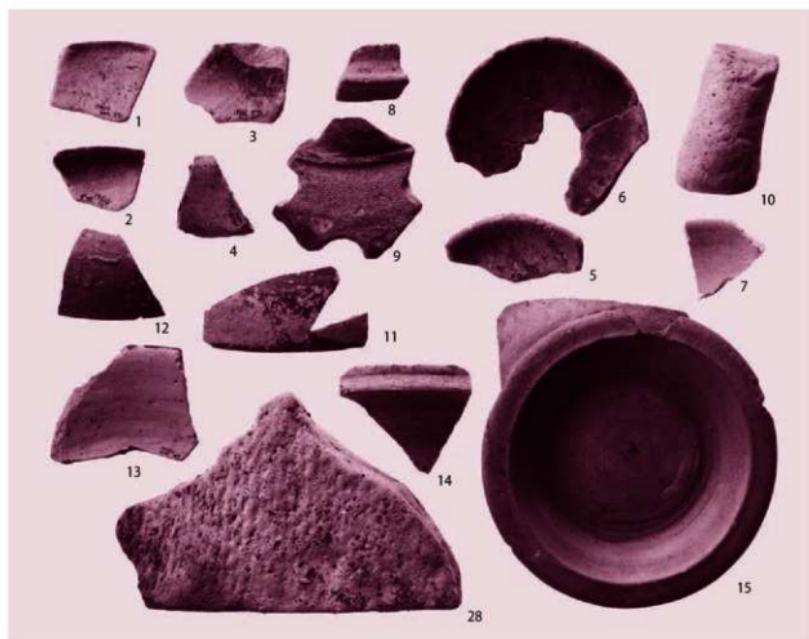
第2調査区  
003土坑 出土状況  
北東から



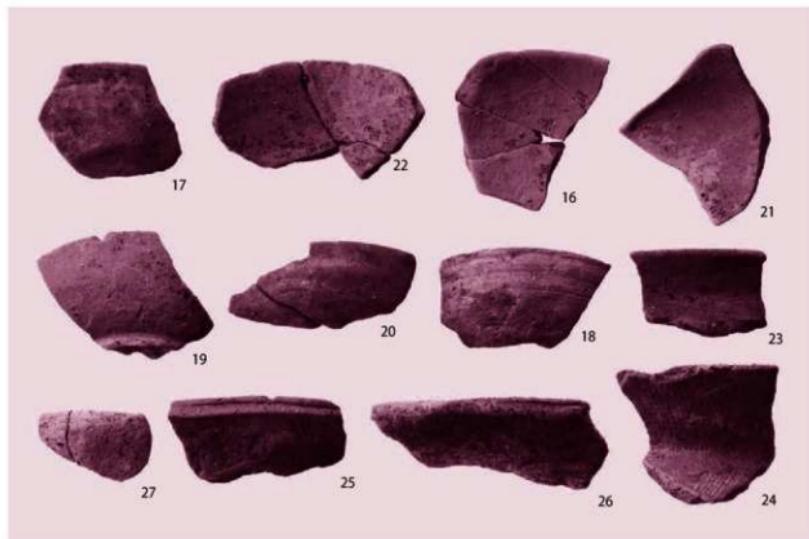
第2調査区  
006土坑  
南東から



図版一八 令和元年度  
A・B区 出土遺物（二）

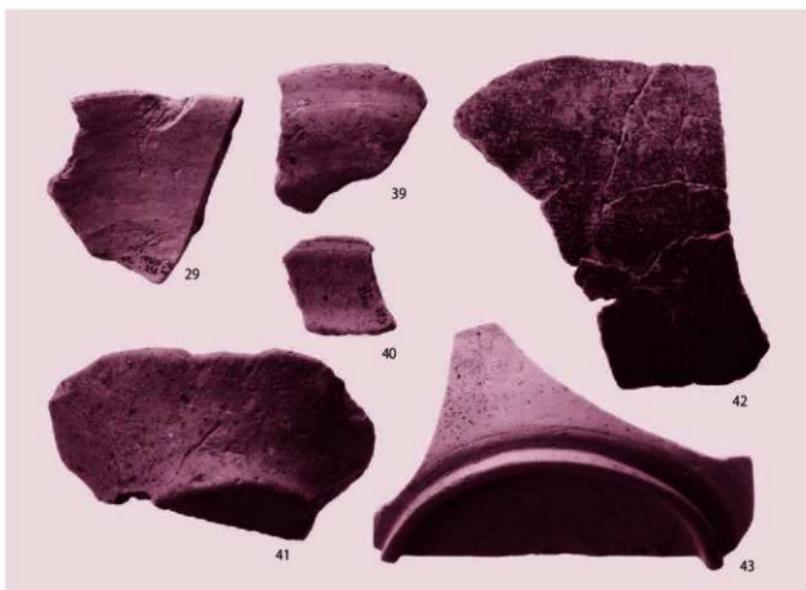


第3・4層出土 瓦器・土師器・須恵器・土製品・瓦

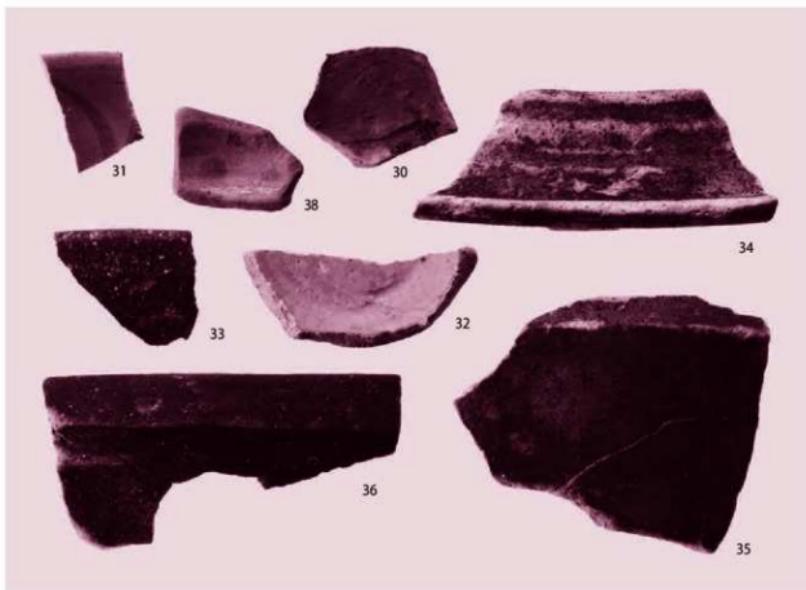


第4層出土 土師器・製塩土器

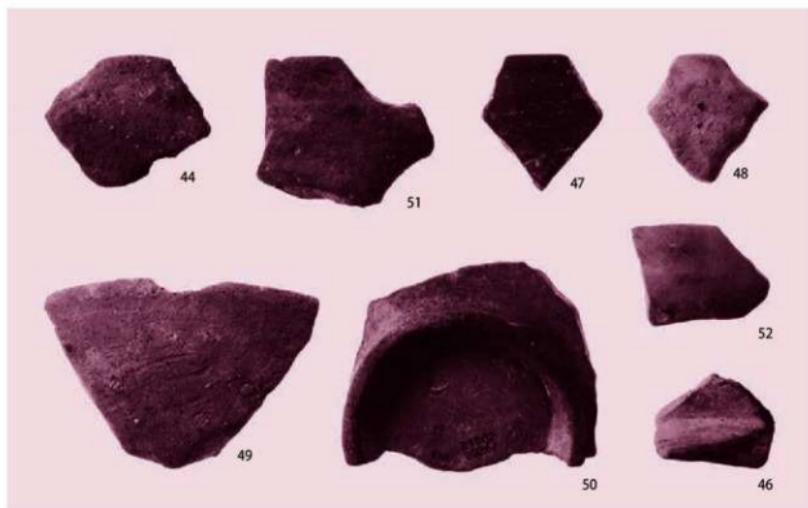
図版一九 令和元年度 A・B区 出土遺物(二)



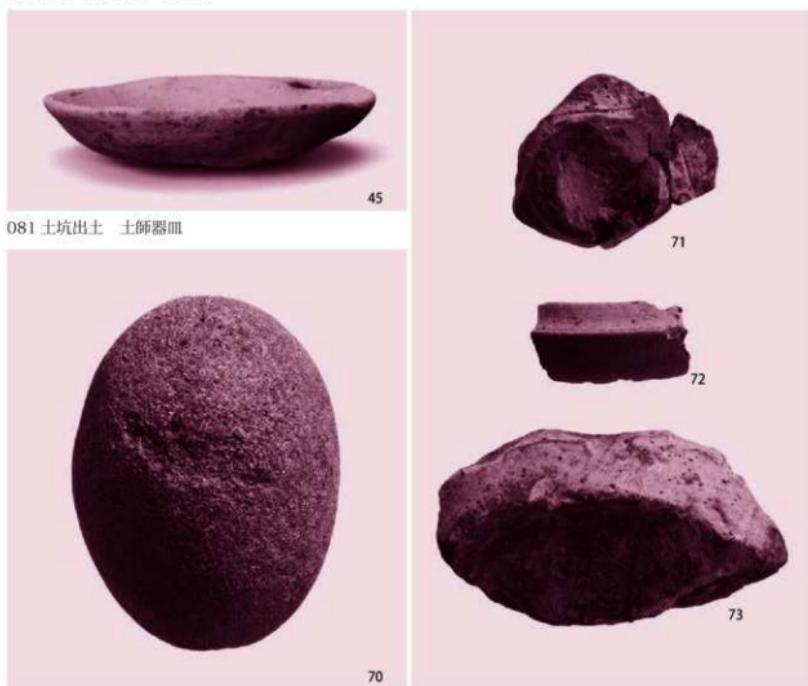
遺構・A区トレンチ・撿乱出土 瓦器・土師器・須恵器・弥生土器



遺構出土 瓦器・青磁・白磁・陶器・瓦質土器



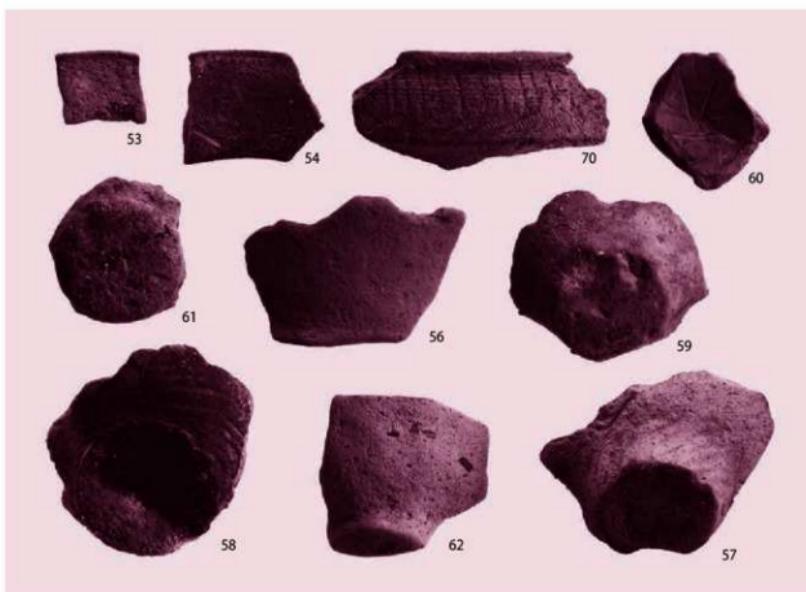
遺構出土 黒色土器・土師器



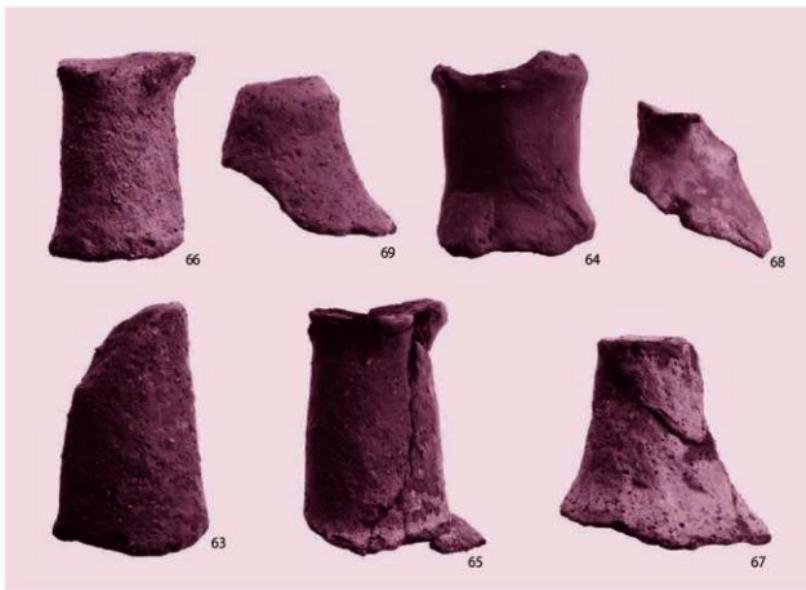
081 土坑出土 土師器皿

079・090 自然流路出土 土器・須恵器

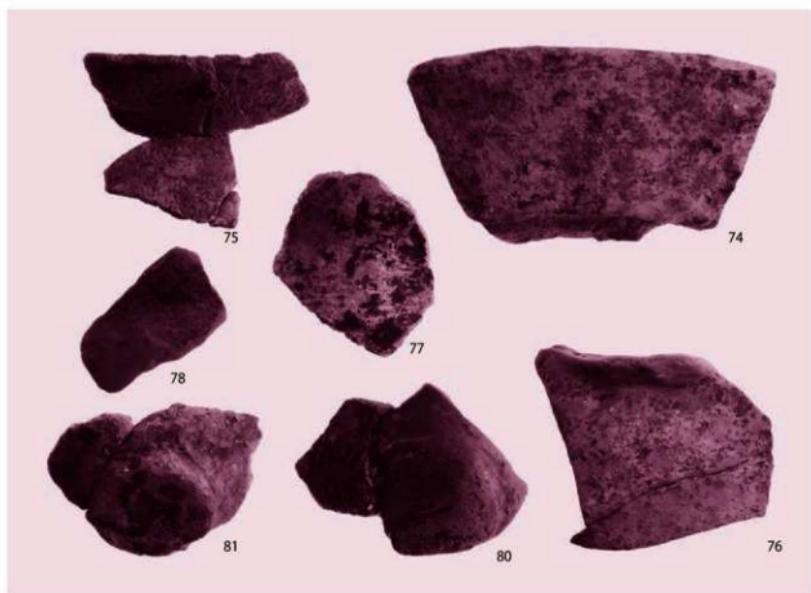
図版二 令和2・3年度 第一・二調査区 出土遺物（二）



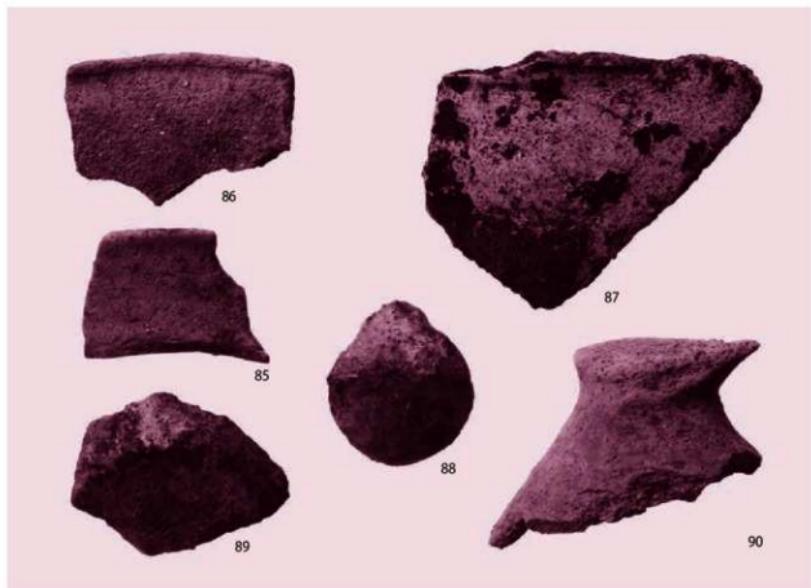
001 落ち込み出土 土器



001 落ち込み出土 土器



092 土坑出土 土器



第1層出土 土器・土師器



092 土坑



092 土坑



092 土坑



092 土坑



001 落ち込み

165

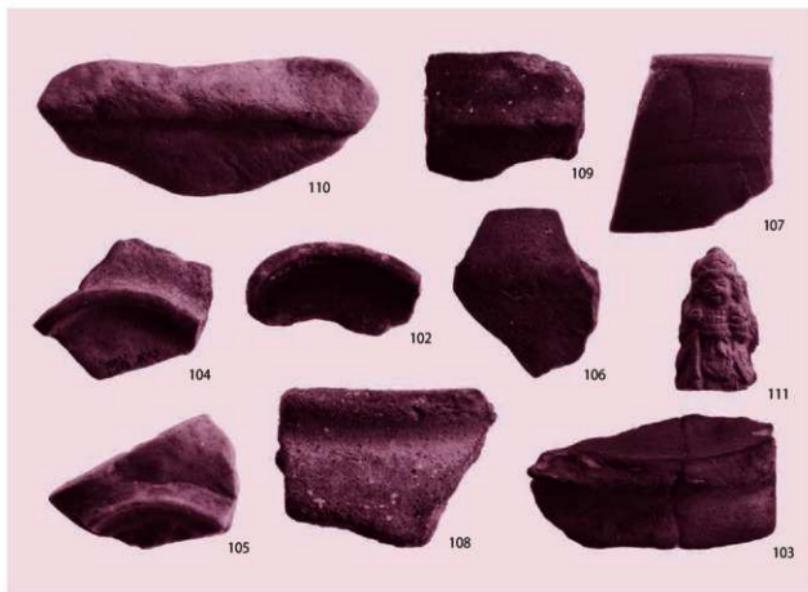


164

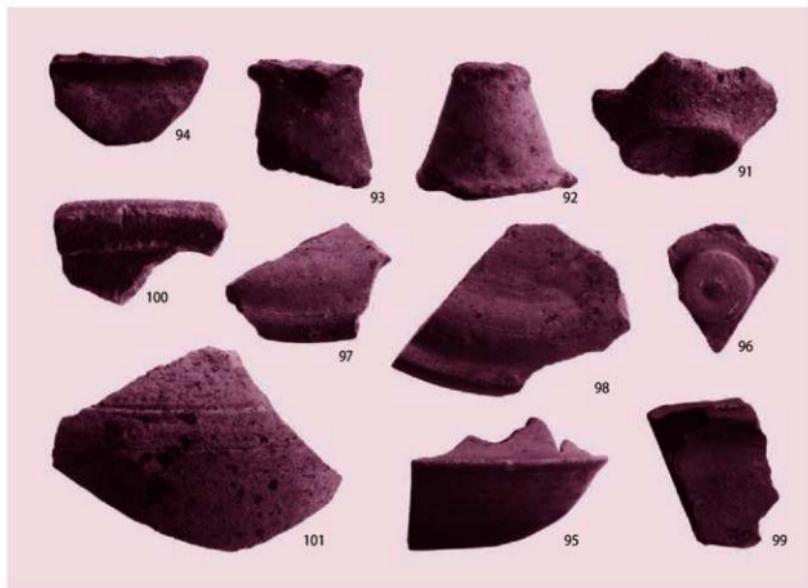


001 落ち込み

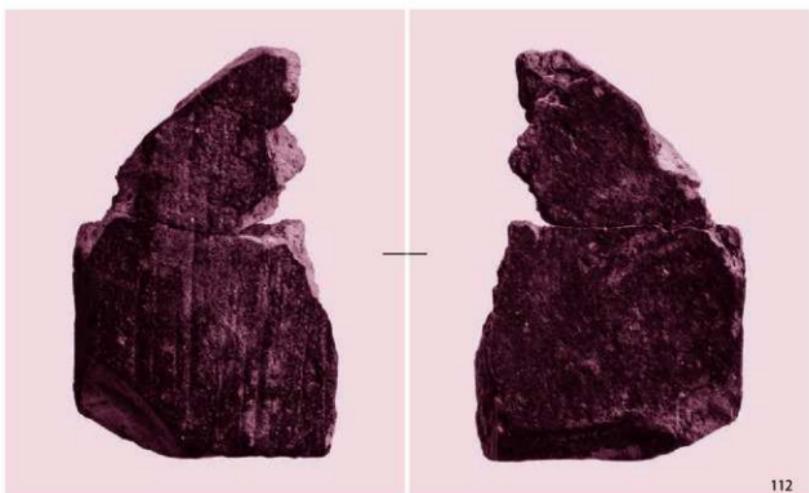
第1・2調査 092 土坑区出土 土師器 第3調査区 001 落ち込み出土 土器・敲石



第2層出土 土器・黑色土器・土師器・瓦質土器・青磁



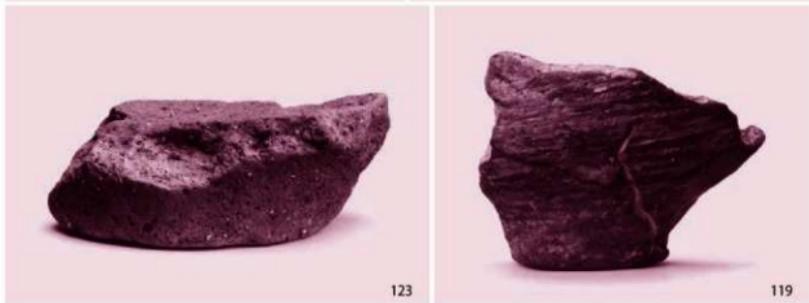
第2層出土 土器・須恵器



112

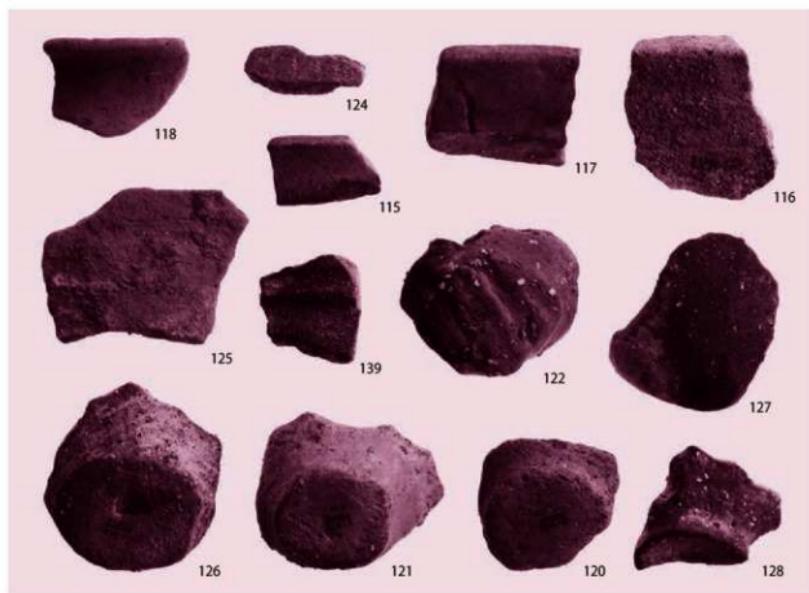


113

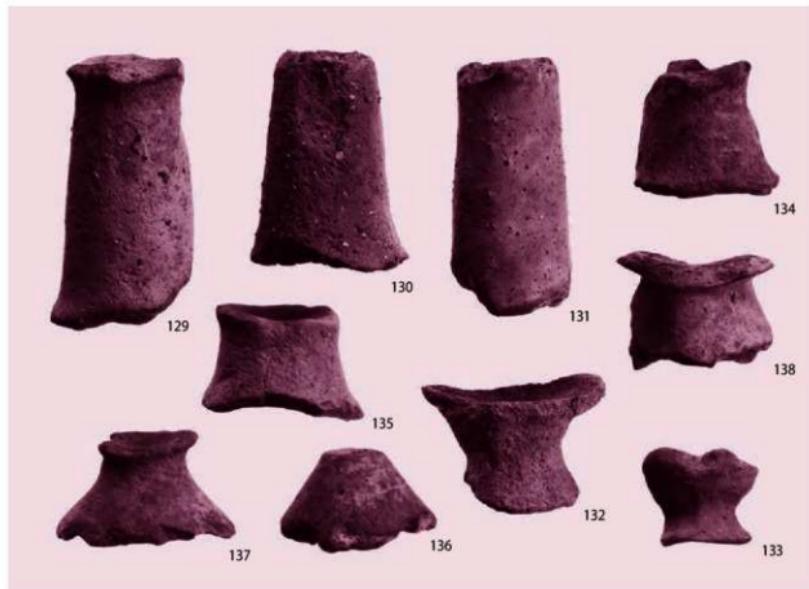


123

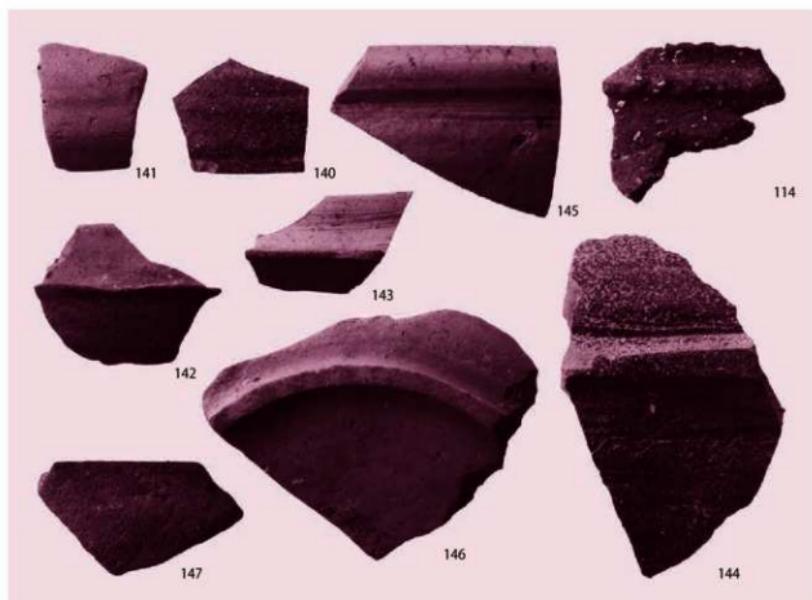
119



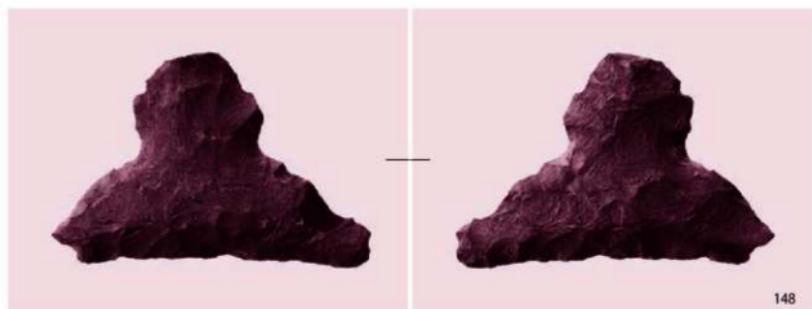
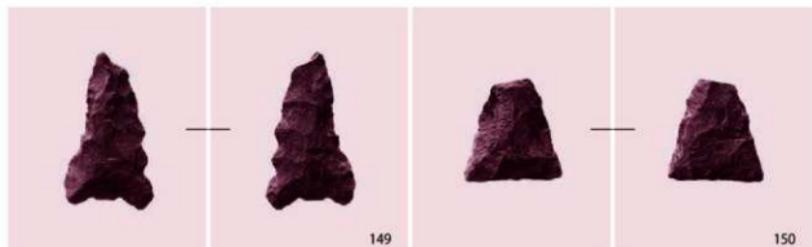
第3層出土 土器



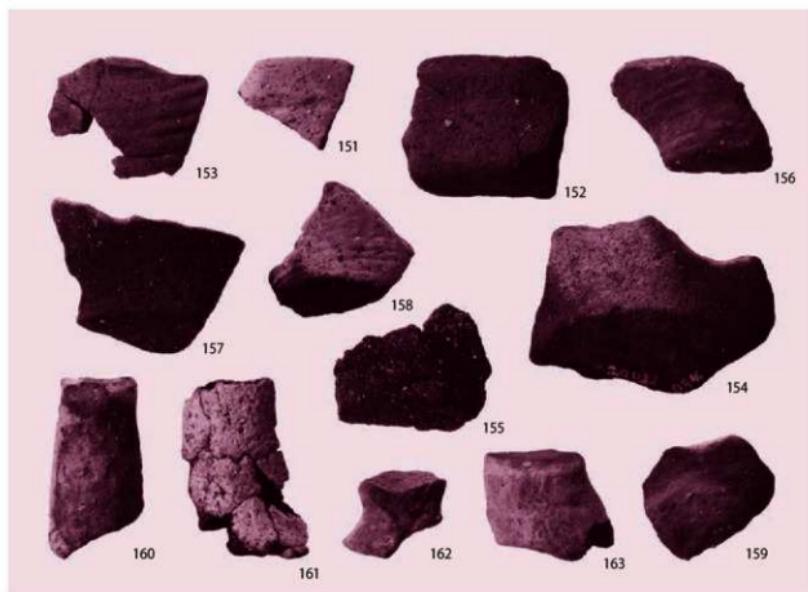
第3層出土 土器



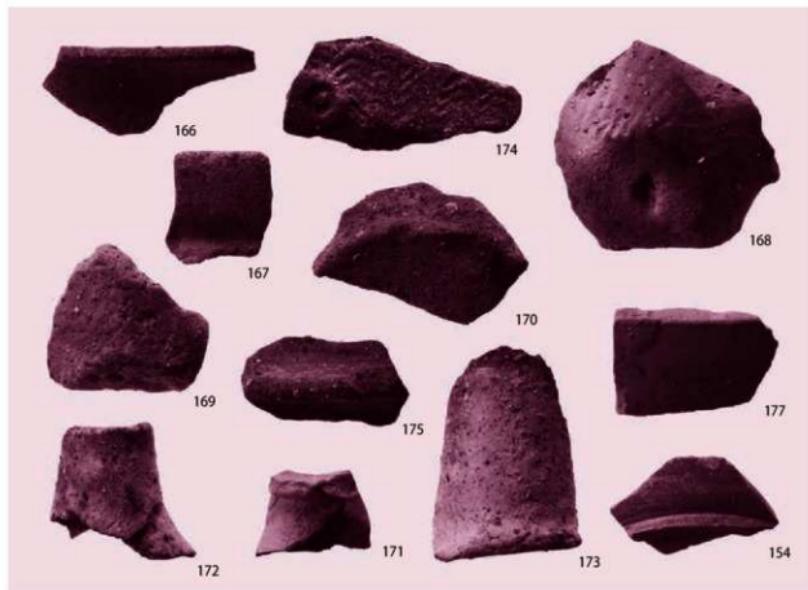
第3層出土 繩文土器・須恵器



第3層出土 石器

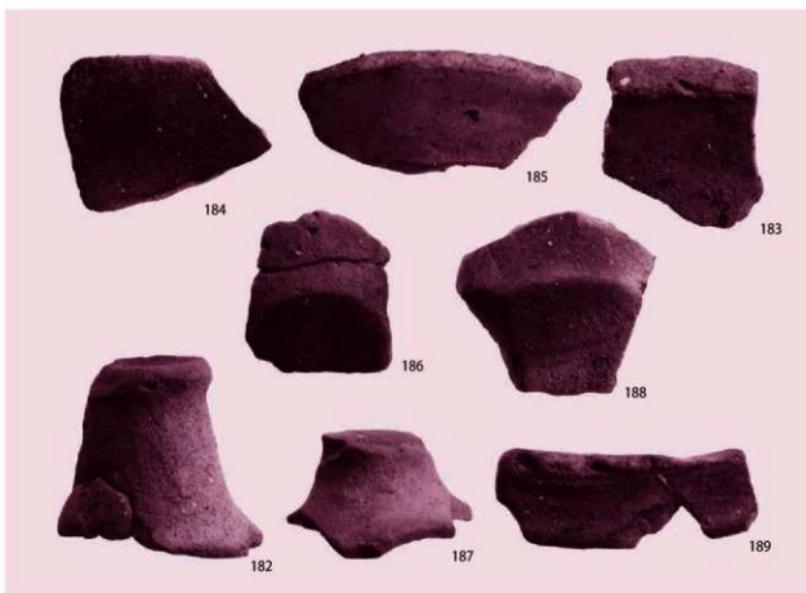


001 落ち込み出土 土器

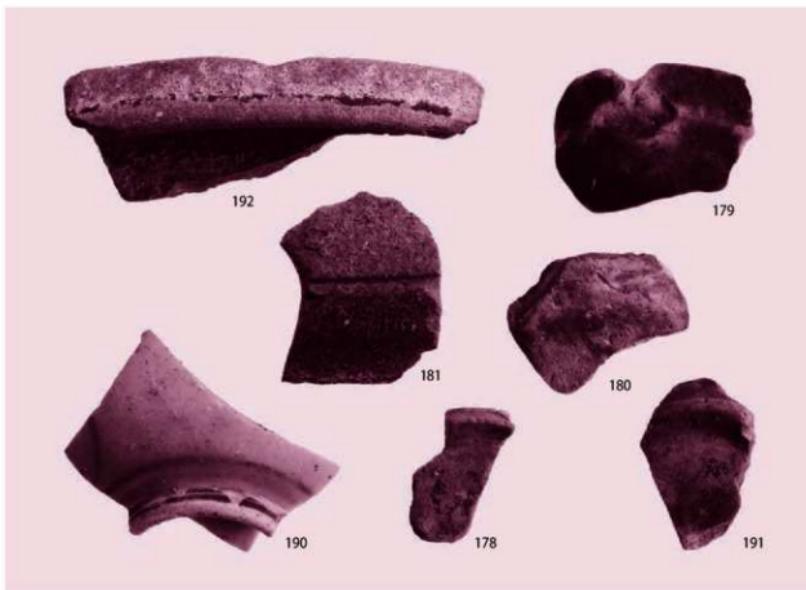


第3層出土 土器・須恵器

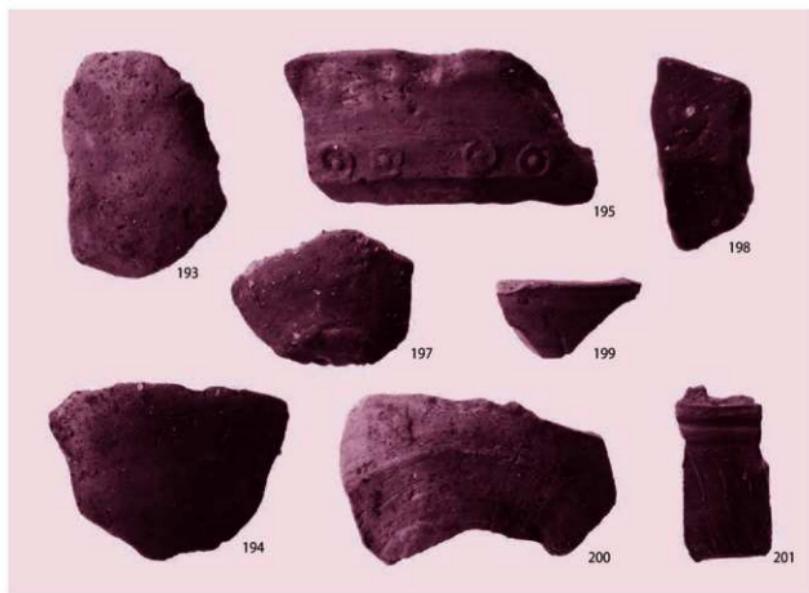
図版二九 令和2・3年度 令和3年度 第一調査区 出土遺物



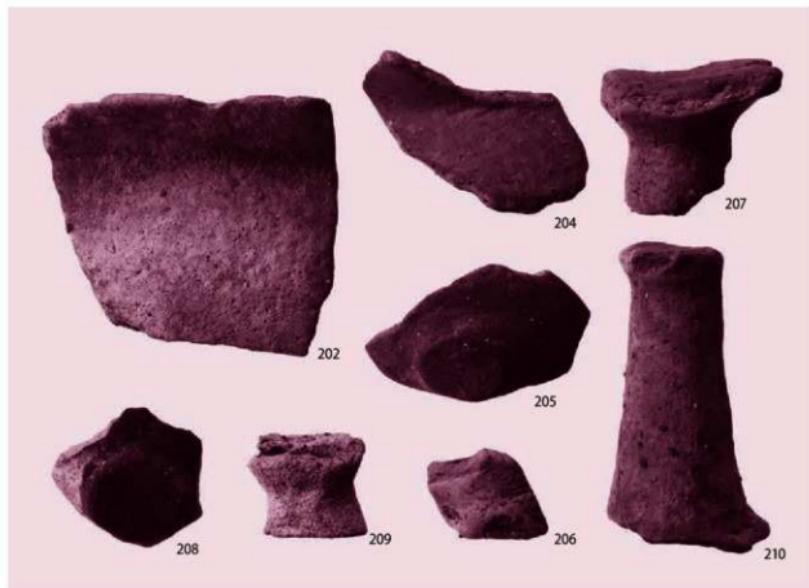
遺構出土 土器



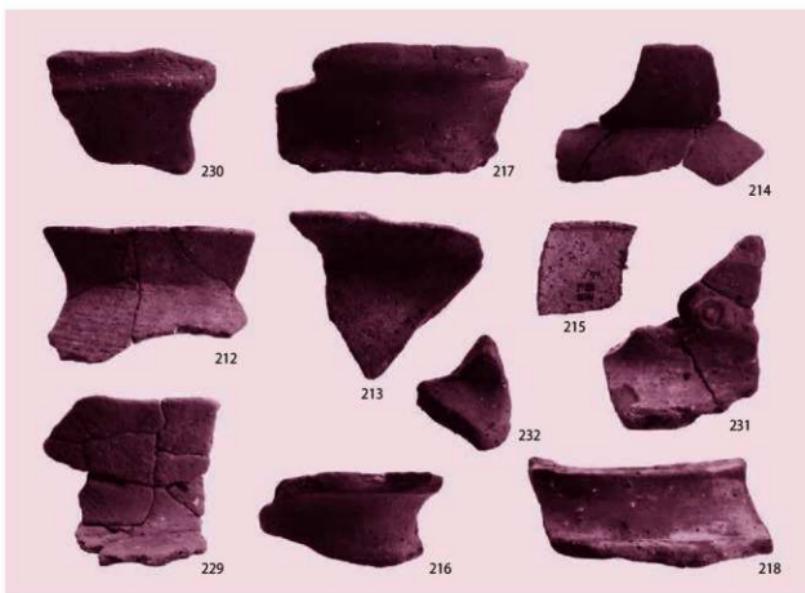
遺構・第1・2層出土 瓦器・染付・須恵器



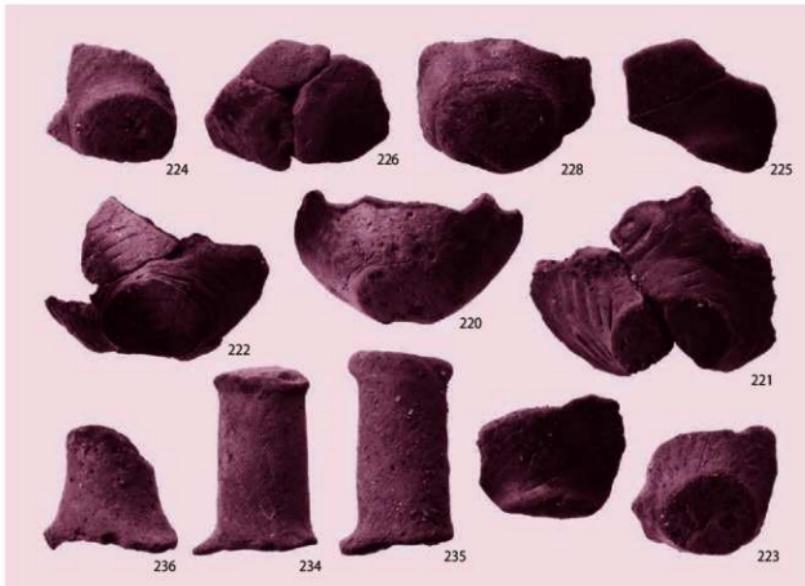
001 溝出土 土器



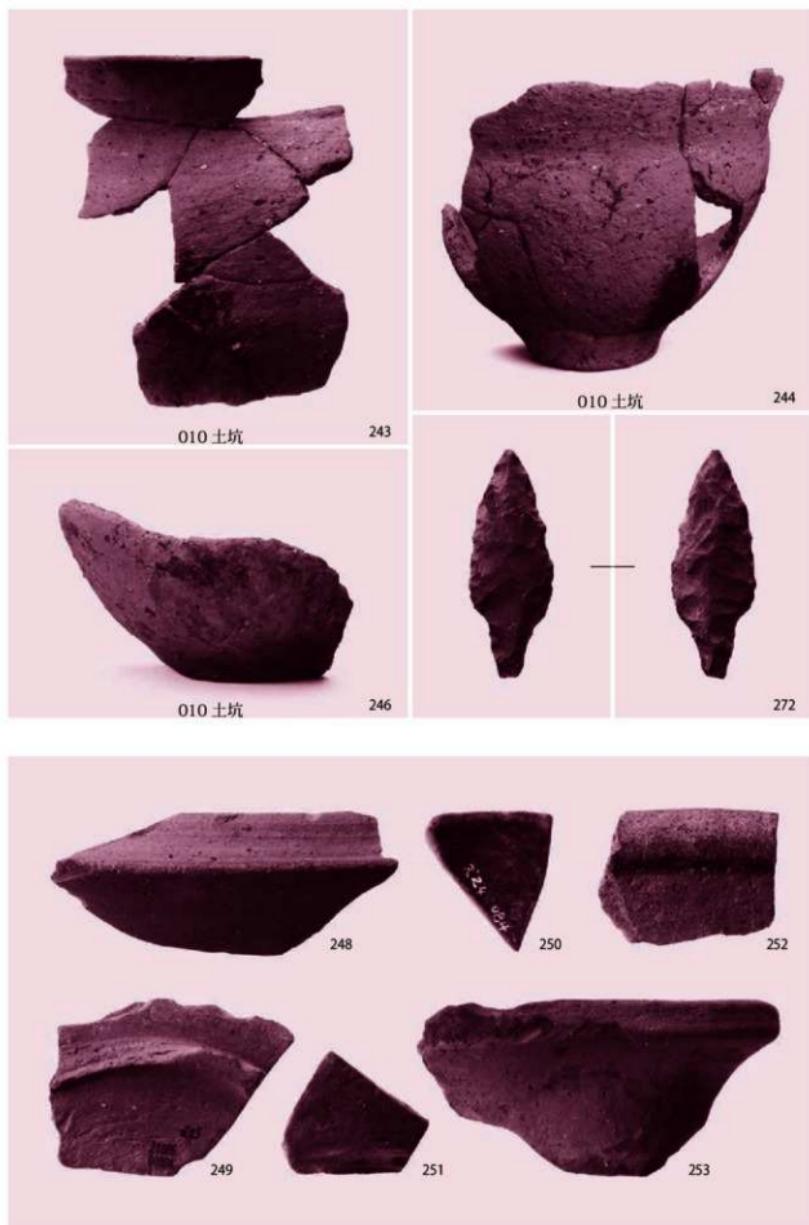
001 溝出土 土器



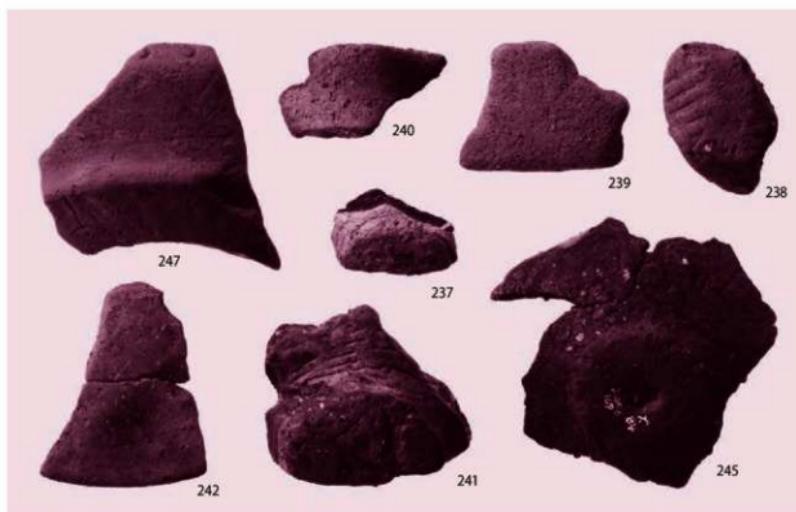
003 土坑出土 土器



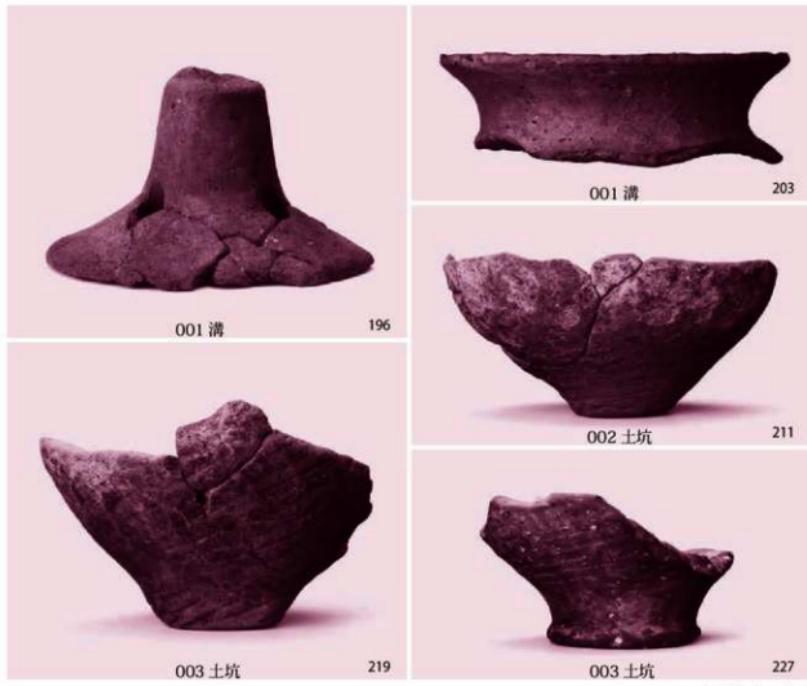
003 土坑出土 土器



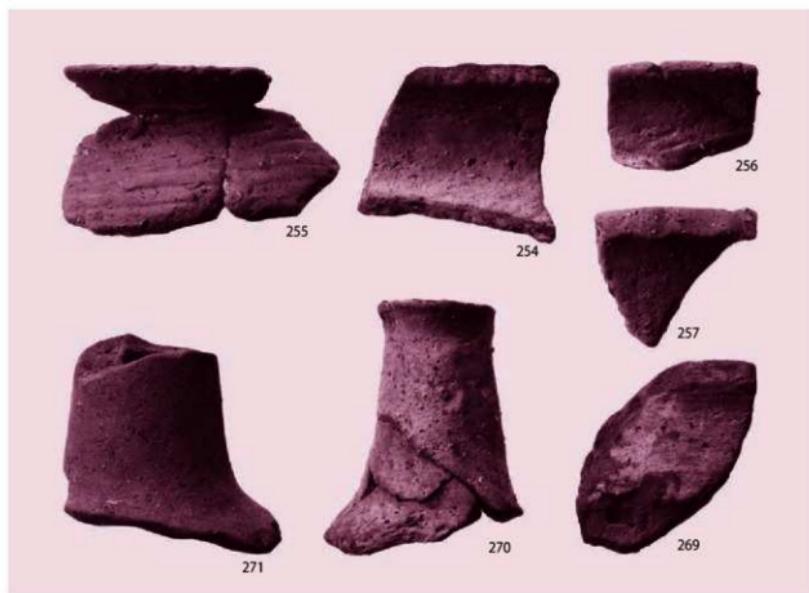
第2・3層出土 土器・須恵器・瓦器



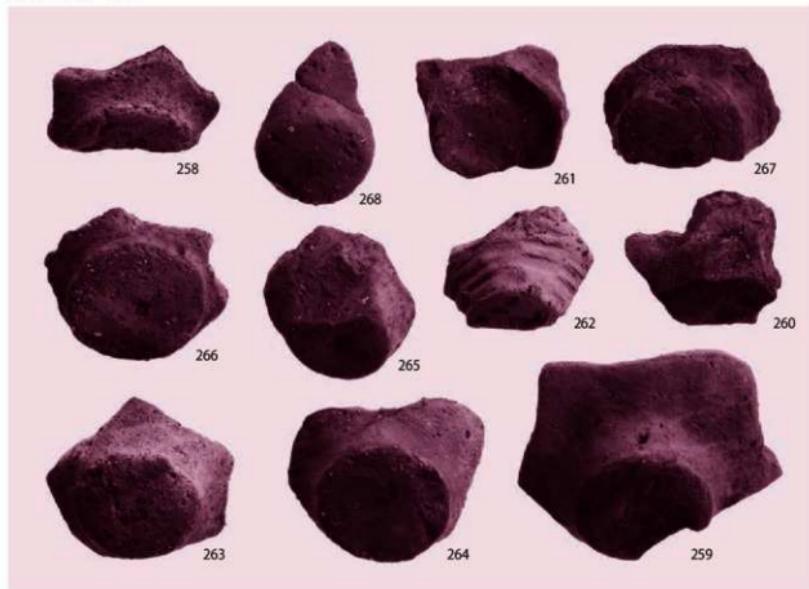
遺構出土 土器



遺構出土 土器



第4層出土 土器



第4層出土 土器

## 報告書抄録

大阪府埋蔵文化財調査報告2022-2

### 府中遺跡Ⅲ

—都市計画道路大阪半和田南海線街路築造事業に伴う発掘調査—

発 行 大阪府教育委員会

〒540-8571 大阪市中央区大手前二丁目  
TEL 06-6941-0351(代表)

発行日 令和5年3月31日

印 刷 株式会社 中島弘文堂印刷所

〒537-0002 大阪市東成区深江南2丁目6番8号